

今年の春ほど春を楽しみし事はなく、今年の夏ほど夏を味ひしことはなし。先月の月ほど月の光を感じしことはなく、近來ほど雲の變化の美を眺めしことはなく、此頃ほど空を仰いで自然と人生の幽玄に打たれしことはなく、又た近頃ほど樹木綠葉の日光に婆娑たる其の美に感ぜしことはなく、又た近來ほど「我」の自由を感じしことはなし。又た近來ほど人生のドラマを感じし事ありじ。

十八日。

愚は愚を知る能はず、不明は明を見る能はず。恐らくは後日に至りて吾の今の愚、不明なるに驚くも恰も我が過去の愚と不明とを驚くが如くなる可し。かくは推理し乍らも猶自ら今の愚と不明の何處にあるや如何にして可なるやを知らず。今、今の愚を感じざるに非らず、今の不明を感じざるに非らず、而も指て明言し能はざるぞ悲しき。強て求めて言へば他日必ず今のエンブレースすることの狭きこと、シンセリテイの度の極めて薄弱なること、不熱心なること、遅頓なることに驚く時ある可し。而も今顧みて如何ともなす能はざるは何等の不思議ぞや。天籟耳をかすめ去つて、未だ深く心根を突かず、悲い哉。

本日ゲーテの「ファウスト」を読む。エンブレースすることの擴がる心地す。

嗚呼ゲーテを読んで何を知りしぞ、何を學びしぞ。知らず少しも知らず、學ばず何事も學ばず。只だ自然人生の秘密界に向つて吾が直覺の大羽翼を擴げしことのや、廣くシンセリテイの感其の強さを増しエンブレースすることの度を加へしを覺ゆるのみ。必ずや然り。

されど吾未だ「ファウスト」を読む程に進歩し居らざることを痛く感ず。カーライルはゲーテの頂ならん。吾已に其の頂を知ること多少。而も眞に其の頂の眞の高位を知らんとせば薩より知らざる可からず。

ゲーテはふもとより教ゆ、吾之を登らざる可からず。

髣髴としてゲーテ、カーライル、エマルソン等がエンブレースする所を想像冥思する時は思はず其サブライムに打たれ、滔々たる天籟の乾坤に漲る心地する也。

詩人は眞の徳を知り、眞の美を知り、眞の自由を享けて眞理の裡にすむなり。

ネチユアに就ては多少エンブレースする所ある心地す、未だ人世の「ドラマ」に就ては茫々漠々の

感なくんばあらず。自然とドラマの間に未だ大なるハーモニーの幽玄を聴く能はず。

「夏の雲」(先の韻文に非らず)の詩想を得たり。散文に作る可し。

十九日、朝。

昨日午後五時過ぎより牛込なる五島盛主子爵の得業祝宴に招かれて参席し暴飲暴食、今朝猶不快なり。後悔止むなし。人は弱き者哉、又た愚なる者なる哉、少しく戒心を怠れば不徳、不経済、不健康、四方より寄せ來り、何時の間にか又た救ふ可からざる墮落の境に陥るなり。吾此頃世事に付て少しく戒心をかきしが爲め、心ならざる不健康と不経済とに陥り、思はず不徳の境にゆく、險なる哉危い哉。

記憶せよ我は詩人なり。實際世間の人に非らず。我に要する所は高潔幽玄の詩想と忍耐不屈の修練とのみ。我が友は詩神のみ、自然のみ、真理のみ。

形骸的關係は時々刻々迫り來りて、吾をして赤條々の大感情を失はしめ奮勵叱咤の氣概を消さしめんと試む。サタン、サタン爾の力は不思議なる哉、爾の法律も亦妖なる哉。

嗚呼嘆ず可き哉人間の心、人間の運命を支配する自然の法則の餘りに不可思議變妙なる、實に人

をして絶望せしむるに足る也。人は恐らくは己を支配する法則の百分の一をも知らざる可し。

人は形骸に住んで自ら知らざるに終はるか、シンセリテイーよりストラッゲルに、ストラッゲルよりエムブレースに、エムブレースよりコンウァクシヨンにフェースに以て眞の生を全ふするか。ストラッゲルの中に悶死するか。要するに人間の生命の経過は此の三者を出でざる可し。生きて茲に來たる必ず其の一を取らざるを得ず。

必ずしも自ら自由に取るを得ざる也。命あり頭上より落下す、又た如何ともすべからざる者比々然るべし。

されど「エンブレース」すること愈々大にして人間愈々大なり。信仰は信仰なり煩悶は煩悶なり。必ずしもエムブレースする所の廣狭に由らずエムブレース愈々進んで愈々煩悶に進むなり。エムブレース愈々廣うして信仰確信愈々其の力を強うする者あり。大人眞人の資格、「シンセリテイー」第一、「エムブレース」第二。

二十日。

吾一たびシンセリテイーの感に悟入するを得し以來、エマルソンとカーライルとウォースワオル

スと一つも其の間に差別を見ることなく等しく我に天光を注入する天才詩人たるを知るに至りしも、未だシエクスピニアとカーライル、ウオーズウォルスとシエクスピニア其の間に通ふ深遠の「ハーモニイ」を感じる能はず、言ひ換ゆれば未だ「人世のドラマ」と「我」を此不可思議なる自然に繋ぐ思想信仰との間に靈妙なる「ハーモニイ」の音調を聞く能はざる也。

エマルソン曰く I have sometimes thought that he would render the greatest service to moderniticism, who shall draw the line of relation that subsists between Shakspeare and Swedenborg.

實に然り。噫誰れか沙翁とスウ井デンボルグとの關係を悟入する者ぞ。

吾等髣髴として之を得る者あり。

即ち個人感と社會感と、之れドラマと信仰との差ならん。

ドラマは社會感の活動ならん。信仰理想は個人感の終極ならん。言ひ換ゆればドラマは社會感の活動より起る出来事衝突の寫眞ならん。信仰は人、寂寞の境に「自然」に答へたる最後の叫び其者ならん。元よりドラマの中に個人感より起る分子も加入す可し。然れどもドラマ其物は社會感の

産物なりと信す。

宗教は個人感の絶頂なり。天才は個人感の最強なる者なり。

シンセリティーは個人感に入る眞の入口なり。

此シンセリティーを殺す者は社會感なり。故に人間墮落の最要件は社會感なり。宗教を殺す者、天才を殺す者、悉く社會感なり。社會感とは人間が社會に生み落されし結果必然の感なり。社會感は小兒の時代よりして人間感情の周圍に煙の如く掩ひをむ。生長するに従て亦た拂ふ可からざるに至る者也。

故に所謂罪惡其者、則ち或は偽、或は盜、或は殺、或は争、其他姦姪、無學、嫉妬、凡て此等の者が人間を墮落せしむるよりも社會感が人間を殺すこと最も甚だしけれども、又た最も人間に氣付かれざる也。世の君子賢者と稱せらるゝ者の如き亦た悉く然り。

社會感に充たされし人間には社會が世界也。社會が生命なり。社會には道德あり。故に社會感の人も之を守るが故に道德家たるには相違なし。然れども此人を取て十年無人寂寞の境に置て而も悠悠自適、胸中炎々の天光に充たされ能ふか。

釋迦を見よ、彼れの教を始むる前に十年雪山の苦行あり、個人感の絶頂を見るに足る。ウオーズ

ウオルスの詩、エマルソンの思想、ゲーテが「ファウスト」悉く個人感の絶頂也。萬人悉く個人感の絶頂に達したる時に於て天國則ち地上に来る。

天才が地上労働の目的は社會感を破るにあり。歴史は之を證據立つるに非ずや。無意識若しくは意識的に人間の心頭胸臆、個人感と社會感の戰爭あり。如何なる具合に社會感が個人感を壓するか其の具合こそ知りたき者なれ。シンセリテイーは社會感破れて個人感勝つ可き最初の合圖也。

個人感其者は之を知り得べし、何となれば天才の言動の中に現はれたればなり、然れども此の兩感の隠微玄深なる心底の戰爭の模様に至りては殆んど知り得べからざる事に似たり。吾が自らの經驗之れを證す。ウオーズウオルスの「オード」は多少此戰爭を語れども未だ玄妙の域に至れる者と云ふべからず。只だ戰爭の形を示すのみ。

個人感は「自然」を生かし、社會感は「自然」を殺す。

個人感の哲學はボエチカルとなり、社會感の哲學クリチカルとなる。

以上の言説と雖も少しも社會感其物を表顯せしむる能はず。只だ性質を説きたるまでなり。

ウオーズウオルスの「ソリタライ、リーバー」は何故に絶調なるぞ。則ち個人感のメロデーいな

ればなり。

故にドラマは社會感の人が讀むとも其の利は皮相の觀察ならん、個人感の人之れを讀んで始めて人間と人世とに就いて學び發明する所ある可し。

言動は社會的なるが故に、個人感の結果に出でし者と雖も、やゝもすれば言動の際、社會感の惑はず所となる、詩人豫言者と雖も然り。

吾の常に悲むは個人感の猛烈ならざるに非ず、社會感が無意識的に吾を支配することの強きあり。余が心頭の戰爭は之れなり。

人世には法則あり。人間の信仰は信仰なり。人世の法則は法則なり。其の法則は嚴格なり。有力なり。又た極めて幽玄なり。此の法則の發明こそ眞のポリチックならん。カーライルが「英雄崇拜論」の如き確かに此の法則の一個條を發明したる者なり。

信仰は人間立命の天光なり。此の法則發明者は人世經營の眞立法者なり。人世の法則發明者とは此の地球上にある人間個々の關係を、最も意味あり道理ある者たらしむ解釋を云ふ。

人間の天光を吹込みて大信仰に入らしむるは豫言者詩人の天才なり。然るに此の人生法則の發明

者も亦た確かに人世必要の天才ならざる可からず。

「我」は常に新なり。故に余は新しき人間なり。何者か余に舊びたる意味を附する者ぞ。何等の舊びたる繩ぞ。この「我」の新生命を束縛せんとはするぞ。何等の恐ろしき感情ぞ此の新き生命の自由なる活動を止めんとする。

二十一日。

昨夜の大雨、久しぶりに満都の苦熱を鎮め、今朝は蘇生の思あり。飽迄涼味を吸ひて楽しく業を始めんと欲すれども、心底一塊の血涙の凝るあり。叫ばんと欲して叫ぶ能はず、泣かんと欲して泣く能はず、ア、何者の力ぞ吾をして遲鈍ならしめ、吾をして此の如く無感覺ならしめ、吾をして此の如く不信ならしめ、吾をして此の如く社會的ならしめ、吾をして此の如く物質的ならしめ、吾をして此の如く不活潑ならしめ、吾をして此の如く倦怠ならしむるぞ。詩人豫言者等の壯音嚴調、今耳になし。煩悶もなければ、さりとて感激もなし、死もなく生もなし、心頭何れの處にか微細なる満足の蛇ありて憤陽の陰に鈍き催眠歌を唱ふるを覺ゆ。あらためて問はん、爾何の満足ぞ。爾何の得意ぞ。シンセリテイーと社會とは決して一致せず。何れか相殺す。振ひたし、社會

なる者が吾衣に附着し居るものならば、衣をぬいて力を極めて振ひたし。

沈黙なる哉、絶交なる哉、寂寞なる哉、爾を生かす者は是也。

シンセリテイーの感情死して、凡ての意味深き詩人哲人の言悉く其生命を失ふ。天地、自然悉く死す。吾にシンセリテイーの感亡びなば死す可し自殺す可し。シンセリテイー亡びて而かも生きて我に何等か残る。

午後金子馬次氏來る、シユウエグレルの哲學史をかさる。

二十二日。

午前引頭氏を訪ひ、午後水谷氏引頭氏齋藤氏及び吾と四人小川眞一にて寫眞を撮る、水谷氏歸國に決したればなり。

雑念妄想俗思社會感相續て起り憤慨に堪へず、吾が頭腦吾が物に非ざるが如し。

シエクスピーアとカーライル、ス井デンボルク等との間のハーモニーを感じ能はざるは則ち我が
エムブレースする所狭ければなり。

我未だ何事をも知らず。

二十三日、日曜日。

超然は難い哉。人世の遭遇は多端なり。人心の變轉や窮りなし。一ツの我、實に一つの我に非ず、
然らば超然は難い哉、超然とは土木死灰たるの謂に非らず、吾がバライティーに由て吾がユニチ
イーを失はざるを謂ふ。千百の牢獄の中に天空唯一の自由を得るの謂也。凡百の熱情の中に一片
の氷心を寓するの謂也。混濁たる變轉遭逢の際に一貫直往のシンセリティーを失はざるの謂也。
己れが一個偏頗なる感情の裡に立て籠りて他を多くノンセンスとなしミーニンダレスとなすの謂
に非ず。

言ひ換ゆれば大シンセリティーを以て無窮無盡のエムブレースあるを言ふ。

然れども之れ實に宇宙の相なり。

天地の相をとりて直ちに一個片塊の相となさんと欲す、眞に難い哉、固と出来得べからざる事か、

然り。

然りと雖も人間到頭奴隸に非ず。奴隸たるを知りて而かも奴隸に甘んずる者に非ず。眞に甘んず
るは奴隸に非ず。人心の妙も亦た實に茲に存す。

而も超然の難きは何ぞや。人間超然の難きは何ぞや。

エムブレースする所の狭くシンセリティーの感情の痛切ならざればなり。

二十四日。

口惜きは動もすれば形式に捉へらるゝ人心なり。

「宗教」と云ひ「哲學」と云ひ「文學」と云ひ「政治」と云ひ、さなきだに形式の世界にありて人
心をして愈々形式に陥らしむ。

宗教、哲學、文學の如きは人心に天光を注ぐ器械に非ずや、人心天光を離れシンセリティーを失
ふ其處に何の宗教、何の哲學、何の文學か何の用を爲す者ぞ。

ア、嗚呼我を此の形式の世界、社會感、シンセリティーならざる感情より救ふものは何ぞや。

昨日午後四時より教會堂に集りて地方會員に信書を認む。

薄暮より水谷眞熊氏來る、一泊、今朝歸らる、誘惑あり一小誘惑あり、之に由りて「戀と戦ふ僧」

てふ者思ひ付く。則ち「信仰と戀愛」との戦争なり。戀愛の玄妙妙思あらば必ず此の戦争の裡にあらん、吾は未だ之を見出す能はざるのみ。試みに戦はしめよ。

綠葉、白雲、高天、清光、吾叫ばざらんと欲するも能はず。

嗚呼夏日なる哉、盛夏なる哉。

二十五日。

自由。自由なる哉 大人は自由の裡にすむ。超然は則ち自由の謂なり。わが自由の如何に擴まりしぞ、吾自由の擴張は吾進歩のしるしなり。陽光、清風、綠蔭、如何に多くの自由を吾に與ふるぞ。ウオズオルスは野花、雲雀、小兒、泉流の中に自由の境を得たり。

ソクラテス彼如何に大なる自由の裡に住みしぞ。

「心の欲する所に從て則をこえず」、嗚呼之れ何等自由の消息ぞや。

シエクスピーアを思ひウオズオルスを思ふて其の間に大ハーモニーを感じ能はざる故か、我未だ皮相の裡に住み居る心地して如何にも堪へ難し。

人生れたる以上は生きざるを得ず。

二十六日。

大に我がシンセリティーの感の衰へたる思あり。

今日の吾は停滯の吾なり、進歩の吾に非らず。一日停滯す、半ば死せる思ひあり。

「三體詩」を読むドーヂン「沙翁論」を読む。

今井氏來る、田坂氏來る。

午後假眠二時間。

今井氏と共に水谷氏を訪ね、水谷氏と西村米子同寫の寫眞一枚をもらひ歸る。感あり書もて直ちに水谷氏に送る、今、夜十時幾分。

シンセリティーの感とエンブレースする所とを無意識の中に埋葬し去る。之れ死せるに非ずして何ぞや。

二十七日。

昨夜眠らんと欲する前、飽迄天邊の月明を賞す。ア、かゝる時にこそシンセリテイーは吾に燃ゆれ。天地の生氣に打たれ、吾の慥かに茲に存する我なるを覚え、美のリアリテイーを感じ人間の不死なるを感ず。嗚呼、吾、生の爲めに生を言ふ能はず、美の稱に應じて美を言ふ能はず、世界の生存に慣れて生存のシンセリテイーを忘却する能はず、我は實に慣性を惡む、而かも思ふ慣性は不知識なり、則ち何んぞ知らん我亦たかく語りても淺間敷き慣性の裡にあらざるなきを、然り我慥かに大なる皮相の裡に慣住するを覺ゆ、而かも覺えて未だ容易に脱却し能はざる也。茲に於てか瞑想、沈思、感激の一日分時もゆるかせにすべからざるを信す。

▽午前四時前に神田猿樂町西村モト方なる水谷眞熊氏を訪ふ。蓋し氏二十八日午前六時の汽車にて歸國の途に就くを以て知友兩三の會食を催せしなり。會食者は水谷、今井、引頭、齋藤安雄及び吾の五人なり、新橋迄送る都合故西村方へ一泊す。(二十八日夜)

二十八日。

今朝水谷氏を新橋に送る、昨夜睡眠の足らざる爲め歸宅後、假睡す。

問ふ爾「エナジー」衰へざる乎。

人生眞に不可思議に堪へず、思ふ愈不可思議に堪へず。

己を社會の裡に見出す、故に動もすれば齷齪たり、又た違々たり。而して或は小成皮相の成功に安じ或は空漠たるアムビションの樓を築きて以て自ら焦す事を致す也。

天地の間に己れを見出す者は偉なる哉、幽音悲調の心線に觸れ乍らも猶ほ悠然として懷を寛うする者あり。眞正の勇氣、眞正の希望はシンセリテイーと共に生じ、期せずして皮相の外に脱却す可し。人生意あらば茲に到りて始めて意あり。

余が先に所謂社會感なるものは、己を社會の裡に見出すものなり。個人感なる者は天地の間に見出す者なり、然り此の争ふ可からざる此の永久なる、此の壯嚴不測なる天地の裡に見出す者也。則ち吾等が光明を宇宙の裡に見出し、勢力を無窮の裡に見出す如く己を無窮なる宇宙の裡に見出すなり。

ウオルスオルス然り、カアーライル然り、エマルソン然り。

豫言者の徒悉く然り。

然るに人間の淺間敷き常に社會の間に見出す強き傾向を有す。宗教は則ち人を救ふ所以也、詩人は則ちエマルソンが自由の製造者と名くる所以なり。社會感は束縛なり。宗教と詩と之を解く。何れの時、我最も悲しく、最も不安なるか、曰く天地間に我を見失ひ、シンセリテイーの感失せし時なり。

カーライルはシンセリテイーを以て大人の最始要件となせり。吾をして言ひ換へしめば觀察の最初第一は己を天地間に見出すにあり。幽玄深遠の觀察始めて出來得べし。

シンセリテイーに就きては吾が朋友中一人の共に語るに足る者なし。悉く社會の裡に己を見出すの徒なり。われとても動もすれば然り。

美を愛し、醜を惡む。何をか美となし、何をか醜となす。

吾自ら謂へらく、吾美の名に由りて美を愛せずと。蓋しシンセリテイーの感に由りて美のリアリテイーに生くるの謂なりし也。而かも今吾、問ふ爾何をか美となし、何をか醜となす。問ふ爾自らの性情果して美なる乎、則ち美を呼吸せんとする爾の肺腑果して美なる乎。嗚呼！是を何處にか求めん。吾今にして初めて知りぬ、人性の美なる者に就てわが思想感情未だ一度も及ばざり

し事を。

善、美、眞と、惡、醜、偽と常に人間の性情の裡に在りて戰ふ。之を觀破すること詩人の任に非ずや、嗚呼美！不可思議なる言葉、生命ある言葉、貴き言葉、而かも之を殺す者はわが皮相、醜偽、不信なる哉。

嗚呼、恐ろしき誘惑、醜鬼の笑顔！

嗚呼皮相、皮相、不信なる哉、美、善、果して爾に眞にリアリテイーなるか。

わが見る美は形なり、わが感ずる善はパッションなり、共に信仰に非ざる也、嗚呼淺墓なる哉、眞に淺墓なる哉。

或は善、或は美、或は眞、感ずる所何者ぞ、見る所何者ぞ、重する所奈邊にある、吾果して

Listen! the mighty Being is awake. の眞感ある乎、シンセリテイーある乎。

嗚呼淺薄なる哉吾、實に淺薄なる哉、愛と言ひ義と云ひ戀と言ひ、偽と言ひ惡と言ひ醜と言ひ、凡て此等言ひふられし言葉に對して汝果してシンセリテイーある乎。ア、果してシンセリテイ

―ある乎。

二十九日。

自ら顧みて實に淺墓なるを感ず。眞面目ならざるを感ず。是れ自らをエマムソンが所謂る Holy Place の裡に見出す能はざるが故にあらずや。

嗚呼淺間敷かな人の心や、嗚呼不思議なる魔力や、嗚呼不可思議なる人の心や。吾自ら、自らの淺墓なる事を語り、自らの皮相なることを語ると雖も、さりとて決して皮相を脱却し得たるに非ず、淺墓より進みたるに非ず、只しかる事を認めしまでなり。故に今とても相も變らず皮相なり、淺墓なり、ア、何者の力ぞ、魔力ぞ、人の心をして皮相の上に轉ぜしむる、淺墓の裡に埋めしむる。ア、救を何に呼ばん、助を何者に叫ばん。かくて止まば人は生れざるこそ幸なれ、されどされど、嗚呼されど、生や争ふ可からざる事實なるを如何にせん、ア、不思議なる自然や。

吾の生命の流轉、彼れの生命の變移、此の事、彼の事、何れか人生ドラマの一齣ならざる、之を見て深く感ずる者は詩人なり、淺く過眼する者は俗人なり。

本日「ファウスト」を読む。

昨夜は引頭氏と共に、今夜は奥村氏と共に川竹亭に義太夫を聞く、歸途月光に對する毎にシンセリライターの感動く。

本日國元に書狀を出す、理想の志を語る。

生活上の束縛を思ふ毎に常に人生の束縛を感ず。然れども此の束縛を脱することは難きに非ずと信ず。

三十日、日曜日。

午前教會堂に出席す。植村正久氏「約翰傳」十四章八節以下に就き説教あり。

植村氏と會話、わが職業に就き同情を表せらるゝものゝ如し、曰く成る可く田舎に歸る勿れ東京に留まれと。

十時過ぎより、今井忠治氏と共に「目黒」に遠遊す。盛夏、郊外を歩す、妙は已に此の七字の中にあり、涼しき並木原、香しき夏草のほひ、林を隔てゝきく荷車の音、地平線上に堆き雲の峰、木立の薄闇き蔭を走る水流、土橋、遠林、青田、濁、餓、汗、笑。

かくして目黒に達せしは一時過ぎなり。角伊勢と稱する割烹店にて食す、四時半目黒を出づ。これよりは已に夕陽の美なり、竹園、灌木の林、丘陵、夕陽の美は此の中にあり。品川驛に達し汽車に乗り新橋に着、歸宅は午後八時なり。吹き込まれし美は必ずわが中に成長す可し、必ず化合すべし、必ず抱合す可し、而して必ず産るべし。

何者か言はんと欲して言ふ能はざる感情あり、もらさんと欲してもらす能はざる者あり。

己れの死を痛感する者は生を痛感す、生を痛感する者は死を痛感す、生死を痛感するはシンセリ
ティーの始めなり。

生死を痛感すとは例の言ひ草の口眞似に非る也。

大詩人 大豫言者、大哲人生死を痛感したる結果なり。

大なる生命、眞の生命の入口なり。己れを天地の間に見出す者にして始めて然り。己れを天地の間に見出す者は凡ての者を天地間に見出す。

則ち一個人の一擧手一投足、社會の出來事、自然の變化、凡て此の不可思議なる、争ふ可からざ

る、大事實なる、生ける永久なる、無窮無邊なる、此の、茲の宇宙の裡に見出す也。

故に、俗人か、則ち社會の裡にのみ己を見出す人々が意味なく看過する事實の中にも深き注意と敬虔の念とを以て受取る、呼吸する、インスパイヤーせらる。

ウオーズウォルスは野花を、雲雀を、小兒を、宇宙の裡に見出す。

吾が、己れ及び事實を天地の間に見出し感受する能はざる時に於て、如何に言ふ可からざる悶を感ずるぞ。吾が自ら淺墓を感じ、皮相的を感じる時は則ち此の時なり。

嗚呼吾茲に在り凡ての物茲に在り凡ての事茲に在り、過去も未來も茲に在り、「ミステリアス」なり、されど茲に在り。

茲とは人間慣性の社會感に對する強き言葉なり。

茲、茲と稱すと雖も決して容易に世人に感銘されざる也、「茲」の意に悟入せしめんと欲せば社會感の性質を極めて深刻痛切に探明せられざる可からず、われ「茲」の感に住むを望むならば亦た自ら實驗に由りて社會感の不思議なる魔力の其の力を加ふる仕方を明にし置かざるべからず。「茲」の感を失うて而して眞の信仰、眞の生命、眞の自由に入らんと欲するは難し。

三十一日。

嗚呼、嗚呼、日本に向てシンセリテイーの火を放つ者は誰ぞや、世界に向てシンセリテイーの火を放つ者は誰ぞや。

嗚呼吾れ生きて茲に来る、必ずや神の命の在る處にあらずんばあらず。

「神聖」をはなれて其處に何者かのこる、神聖、々々、何處までも神聖。

美も善も眞も、神聖なくして其處に何の意味か存する。

上下し、左右し、發育し、死亡し、變轉し、推移し、潜伏し、煥發し、運行し、循環して、窮りなき自然、我茲に在り、人間茲に生る、神聖を失うて其處に何の希望、何の生命ある。

爲すは茲にて爲すなり。天職に向つては當に滿腔の熱血注がる可きなり。之れシンセリテイーの證據なり、信仰の證據なり。神聖感の證據なり。

嗚呼クリスト、エスは偉なる哉聖なる哉。

神は大なる者を人間に與へ給ふ、美術之れなり、人間互に神聖を交換するは此の賜の助によるの外なし。

八月

一日。

此れも事實なり、彼れも事實なり、悉く事實也。只だ之を貫く眞理如何を見る者は詩人なり。其中に没入埋葬せらるゝ者は俗人なり、事實なり、記憶せば事實なり。意味なしとせんや。吾が今日徳富を訪ひしも事實なり。徳富が語りしも事實なり、徳富も事實なり、悉く事實なり。只だ吾をして吾が信仰の足場に立ちて凡ての事實を、千年前の事實、今日の事實、彼の國の事實、此の國の事實、凡てをエムブレースせしめよ。

本日午前徳富猪一郎氏を訪ふ、他に四人來る。

氏の前にはわれを社會の裡に見出すの外なし、されど最早われを社會化する能はず、以前は氏より被る社會化と戦ふに苦心したり。今は冷々然たり。氏も今は吾がエムブレース中の人なればなり。

中桐確太郎氏より書狀來り、福島民報入社をすゝめらる。直ちに徳富氏に書を送りて相談す。人は生活せざるを得ず、「せざるを得ず」は束縛なり。天下滔滔此の束縛の裡に生死す。されど此の束縛は哲人に取りては極めてもろき束縛なり。然も悲む可き束縛なり。

薄暮西村モト方を訪ひ引頭氏を訪ふ。氏不在、モト氏薄闇き處に横臥してうめき居たり、其處に妹の人外より走り歸りてしきりに訴へ居たり。悉く人生「ミゼリイ」の形なり。

嗚呼無學、不徳、災厄、何に由りて天を解説せん。

無學、事實なり、不徳、事實なり、災厄、事實なり、哲學者が如何に解釋せるにせよ之れ事實なり、無學、不徳、災厄の海に生死する人間の生涯、果して幾何。之れを何とあきらむべき。ア、神意如何、神意如何、神意茫茫得て知る可からざる乎。

嗚呼吾はルーズなり、眞に無感覺なり、言ひ換ゆれば不信仰也。善に對しても、美に對しても、眞に對しても、不學、災厄、惡徳に對しても争ふ可からざる大感情を以てする能はず。

パツシヨンを以てシンセリティーの感を燃やすの時代經過して靜幽なる意志冥想に由りてシンセ

リティーの信仰に入り得るの時代來らざる可からず。今はや、其時代に近きつゝあるを覺ゆ。

事實に對して人は慣る、慣る故に感、痛切ならず、感痛切ならず故に皮相に住む、已に皮相に住む、如何でか觀察あらむ。

シンセリティーの敵は、人間慣性なり。

わが感、人間を離るゝが如し。之れ大に戒む可し。

二日。

『詩人は自由なり、故に自由を造る』とのエマルソンの言。

これを味へば味ふ程、自ら經驗すれば經驗する程、眞理なるを覺ゆ。

善にせよ、美にせよ、人がこれに對してデ・ヴ・カン、ミーニングを想はぬならば、必ず之を感ずる事淺薄なり、パツシヨンに過ぎざるべし。一時の眩惑に過ぎざる可し。吾が此頃の經驗は之を證す。吾に堅固なる信仰乏しきが故に神聖を感受する事少なし、故に美に對し善に對し、高尚偉

大に對し、感謝に淺慕なり。ウオーズウォルスのソネットを讀みて愈々其を覺ゆ、何となればウオーズウォルス其の感シンシアにして信仰高く堅なればなり。

嗚呼、信仰の念は燃ゆるなり。シンセリティーの感は動くなり。此の美なる茲に生れたる身を思ふ時は。

愛、クリスト、エス其他の尊き人々の信仰の心に充ちし愛、人間が神につながる最後の絲なる愛此の愛の泉、愛の火、ア、神よ吾をして愛に對して活ける深き、争ふ可からざる、信仰を加へ給へよ。ア、我が心頑固にして神の限りなき愛を感じる能はざる乎。神を愛する能はざる乎。愛の神よと呼ぶ能はざる乎。

ア、我をして一時のバツションにあらすして、堅き信仰、盛なるシンセリティーの中に、愛、義、美、善、凡ての貴きリアリテイを呼吸せしめ給へ。

「シンセリティー」則ち皮相、淺智、虚傲に對しては、我畢生の戦ひに従ふ可し。されど我に皮相

あり、我に慣性あり、我に淺智あり。如何にして此の皮を吾が心よりむきはき盡す可乎。

吾は自らの天職が詩人なるを疑はず。神は必ず之を命じ給ふ。

人生れて社會に在り。各其の職を有して爲さんと欲する處を爲して世を終ゆ。吾亦生れて茲に來たる、何者も吾を餘儀なくするを許さず。吾は信する處に由て盡すべきを盡さんことを欲す。何者か吾が詩人たるを止むる者ぞ。吾は茲に來たる、吾は茲に在り。時代より云へば吾が過去には多くの人間生れて而して逝けり。未來も亦た然る可し。吾も亦其の間に來る。勉む可きは未來に來る時代を教ふる也。

吾は顧みて多少、教ふべき者を自ら有すると信ず。吾は教へざるを得ず、ア、吾は詩人たらざるを得ざる也。吾は大なる人なるにせよ、小なる人なるにせよ、吾が天職は詩人たる可し。一人の子孫にてもあれ、吾がのこし置ける言葉に由りて、其の生命に入り、眞の信仰に入り、天地の眞を解し、美を解し、自然の人生を解し、限りなき希望と、限りなき平和と、限りなき自由とを享有するに至る緒だにも得しならば吾が望みは足る、吾は形に住む能はず皮相に甘んずる能はず、束縛に従ふ能はず、動物的跳躍を以て事業と信する能はず。ア、神よ、唯一の神よ、茲を支配し

給ふ神よ、此の力足らざる僕を助け給ひて天職を全からしめ給へ。

吾がシンセリティーの感に加ふるに「神聖」に對する敬虔の高情を加ふる能はずんば我に至りて此の世界は如何に慘憺冷酷の極ならめ、何の危ぞ、何の形ぞ、何の變化ぞ、何の永遠ぞ、何の循環ぞ、何の生死ぞ、凡て迷ひならん。闇ならん。愚ならん。希望何處にかある。平和如何にして生すべき。終に激して感傷し去らば絶望自滅ならん。終に逸し抛たば放漫放肆ならん。

嗚呼、愛する神、美なる神、活ける神、大なる神、われ爾に出で爾に歸る、これぞわが信仰なれ希望なれ。

様々の事情、様々の場合、様々の境遇、様々の人心、如何なる變化ぞ、色彩ぞ、迷ふ勿れ、惑ふ勿れ、此の變化此の色彩に。

世にすみ慣れて形にのみ動く人の心、迷ふは無理ならじ、此を救ふ者は豫言者、詩人の任なり。カーライルは詩人なり、眞の詩人なり。シンセリティーを説けり。

昨夕徳富氏に福島民報社入社事に就き相談の書を送りしも今夕迄返書なきを以て、氏の宅を訪

ふ、不在、思ふに生活の事に就きて或は人に依頼して廻るなどは意氣地なき至りと云ふ可し。汝一家を養はんと思はゞ將に大に奮つて汝の筆に頼る可し。

われ生活の事を思ふ時は眞に不愉快を感ず。何時の間にか俗化せらるる心地とする、人は生活の爲めに働く者なるかの感何時の間にか萌し來たしりて不快なること實に堪ふ可からず。

嗚呼作る可し。根限り作る可し。詩は仰信の火と、透徹なる眼とのみに非ず。必ず精妙深玄なる術を要す。美術之れなり、詩も亦た美術なり。術は屈せざる練磨によりて上達入神す、故に吾大に作る可し。

三日、朝。早起祈禱して曰ふ。

嗚呼神よ、願はくば我を「形」より救ひ給へ、形の束縛より救ひ給へ、皮相より救ひ給へ、世に生きて世に慣るゝ謬より救ひ給へ。

御心に協ふならば吾が志す天職を全からしめ給へ、如何なる場合、如何なる境遇に處しても迷はざる様導き給へ。吾が心動もすれば荒れ亂るゝ事のみなり。神よ常に燃えて熄えざる信仰を呼吸せしめ給へ。

自ら大自然の裡、我身の渺乎たるを感ずる時は如何に悲しきぞ。只だ神の信仰則ち美の根元、善の根元、偉大の根元、愛の根元、眞の眞なる神の信仰と、インディブ・デアリズムとのみに由りて希望と勇氣とを生ず。

225

如何に熱心の人にせよ、如何に熱情を以て書かれたる書にせよ如何に熱意を以て言はれたる言葉にせよ、其人、其の著者、其説者が、己れ自らをシンセリテイの感を以て此の大自然の裡に、此の神聖なる茲に見出す者にあらざる以上は、其はパツシヨンに過ぎず、一時に燃えて忽ち消ゆる火に過ぎず、彼等は世の中に生き、世の中に激し、世の中に悶え、世の中に叫ぶ、彼等の空氣は人影なり、彼等は人影の外に生くる能はず、彼等は生れし事と死せることを知りて、生れもせず死しもせざる尊き神の前に獨立する能はず。彼等の他の報酬は何者なるにせよ神は決して彼等に永久の平和を與へ給はざる可し。

聞けウオースウオールの呼吸の如何に幽深なる、彼の心や、大空の如く靜なり。エマルソンの呼吸の如何に深く如何に靜かに、如何に大なるぞ。

嗚呼吾に名譽あらしむる勿れ、嗚呼吾に黄金あらしむる勿れ、嗚呼吾に學問あらしむる勿れ、只だ吾にたえず神の美と善と愛と眞の力とを見せしむるシンセリテイあらしめよ。
人は思想に由りて生く、人の生命は感想なり。

世人能く云ふ、天道、人情、正義、自由を信すと、咄、爾、信すると云ふ言葉を輕々しく用ひざること望む。眞に疑ひしものに非ずして眞に信じ能ふ者あらんや、一度シンセリテイの感に打たれたる者に非ずして眞に疑ひ、眞に信する者あらんや。彼が信すると云ふは、信すと自ら妄想せるなり、「信する」嗚呼深甚痛絶の言葉。皮相の徒の輕輕しく用ひざるを望む。

記憶せよ、われは罵らんが爲めに世に來りたるに非ざることを。

午前七時前外出「カーライル傳」(十二文豪第一卷)を求め歸りて讀み始め、今、午後一時半讀了りぬ。激する情を靜かに抑へて語れば、吾は如此「カーライル」傳がカーライルを紹介する國民最初の書として現はれたるを悲しむ。之れ全く少しもカーライルを知る事なき者の筆也。讀み了

227

はり吾何を得たるか、二百八頁の文字カーライルの何を證明したるか。之れカーライルの肉が地上に落したる影を捉ふる文字に過ぎず。曰くカーライルは豫言者なりと。されど何故に豫言者なるかを少しも語らざる也。殊にカーライル福音の根本たるシンセリテイーに就ては少しも説く所あらず。只だ曰くカーライルは忍耐せり。剛毅なり。天才なり。著述をなしたり。英雄論を述べたり。永遠を然定したり。電光の如く然り。シニツクなりし。千七百九十五年十二月四日を以て世の光を見たり。千八百八十一年二月四日逝きぬ。曰く時世の彈劾者。是れ凡て空の文字、文字の羅列のみ。

カーライルは何を教へたるかを説かんと稱して而して何者をも説く能はず。此書の著者は、カーライルに就き實は何者をも知らざる也。只だ驚嘆の雷同者に過ぎず、此の如き著者は吾如何なる言葉を以てその勞を謝すべきかを知らざる也。

天才は決して、決して容易に知られざるなり、此の語には動かす可からざる真理を含む。何となればしかく容易に解せらるゝ者ならば、天才なる者は決して生ぜざればなり。凡百の衆多は只だ其の煌々たる光に驚き仰ぐのみ、決して其の光の本體を解する能はざる也、天才の本體が凡衆に

解されたる日は則ち神が人類の進歩を導き給ふ目的は達せられたるなり。エマルソン曰はずや、天才は宗教的なりと。カーライル曰はずや、天才はシンセリテイーなり、而して其れに就きて無意識なり、否寧ろ不シンセリテイーに對して意識すと、ア、何等深遠の言ぞ。今日の日本決して天才を解する能はず、何となれば滔々悉く之れ皮相論理、懷疑冷評の徒なればなり。シンセリテイーの人間一つも見出す能はざればなり。

天才は人影の裡に住まず、何ぞ人影の呼吸者に解せらる可き。天才を知り給ふ者は只だ神のみ、又た天才の人のみ眞の神を知る、見る、聞く。感ず。崇拜す。愛す。

凡ての誤解は翻譯の誤解なり。「天才」と云ひ、「シンセリテイー」と言ふ、多くの人に言はれたり、而して多くの人、己れの小さき頭に適する様翻譯して安んぜり。

爰を以て愈々天才が福音教言、眞解され、悟入されざるに至る。

嗚呼天才豈に知り易からんや。眞に天才の根本を解し能ふ者は又是一個の天才なり。

嗚呼我は言葉多き世界を憎む、皮相を我に感ぜしむる者は言葉なり。

吾は只だ山眠り、野眠り、市街眠り、過去眠り、現在眠り、未來眠り、場合眠り、時眠り、人間

眠り、言語眠り、形骸眠りたる深夜休息の際、此際只獨り醒むる永久無窮の存在者を聞く事を希ふ。

本日午前早く、徳富氏より書状あり。

新聞記者たらんと欲せば、一日も早く地方に行けと。又曰く一年も地方にて腕を錬り、以て東京に打て出でよと。又曰く民友社に入れたけれど實際餘裕なしと。來週面談せんと。吾も角も植村正久氏に會ひ東京に在りて生活する職なきや否を相談して決すべし。

義務なり。義務なり。吾茲に熱涙を以て書す、義務々々吾茲に來る、立て務む、務めて斃るゝは義務なり。來れ、皮相よ、來れ、口實よ、來れ、世難よ、來れ此の天地を半吞する暗高よ、よし吾汝と戦はん、汝と戦はん、過去には過去の暗黒あり墳墓あり。未來には未來の暗黒謎語あり、より吾先に來りし者悉く戦うて斃れたり。斃れて勝ちたり。則ち信仰と熱心と勞働とに由りて勝ちたり。ア、此の孤獨寥々の靈魂の一つよ。爾、何れに向つて行かんと欲する、何を知らんと欲する、何を望む、何を爲すぞ。

只今植村正久氏の宅より歸り來る、弱き吾は突如として吾を悲痛なる煩悶の裡に陥れたり。

植村氏には職業を成る可く東京に於て得る事に盡力を依頼する爲めに行けり。植村氏は東京を去らざる事に就ては至極同意なり。何とかして盡力せんと云へり。問うて曰く終に何を爲さんと欲するかと、吾は此時詩人と答ふる能はざりき。其より氏は文學の事に就き色々語れり。吾に一論文を求めたり。吾は諾して歸り來りぬ。かゝる場合に煩悶し來るは吾の癖なり。何となればかゝる場合には吾が自由を奪はれ、自信を碎かれし心地すればなり。

義務々々、神よ吾が義務を助け給へ、皮相退治、神明説明、人生解釋は吾が義務なり。吾茲に生る、何を畏れ、何を躊躇し、何を憚るぞ。正に爾の神の信仰に對する義務に向つて死を捧けて突進せよ、勞作せよ、忍耐せよ、戦へ、神は必ず助け給はん。

よし、爾、カーライルの「シンセリティー論」を作る可し、

吾れ大に讀む可し、而して作る可し、余が讀むは義務なり、作るは義務なり。己に義務なり、斃れて後ち已まんのみ。吾は如何なる家の最も人間が住むに足るかを知る、之れを建つる方法を知らず、之を建つる材木を有せず。材木を運びて神の宮を建つるは吾が地上に在る間の義務なり、吾は其他を思はず、只だ義務に斃れ得るならば志望足れり。其他は吾に在りて凡べて空なり。四日。

人間は其の外に「眞實」の敵を有す。内なるは則ち己れの慣性なり。外なるは則ち「不眞實」なる同類なり。人間は互に相皮相化す。此間に立ちて其「眞實」を續け、信仰の火を動かさざりし者は必ず英偉の人物なり。化石したる信仰の謂に非ず。化石したる信仰は決して眞實に非ず、眞實は熱心なり、恐ろしき程熱心なり。願よ、われに此の熱心ある乎。宗教的熱心ある乎。少なし々々々極めて少なし、吾、「眞實」を感じれば感ずる程、自ら不眞實なるを感ず。

本日午前、昨日の約束に従ひ一論文を作りて植村正久氏に持参す。論文の題は「カーライルが所謂「眞實」^{シンセチシティ}は是れなり。

植村氏曰く餘りに難澁なり世俗に解し難し、あたためて世俗的の者を作り來れと。吾は承諾して

歸りぬ、吾は途々やゝ失望せり。彼すら之を斥けて世俗的の者を作り來れと、嗚呼われ遂に世に従はずんば生活し能はざる乎。吾の才、遂に世に勝つ能はざる程の者なる乎。ア、されど、されど、我が天職はどこまでも我が天職なり。神よ吾に天職に堪ふる忍耐、勉強を與へ給はずんば寧ろ死を給へ。

暗黒、暗黒。暗黒はをり／＼、吾が眼前をかすめ去るなり。突如として其の暗き恐ろしき影を閃かし去るなり。暗黒よ來れ、吾親しく爾を視んことを希ふ、爾、われを喰はずんば、吾爾を喰はん吾は爾の裏面の大光明を望むなり、故に暗黒よ來れ、吾は淺墓なる光明に安ずる能はず。吾爾を通じて今一層明白に吾が大神を看んことを希ふ。死の暗黒なる淵よ、我が前に其の戰慄すべき岸を示せ、其他限り知れざる暗黒の事實よ、我が不眞實なる心を戰慄せしめよ。

昨夜眠ること少なかりし爲め午睡す。

午睡の夢破れんとして全く破れず、心思恍惚の境より、かすかに此世をのぞく時、如何に無限の幽愁湧き來るぞ。

耳に入る者は隣室に少女が聲、低く歌ふ一脈のメロディなり。窓外に學生が鬱勃として吟ずる悲壯の詩なり。眼底徐ろに映じ來る者は無邊の蒼空なり。夕陽の光に娑婆たる桐葉なり。

凡て新らしくわが舊びたる魂を衝く、突然、クリストを十字架上に想ひ起す。突然、ウオーズウオルスが詩、「ソリタリー、リーパー」を想像す。嗚呼眞の生命！ 近きが如く遠きが如し。言ふべからざる悲哀の情は泉の如く湧き來る也。

午後七時半祈禱會に出席。

神の愛を祈る、人生に暗き部分なるミザリー、バイスに同情を持たせ給へと祈る。嗚呼、神よ、切に祈る、シンセリテイーを以て事實の前に立たしめ給へ、慣性の皮相より鈍き心を救へ給へ。

五日。
ア、又た今日は來りぬ。今日又今日、而して死、而して暗黒か。何を希望し何を勵むぞ。吾の愚何をか爲さん、徒らに皮相に住み、苦み感ひて、而して後に空骸を遺して暗黒に融け去るに過ぎざる可し。

自然世界、已に瀾濁として知る可からず、人事亦た或は罪、或は無學、貧、餓死、病、涙、恨、

相接す。何等の暗黒、何事の瀾濁ぞ。今日忽然として愚の裡に經過し次の今日忽然として愚の中より來る。然れども人は終に人たるの外如何ともし難きを如何にせん。

神は決して捨て給はじ、決して、決して。嗚呼神の愛は深くして博し、限りなし。決して人間を暗黒の裡に捨て給はざるなり。人間は神を愛するの外、立つ能はず。

人間は神が命じ給ふ義務に従ひて極力之れに斃るゝ外希望はあらず。

午前引頭氏來る、薄暮歸る、伴うて出で西村モト氏の病を見舞ふ、歸宅十時なかば水谷氏より來狀、歸宅の際の實況を報ず、悲しき報知なり。返書を認め、神の信仰をすゝむ。

晴夜、満天の星彩、何者をか語れども、我が胸只だ躍るのみ、何事も聞く能はず。夜更けて下弦の月出づ、意外の桐葉、微光暗影の裡に娑婆たり。靜かに神に祈禱す。

六日、日曜日。
「眞實」ならば、凡ての事實、詩ならざるはなし。われ茲にあり。茲！ 嗚呼、茲！ 茲は事實なり。自然、人事は茲に存在する事實也。之に向つて無感覺なる者は愚人なり。然るに天下殆んど

愚人の憐れなる者のみ。たま／＼賢けなる人あるも、其は學問と云ふ死物に焼印せられてバツシヨンの裡に少しく感ずれども、到底シンセリティーなき人の一層憐れむ可き者なり。

「眞實」は宗教的、則ち信仰の生命なり。とはこれを以て吾々は云ふ。而も自らやゝもすれば「不眞實」の愚、「バツシヨン」の病に呼吸して如何ともする能はず。凡て何事にもあれ、われを失望せしめ、われを悲痛の極に至らしむる者は實に此の呼吸を意識せる時なり。

記憶せよ、爾の生命は義務の生命なり、神の愛と義と、美と眞とに捧げし義務の生命なり。義務なるぞ。

シンセリティーならば凡ての事實悉く詩なり。其故に其人には事實眞に事實にして幻影にあらず必らず何事をか深き意味を語り居ればなり。是を以て觀察の深き注意は詩人必然の事となる。

十時過ぎ田村三治氏來る。談話午後六時に至る。神田氏來る、「猶興」(雜誌)の事を語り、大江敬香の文章を難有さうに巻首に掲載する事の不可なるを説く。

詩人は何故に生るゝか、教へ育つ可からざる乎。われ今にして此れを得たり。シンセリティーは教へ示す可からざればなり。シンセリティーの感は直覺なり。直覺は教ふ可からず。而かも詩人が第一の生命はシンセリティーなり、如何に詩人らしくとも、シンセリティーなき詩人は何事も觀る能はず何事も教ふる能はざる也。

田村、「マルセーユの歌」を謳ふ、我が血湧く。嗚呼歴史よ、過去よ、過ぎゆきし同胞よ、愛する同胞よ、御身等今何處に在る、吾には御身等生れ居るなり。吾も決して死なじ。死や死や、吾決して死なじ。

事實、わが存在する茲に起り、茲に在り。茲に存し、茲に現はるゝ者は自然にせよ、人事にせよ。悉く事實なり、妄想に非ざる也。わが存在が事實なるが故に。

シンセリティーは決して教ふべからず、われ自らすらも不シンセリティーに在る時は不シンセリ

テイーを知らず、所謂慣性の生命に在るものなり。只だ突如としてシンセリテイーの感、胸を打ち來りて後ち始めて分時前の吾のシンセリテイーならざりしを知るなり。エマルソンが謂ふ所の「信仰は時々來り、不徳は習慣性」なる事實は吾を欺かず。

七日、月曜日。

自然とわれと一致調和せず、人事とわれと一致調和せず。此時程苦しき時はあらず、失望の時はあらず。

嗚呼われはシンセリテイーを失うて生くる能はず。呼吸の悉く塞がる心地する也。

吾は此の一週間、則ち今日より來る土曜日迄に何事を爲し得て幾何の進歩を得たるかを見る可し。

自然と人事とに對して、人は各之を見る眼を有す、其の眼は天然の眼に非ざる也、其前に各色の眼鏡置かる、其は無意識に置かれたる也。

故に強て彼に理屈をたゞさば、色々の言譯けを爲す可けれど而も到底、彼に生れたる人間、而して成長につきて染められたる人間なり。彼れが批評的脳髓と、彼れが無意識の眼鏡とは、何の關する所もあらず、彼の批評如何に巧にもあらばあれ、彼の眼鏡は彼れが眞の窓なり。彼れが眞の感受は、批評の頭より入り來らずして此の窓を通じて來る。之れ争ふ可からざる眞理なり。

其の眼鏡の色は様々あらん、されど要するに「不眞實」の者悉く然り、只自然の兒のみ能くシンセリテイーの眼を有す。

故に、自然の上に、人事の裡に、彼が眼の轉ずる處、眞ならぬはなく、神聖ならぬはなく、詩ならぬはなし。

吾は神よりの義務を感じて勉勵する能はず、愛の神聖、美の神聖、善、眞の神聖を感じる能はざる者ならば、生れ來りしを痛恨す。而かも動もすれば然るが故に自ら悶え苦しむ。

午前トルトイ著鷗外譯「瑞西館」を読む。叙事の妙、今の文壇に見る可からず。自然なり。直截なり。風韻なり。而して詳細綿密なり。四林湖畔にチロルの謳者を寫し來りて、薄暮靜天の下に彈ぜしめ、謳はしむ。之れ己に人を醉はしむるに足るの美なり。文明の英人富豪を捕へ來りて相

對照せしむ、激して憤怒となり、感慨となり、高遠の思想となる。一編の好文字也。
午睡す。醒めて哲學史を讀む。ソクラテスなり。彼が從容として毒杯を飲みしを想ひ、思はず泣
かしたり。嗚呼ソクラテス、ソクラテス大なるソクラテスよ。紀元前三百九十九年は吾に有り
て今の如し。

思ひ付きし新趣向あり。「書狀」なり。以て吾が壯調幽音を通はしむに足らむ。

此の趣向をば徹頭徹尾、シンセリティーの感によりて作り得ば如何に幸ひならん。

八日、火曜日。

吾が最も懼るは、最も惡むは、不シンセリティーなり、愚なり、不徳なり、災厄なり。愚鈍、不徳、
災厄の父母は不シンセリティーなり。而かも不シンセリティーの感、濁水の如く吾を浸たし來る
を覺ゆる時は爲す所を知らずして徒らに狼狽するのみ。

勇氣！ 然り勇氣、われ今にして始めて知りぬ、勇氣の徳を。勇氣は自信の唯一の證印にして、
而して又た報酬なり。

災厄の前に、人の顔の前に、弱點の前に、混沌の前に、無學の前に、勇氣なる哉！ 神は彼の勇
者にのみ勝利を與ふ、勝利々々、われは勝利を欲す。

大、善、美、眞理は極端にあらすしてハーモニーの裡にあり。故に詩人の中に、能く大や美や眞
理やを見出さるゝ也。詩人はハーモニーの化身なればなり。而してハーモニーはシンセリティー
とエムブレースとの融化の結果なり。かるが故に不シンセリティー通俗の論客は動もすれば大詩
人、大哲學者に向つて撞着云々と攻撃非難す。以て自らの小なることを白狀する也。

水谷眞熊氏より又書狀あり、其文に曰く――

第二信を報ぜんとして筆を手になす、何ぞ悲凄を感じるの甚しき、その由を白狀す。

到頭吾は半狂者となり了れり、父は愛兒の尋常ならざるを見て憤怒を以て殆んど絶えざるの勢、
母は殊更ら悲愁にむせべり、吾は四疊敷の奥部屋に引籠りて只だ悲鳴するのみ。

今日の儘にして此の境を脱し得ざれば只だ一死あるのみ、少なくとも精神的自殺あるのみ。

大兄若し小生に向ひ同情の眞心を許さば、徳富氏が何人にてよし、相謀りて小生を東京に呼

び出す可し、此境を時で、一口を糊するを得ば或は萬死を出で、一生を得るの大慈悲を受けん
則ち此の境は意平に心靜なる時精述することあらむ。

八月三日 三時

水 谷 生

庭前二百年前後に長けたる銀杏樹、吾が歸郷前一月頃より枯れて蟬の聲空しく囂すし、その下に泣きてしたゝむ。

國木田哲夫盟兄

彼れ遂に茲に到りぬ、嗚呼遂に茲に到りぬ。誰れか同情の涙ながらんや、讀み了りて嗚咽するのみ。神に祈りて曰く、彼を救ひ給へ、和らけ給へ、信仰を恢復して大神の愛を感じしめ給へと。彼れは實に不幸なる性質なり。彼は正直なれども不幸にも極めて怪しき反撥性を有す。故に彼は猫の如く撫でらるゝよりも蛇の如く打たれんことを望む。加ふるに極めて我慢強し。彼は今の如くして止まずんば何處に置くも到底不幸の兒、煩悶の惑星たらんのみ。

彼れを救ふ者は只だクリストの愛、神の愛の信仰なれども、彼は不幸にもバツションありてコンウ・クシヨンなし。彼は大なる盲目也、一轉して再生せんか、必ず大なる明者ならん。此盲目を救ふの法、吾が同情と誘導あるのみ。されど彼の火、徒らに盲目の裡に燃え盡きなば、あたら天

才も空しく俗中の傲骨に終らむか。惜しき人物なり。不幸なるソールなり、誰か同情の涙ながらんや。

兩親に書狀を認む。其大要に曰く――

安かれ、餘り心配する勿れ、天命を信ぜよ、命ならば是非もなし、貧にも餓にも安するの外あらじ。只だ信ずる所に勉強して待つ可き時を待たんのみ。朝は朝顔、夕は月、天地の美妙を楽しみ給へ。兒の事を案じ給ふな、愛の神頭上に在します。附記に曰く、
親は兒の行末を思ひ、兒は親の白髪を泣く。

記憶せよ人世到處悲劇あり。暗黒あり。此事實を事實として等閑に附する勿れ、悉く爾の前に意味深き教ならん、詩ならん。爾愈々勇を鼓して戦へ。

夕陽の美を窓外に望む毎に心躍る、綠葉鬱樹、斜めに光を受け碧空を負うて婆娑たり、光、色、空、動、風、生命、變化、嗚呼々々無窮の自然、大なる自然、神の衣、神の器、神の呼吸、神の

暗示、神の宮。嗚呼、死するも生くるも、人は茲の愛兒也。驕兒たる勿れ。ア、死するも生くるも、吾茲に在り。オ、永遠の生命、不死、不死、ア、神よ、感謝す。此の愛に答ふべく滿腔の熱心と忍耐をもて働かしの給へ。

本日午前「哲學史」を読み、ソクラテスを読み了る。

半夜、吾今獨り此の室に座す。四顧人眠りて寂寞たり。窓外を望めば滿天の星影燦然として深空にきらめく。靜かに人生の事を想ひ、愛の事、善の事、美の事、信仰の事、皮相の事、災難不幸の事、不徳罪惡の事を想ひて感慨に堪へず。嗚呼われ茲に來る豈に偶然たらんや、眞に偶然ならんや。神は大なる義務をわれに命じ給ひしなり。嗚呼生れて茲に來る、豈碌々として一生を消すに忍びんや、皮相に安んじ、不信に腐り以て一生只だ意味なき命を續くるに忍びんや、大に爲す處ある可し、奮起する處ある可し、辛苦する處あるべし。嗚呼男子生れて茲に來る、茲に來る、豈に碌々として一生を夢に消す可けんや。

九日。

昨夜、夜半記せし文字は實に近來のわが感情の高潮たるを疑はず。わが生命は一層シンセリテイーの中に入り、一層熱心の裡に入りぬ。われ實にしか感ず、われは決して皮相と小成と儉安とに満足する能はざる事になりぬ。善、此の語は一層眞面目なる意味を語り、美、此の文字は一層眞面目なる哀味を告ぐ。徳、眞、其の他人生のミザリイ、バイス、イグノランス、凡て吾に一層眞面目なる宗教的感情を加へぬ。見よ、々々、吾二人の吾ならんや、吾一度茲に來る、茲は事實なり。吾は事實なり。嗚呼吾には皮相の感殆んど落ちぬ。

本日午前早朝、徳富氏を訪ひ水谷氏の事を相談す、午後五時頃民友社に來れ阿部氏などとも重ねて相談せんとの事故行く積りなり。

午前紀淑雄氏を路に伴ひ歸り、談ず。之れ亦た皮相哲學、皮相バツションの徒、批評世界の人間なり。之れ實に人生の悲劇ならずとせんや。彼等に多少の學問ありて而して遂に火の如き信仰なし、シンセリテイーなし。之れ實に人生の大悲劇と云はざる可からず。

午後四時半民友社に行き、應接室にて徳富、阿部充家、人見一太郎の三氏と共に四人圍居、水谷氏を鹿兒島の新聞社に周旋し、水谷氏にもすゝむる事に一決す。歸宅後直に水谷氏に一書を裁す。

實際の社會は實に競争の世界なる事、民友社の人々と對話する毎に感ず。平和の戦争とは此事なり、人間相互の戦争なり。成程かゝる世界には鈍角の智者が勝利者なり。シンセリテイーなくして只だファンシー理想界に夢みてありし者にして、名利に急なる人物は此世界に三日置かば直ちに俗悟點頭して自ら得たりとなさん。

「南島巡航記」を読み感ずる所少からず。

十日、木曜日。

八月十日になりぬ、人生程不思議なるはあらず。見れば見る程、思へば思ふ程不思議なるはあらず、何ぞ夫れ種々難多なるや、苟もこれが説明を爲さんと思はゞ大にエムブレースする所なか

るべからず。例へばわが近日の見聞に付き言へば南洋島の生涯、徳富氏等の誇り、星亨の誇り、紀淑雄氏等の誇り、中桐確太郎！ 水谷眞熊！ 試に此人々に就て、其人の精神の注ぐ所、其人の慾望の集る所、其の熱心の燃ゆる所を観察する時は實に種々難多なりと言はざる可からず、苟も人生に就き教へ説明せんと欲せば、凡て此等のソールが變轉運行する所に付大に觀察し大にエムブレースの度を増さざる可からず。試に言へば、ウオーズウオルスと徳富氏との差如何、カイライルと紀淑雄氏との差如何、ナボレオンと中桐確太郎氏との差如何、下宿屋の下女とエマルソンとの差如何、植村正久氏と神田靜治との差如何、シエクスピリアと後藤伯との差如何、南洋島王田口卯吉氏との差は如何、其他難多の人間を相對照して來れ！ 只だ賢愚を以て別つ勿れ、只だ大小を以て別つ勿れ、只だ貧富を以て別つ勿れ、此の人名等各々が此地球上にて、故らに、則ち此の宇宙にて、此の無窮此の無邊の茲にて、其の五十年の一生を以て思想し感情し、行爲したる所に就き細かに對照し來れ！ 嗚呼此等個々の事實を對照し來れ！ 而して此等の人々を動かす撥條鏡を観察せよ。例へば、愛、美、慾、貧、富、眞理、信仰、名譽、幸福、災厄、其他種々難多の元素が、其人々の裡に化合抱合醱酵する模様、結果に就き冥想し來れ！ 人生は説明に難からず、されど此對照此觀察此冥想は其の極所を得んと思へば非常なるエムブレースとシンセリテ

イーとを要す。

白狀す、薄志弱行を、不信仰を、不シンセリテイーを。

神よ、助け給へ。嗚呼人生の事を思ふ、慨嘆に堪えざる也。

勇氣なき者よ、嗚呼勇氣なき者よ、躊躇し、失望し、救済する者よ、爾、人生を思へ、爾、眞實に人生を思へ、爾、頭上の大義務を忘るゝ勿れ、爾、神聖の世界を忘るゝ勿れ。

十一日、金曜日。

昨日昨夜は遊びて暮したり、不健全極まる時間を消しけり。其の報い直ちに不シンセリテイーを以てせられぬ。神の罪は少しも用捨なし。昨日早稲田なる宮崎吾一氏を訪ふ。もと早稲田郊外の夕陽を探らんと志して出でしも其行掛は不健全なる談話に導かれて了りぬ。

嗚呼爾、一個のソールよ自らおとす勿れ。決して自らおとす勿れ、義務、信仰、眞實、決して忘るゝ勿れ。

自ら經驗に徴するに、人の其眞實、信仰を失ふは、エムブレースする處を意識せざる時にあり。

(午前)、然り、々々、實に然り。(夜十一時半)

本日午前、早々神田なる引頭百太氏を訪ふ。午後歸宅せんと欲したれど、夜になれば中村石郎氏來宅の由を引領より聞きしかば終に止まりて中村石郎氏を待つ、氏は今春より北海道開拓事業に従事の爲め久しく相見えざりしが偶々上京せるなり。中村氏に逢ふ。談話北海道の事多し。夜十時半歸宅。

吾自ら小なるに驚く、例へば毀譽褒貶に頓着する所あるを見ればなり。何ぞ自ら信するの薄きぞ。何ぞ凡てを入るゝの量狭きぞ、何ぞ形骸に住む事の多きぞ。吾にありては信仰のみ、天職のみ。試みに時々顧みよ、必ず其の小なるに驚かん、例へば怒、例へば恨、例へば罵、皆自らの小を示す所以也。

「事實」の前に、「シンセリテイー」ならば、爾必ず眞を失はざるべし。貧を見れば憐まん、友人の困厄を見れば同情あらん、病める者には親切あらん、自然の類には心動き情暢びん、悪人を見れば教へ

る心とならん。善人を見れば敬する情とならん。其エムブレースする所愈々擴からん。觀察する所益々銳且精ならん。

クリストの如き、ソクラテスの如き、ウオルズウオルスの如き、カーライルの如き、其他聖賢眞人の深き信仰を想ふ毎に實に自らの不眞實なるに驚く。而して此永久無限の自然に對しては心迷ふ。

「事實」は眞實シニセライクの心に向つて必ず教ふ、試みに爾、思へ。

中村石郎、爾に何を説くか、引頭百太、爾に何を示すか、水谷眞熊、爾に何を語るか、今井忠治、徳富猪一郎、植村正久、田村三治、栗林拙三、國本田專八、石崎松兵衛、石崎トミ、吉見時、龜、菊、西村モト、河手忠、東秀、小川の婆さん、淺海謙輔、中桐確太郎、中山伸一、其他爾、キヤラクターを知る人々、爾に何を教へるか、皆な此等は爾と共に茲に來りし人間にして、爾の前に人生事實の部分の解説者なり。彼等は「事實」なればなり。

十二日。

あさなく、目さめて其日を迎へ、よなく、眠りて其日を送る。而して日々夜々只だ皮相、形骸に住みて、卑屈に陥り、怠慢に陥り、放浪に陥り、不眞面目に陥るを思ふ時は、慚愧の至りに堪へざる也。

余は自らの進歩を疑はず。故に忍耐して缺點愚鈍には失望し乍らも勉勵發奮する也。

一個の人、決して輕視す可からず。嗚呼一個の人、たゞ夫れ一個の人、宗教も之れが生命を考へ、哲學も之れが智識を究む、詩人は之れが眞情を探る。一個の人、例へば一個の相馬誠胤、一個の引頭百太、一個の今井忠治、彼は幻影に非ず、彼は虚相に非ず、生れて茲に來りし、心靈あり、運命あり、我あり、情あり、智あり、生死ある、一個巖然たる貴き存在也、争ふ可からざる存在也。以て此の大宇宙に立つ、消す可からず、磨す可からず、滅す可からず、隠す可からず、思つてこゝに至る、人を重んずるの念は理、將に自然に發動し來る也。

故にクリストは其の罪を視て措く能はず、身を捧けて之を救ふ事に死す、シエクスピリアは其の活動を描く、幻影を描かず、虚相を描かず、其の存在の活動を描く。(沙翁とス井デンボルグの關

係線は想ふにこゝに在り。カーライルは此心を指してシンセリティーの心となし、人間存在の間
の眞生命第一の要件となす、想うてこゝに至る、古來、聖人を動かし豫言者を動かし、哲人詩人
を動かせし撥條鐵を感じるに難からざるを覺ゆ。

これを感じて而して愈々深ければ、則ち神、愛、美、眞、罪惡、災厄、義務等の文字の眞の命を
呼吸するを得てわが心も亦たシンセリティーならざらんと欲すと雖も能はざるを知る也。

故にわれ人を重んず、其言動を見んことを希ふ、而して之を描き能はゞ幸也。其の皮相を見んこ
とを希ふ、之を教ゆるを得ば幸也。其の罪惡を見んことを希ふ、之を救ふことを得ば幸也。其
の災厄を見んことを希ふ、之れが同情を感じ得ば幸也。其の愛と、善と、誠と、義とを見んこと
を希ふ、之れに感動し得ば幸也。嗚呼吾果して見能ふか、輕々しく言ふ勿れ、眞に能く人を重ん
じ能ふか、而して能く見能ふか、而して能く言ひ能ふか、能くす、必ず能くす、否終に能くす
に至ることを務めん、わが天職、希望、勉強はかけて茲に在る也。

十三日、日曜日。

今は十二時少しく前なり。今日、何を記すべき。

午前四時半に起きて六時の汽車に乗り、逗子に行く、今井氏同伴、徳富猪一郎氏訪問なり、一日の

避暑なり。

詳細の事實は明日記す可し。今日は何を見能ひしか、何を感じ能ひしか、「シンセリティー」に幾
何の度を益し、「エムブレース」に幾何の量を加へしか。

十四日、朝。昨日の事を記す可し。

十二日の夜、半宵、突然眠を破れば、火事を報ずる鐘聲、四方に聞ゆ、言ふ可からざるシンセリ
ティーの感突如胸を打ち來る。直ちに吾を此宇宙の間に見出す。時間なく空間なく、凡ての慣性
の束縛なし、無限の幽愁泉の如く湧きて到る、吾未だ曾て此大シンセリティーに撲れたる事な
し。今は只だ猶ほ心にのこる其の壯調玄音を想像し得、之れ却つて大なる悲痛なり、實に大なる
悲痛也。何となれば今の吾は慣性の裡に住み居る事明白にして而かも彼の大シンセリティーの眞
感を、意に由りて呼び返す能はざるを知らばなり。然れども己に一度び感ずるを得たり、豈に一
度にして止まんや否一度にして止まざらんことを力む可し。

十三日午前四時半めさむ、今井氏五時に來る、六時發の汽車に乗る。東京灣の沖暗濤たり、品海
の天、斷雲の去ること疾し、雲間に碧空を見ることを得、光裂けて雲端の銀色と相映す、光落ち
て海面に白帆を明にす、車窓朝風に滿つ、路傍の白蓮花美なり。かゝる朝のかゝる空模様は旅行

的なりと吾今井氏に語れば氏もうなづく、横濱に着せし頃は雲消えて夏日初めて暑し。

返子に着けば、直ちに徳富氏を訪ふ、氏不在、細君云ふ、海濱にゆけりと、原田良八氏（報知社員）と三人、海濱に出で、右の濱をさがせども見えす、反て左の磯をつたうて行く、徳富氏、健二郎氏と一子と共に在り、我等三人は養神亭に投ず、吾と今井氏、一遊を試む、亭に歸り晝飯を了へて、三人共に徳富氏を訪ふ。暫にして驟雨沛然として至る、雨はれて、四人同道、跣足にて散歩に出掛け終に森戸の明神迄ゆく、熱土雨にさめ、山青く、海潤く、風景美、六代の墓を見物す。森戸の明神の岬端にて四人海水浴を試む、路に漁家に入りて海老をあつらえしなど面白し。歸路、吾と徳富氏と、又た海水に投ず。徳富氏の宅に歸り馳走にあづかる、日沈む、吾と今井氏と、返子にて汽車に乘らずして鎌倉迄歩行、鎌倉にて午後八時の汽車に乗り、歸京、歸宅は十一時頃なり。

▽嗚呼昨日の事を想起すれば恍惚たる者之を久うす。何者を看能ひしか、何事を感じ能ひしか、何の智慧を得しか、何の教を受けしか。何の進歩を得しか。ア、昨日の事を思へば恍惚たらずんばあらず。

海や、波や、白砂や、青山や、別荘や、行樂や、古跡や、夕陽や、漁村や、雲漢々や、富岳や、

かく列記して回想し來れば、恍として而かも一片暗愁の情何處よりか生じ來る也。

▽自然や、人事や、果して何の相關する所ぞ。自然の天地に見出す吾、人事の境に見出す吾、果して何の調和する所ぞ。

▽森戸の明神に行くみちく、徳富氏より、彼は誰の別荘なり、此は何人の別荘なりなど、世の富人等が夏日、避暑浴海の爲め、風景の地を撰びてかまゆる別荘許多を聞きぬ。海濱に夕陽を帯びたる構もあり、山腹に眺望を肆にする者もあり。煙波帆は眼下に横はり、遙かに富岳に對する美景は其の窓に當るなるべし。歸路「あぶすり」とて賴朝、其昔こゝを過ぎんとて路險に山峻なるが故あぶみを馬上土にすりたりと稱する處今は大道、懸崖にうねりて脚下遙かに波の音を聞く處に至る。忽ち馬車の前面より徐かに來るに逢ふ、之れ貴人を運ぶ馬車也。車上人なし只だ馭者徐ろに之を行るのみ、顧みれば富岳煙波を隔て、對陸に見ゆ、此の時吾が感、聲あり、「幸福」！と之れ實に未だ嘗て吾を打たざりし聲なり。今日返富人が行樂に對しては一方には貧者の悲慘を知るが故に、其の中に少しも「幸福」の音を聞かざりし也、而して今之れを聞きぬ。之れ羨みしに非ず、只だ人間、代々の人間が此の天地の間に、各、其の行樂を享有して生を送る事實に對して親しく感じたる迄なり、されど此の吾が感は美なる感なり。貧者が樂しげに暮すを見るも「幸

「福」を感じるなり。「同情」の感も起るなり。されど又た此の美なる風景、吾が心靜かに、やさしく穩かに、すなほになりし時は、其の貧者と富者とを問はず、其の行樂の「幸福」を感じざるを得ず。

此れ實に人生の耀ける部分なり。吾暗黒の部分を見ることに慣れ感ずる事に慣る、されど人生豈に暗黒のみならんや、人は幸福なるべきなり、天の美の裡に幸福なるべきなり。然らば此を感じ得たるは決して悪き事に非ず、余は「幸福」に同情す、一方に於て人世のミゼリーに同情の涙を注ぐと共に。嗚呼幸福に同情する者に非ずんば人を幸福に導く能はず。(午前)

▽自ら愚者となし、昧者となし、鈍者となして悲しむ可きか、之自信なきの極みなるを知る、獨立の靈を辱しむる者なるを知る、而も自ら遂に何事も知る能はず。何者を感じ、只だ、皮相俗情慣性の裡に妄想呼吸煩悶するに過ぎざることを明白に自覺するを如何にせん。ア、かく自覺すると稱すること已に自信なき證據なる乎。自信すべき乎、自ら知る可き乎。自ら知りて安んずべき乎。皮相に住み、俗情に役ぜられ、慣性に縛せらるゝを自覺しつゝも安んじ得べき者か。要するに之れ馬鹿の繰言たるに過ぎざる可し、而かも今日之れを繰返すの外如何ともなす能はざるぞ愈々悲痛の事なる哉。(夜九時)

▽昨日は逝きぬ、跡に何物か遺りし、今日は來りぬ、而して何者か來りし。今日も昨日の如く逝く可し、明日は今日の如く來らん。之れ少年の苦き嘆息なるか、老人はなれしのみ、老人は此法則に慣れしのみ。

▽昨日、六代の舊跡を訪ひし時、吾今日まで未だ嘗て感じた事なき一種の懐古の情に撲たれぬ、時間の地上をかすめ去る恐ろしき勢力に撲たれぬ。地上に遺されし古代の形見は、吾を此の慘憺たる地の上に見出ださしめぬ。已に地上に出す。則ち此の恐ろしき「時間」に吾を投じたる也。卒然として地に落ちぬ。吾は萬古蒼然たる墳墓の上に立つ也。墳墓の上に泣いて倒るゝ者は天を知らざる也。神聖なる信仰なき也。されば懐古の情にして眞實に動くならば、俗の人をして天に近かしめ、只だ天のみ夢みる人をして地の人たるを覺えしむ。嗚呼、六代！ 六代！ 吾今日來りて爾を弔す。爾の事、吾多くを知らず、又た餘り重きをも置かざる也。されど爾も亦た茲に生れて一生を演じぬ。吾亦た爾に後る七百四十餘年にして茲に生れて人間となる。山河草木蒼々として依然、無窮の天空又た悠々たり。爾去り、吾來り、吾亦去らん。爾何處より來り、何處にか逝きし、山河蒼々として答へず、無窮の天空も徒らに悠々、吾亦た何處より來り、何處にゆく可き。嗚呼生れて茲に在り。吾茲に在り。茲事實ならば、吾が存在も事實なり。時間が吾を同類

の人間の薄弱なる記憶より忘却せしむればとて吾茲に存在する事實は消す可からず。六代！六代！嗚呼爾が隣の一靈よ。吾爾と共に永久に存せん、永久に生れん。此の天地の神靈と共に！嗚呼神靈と共に！之れ實に我が信仰也。此信仰は吾をして今已に見る可からざる爾をも只だ一片の古墳の裡に視る能はしむ。爾は古墳に非ず、爾は碧苔に非ず、爾は生れて必ず神に在らん、六代！六代！吾が愛する兄弟の一よ！

▽本日は昨日發行の「國民之友」を讀みしのみ而も不注意なる讀方にて。

▽嗚呼六代！六代、多くの詩人は爾の生命、吾の生命を夢也、空也、泡沫也と歌へり。吾此の語を聞き、此の語を想ひ起す毎に、無限の悲を覺ゆ。ア、果して然るか、果して遂に然るか、時は殆んど天地も意味なき墓と化し萬事悉く意味なき戯となしぬ。されど吾爾の墓、爾が此地上に在りしかたみなる此の墓を視て古を懷へば此の悲哀は窮して更に一變し、別に直ちに最も高き意味に突き當る也。

▽懷古に付思ひ當ることあり、ウオーズウォルスの「バーンスの墓を弔ふ」詩を讀む。

十五日。

悲哉、悲哉、又苦しき哉。嗚呼何にかく煩悶するぞ、何ぞ自ら慰めざる、何故に自ら苦悶する斯

の如くなるぞ。吾、わが不シンセリテイーなるを知らばなり。皮相に住むを自覺すればなり。而かも自らシンセリテイーの感に還る能はざればなり。然れども爾徒らに自ら苦しむ勿れ、自ら感傷する勿れ、爾已に不シンセリテイーの中に在り、而かも自ら狂ふも何の益なきなり。徐に考へよ。

眞實、信仰、之れ吾が警語なり、事實、人情、之れ吾が觀察的なり。

トルストイ作「ボリクーシカ」を讀了す。

薄暮、神田に出で「史海」十卷を卅錢にて賣る、引頭百太氏を訪ふ。引頭氏、其亡父の「戰場日記」を示さる、日記は小さき手帳に鉛筆もて略記せる者也。蓋し戰場に在りて記せる者、田原坂十一日の戦迄にて止む、十四日は自ら討死せる也。引頭百太氏其の後母を失ひ又兄弟なし、孤兒なり。之れ悲惨の事實に非ずや。彼れが其の爲め如何に性質の上に影響されしかを思へ。可憐は引頭なり。

同道、立花亭と稱する寄席に至り、小清の「つゞれの錦」を聴く、歸路夜暗し、感少からず。

「事實」は意味なり、忠實、勉強なるを觀察なくてやは。
「事實」は必ず之を天の土より見よ、然らずんば、新しからず、眞ならず、深からず、面白からず。

中桐氏より書状來る、哀れなる書状なり。國元に一書を出す。父免職ならば、東京に移轉せんと云ふ父母の説に賛成す。

十六日。

神聖の感滅じ、インデイユデアリズムの感滅じたるはシンセリティーの感滅じたる證據なり。神に對し、自然に對し、人間に對し、美、善、眞、災厄、バイスに對して一膜を隔つる如く感ず。之れシンセリティーの感滅じたる兆なり、何故に滅じたるか、油斷したればなり、何時油斷したるか。十日、十一日、十二日、之れ油斷の時間なり。

古跡に就きての懷舊の情は永遠の自然と一轉瞬の人生との對照也。故に懷古の詩は必ず其の中に宇宙觀と人生觀とを含む。漢詩を見よ、然り、歐詩を見よ、然らむ、バイロンの「ベエニス感慨」

の詩を見るに大に然る者あり。

バイロン、バインズに就き一點光を得たり、以後之を味はん。此二人、詩人中の不幸者、詩人中の詩人、必ず讀んで發明する所あらん。

吾今は正に讀んで之を得るに最も適したる時なり、シンセリティーの燃え居ればなり、「事實」に眞實なる時なればなり。

信仰、自信、眞實ならば自動的、主動的なるが故に「事實」の支配を受けず、必ず能く之を觀ん。

滅じたりと言ふを止めよ、初めより少なきなり。初めより淺きなり。哲人、聖者、詩人等が言行を見て、自ら反省する時は、吾の猶ほ人生に對し自然に對しルーズなるを感ずる也。淺薄なるを感ずる也。眞面目ならざるを感ずるなり。極めてシンセリティーならざるを感ずるなり。

十七日。氣冷かにして朝まだきより寒雨。

昨夜、夜更けて沈思冥想一時に及ぶ。滿天の星影親しく吾が孤懷を照すあり。「星づく夜」の

想^{イマジネーション}像を走らせば、眞實の感、轉た加はる、曾て「明月の夜」を想像す。今朝「雨蕭々」を想像す。古人を想像し、平野の雨を想像す、雨降る街の貧兒を想像し、雨降る海の行舟を想像し、想像より想像に走れば、人生、人生の事實、歴々として感情を衝き來る。

吾今にても始めて「イマジネーション」の不思議靈妙の力を悟りぬ。「事實」は信仰、眞實の命なり。「イマジネーション」は其「事實」を眼前に並ぶる者也。千年の昔も今日の如く、今日も萬年の昔と想へば想ひ得べし。若し其の上に一片の月を想ひ來らば蒼然たる「時」の翼の羽音を聞き得ん。

吾これを以て信ず、詩人は最も廣く最も深き歸納家なり。

言ふあり詩人は妄想に住むと、否也詩人こそ最も事實に住み眞實に住む者なれ。所謂實際の事實に住むと云ふ者は皮相に住み妄想に宿る。

午前中桐確太郎氏に書狀を認む、中に句ありバイロン、バーンス若しくはカーライル、或はダンテ、能くは知らねども、思ふたよりも大人に候、來て見れば聞より低し富士の山と申せ共、登りて見

れば下で眺めたよりも案外高き者に候。

バイロン Childe Harold's カント、五を讀み始む。

午眠三時間、夜、「書狀」を草稿す、前夜より毎夜、「書狀」に付腹稿、草稿することに定めぬ。十八日。朝より風強く雨繁し。

詩人！ 詩人とは此神聖なるミステリーの中に住みて、之を忘却して皮相傳聞の中に住む俗人を教ゆる者に非ずや。カーライル曰く――

While others forget it, he knows it;—I might say, he has been driven to know it; without consent asked of him, he finds himself living in it, bound to live in it. Once more, here is no Hearsay, but a direct Insight and Belief.

之れ大眞理なり。之れ則ちエマルソンが、

Here we find ourselves, suddenly, not in a critical speculation, but in a holy place, and should go very warily and reverently. We stand before the secret of the world, their where being passes into Appearance, and Unity into Variaty.

嗚呼われ何故に今二氏の語を引ききたるか、則ち詩人哲人等が感想に付て黙想すれば愈々この真理の深きを覚え、此真理の深きを覺ゆれば愈々己れが淺薄愚鈍なるを知ればなり。己に然り、われ如何にして詩人たるを得ん。然らば失望す可きか、失望して而して何を爲す可きか、淺薄、愚鈍なり。一個の靈、堂々たる一個のソール、決して幻影にあらず決して虛妄にあらざる一個のソール、彼は自ら淺薄愚鈍なることを自覺し、而して其れにて安んず可きか、否、安んじ得るか。詩人たるは詩人たらざるとにせよ。

若し只だこの自然を頑迷不靈なる者と想像して、無窮に走しる恐ろしき時の足跡を想ひ、無邊に擴がる實際の深遠を想ひ、限りなき人間の生死を想ひ、紛々たる此會の交渉を想ふて茲に一個のわれを顧みる時は實に渺乎として有るか無きかの如く、何の意味も無く消えて何の關はる所もなきを感ぜずんばあらず。われ實に動もすればしか感ず。嗚呼此時の失望は如何。一泡沫畢竟何の徳する所ぞ、思ふて茲に至る誰れか失望自棄せざらんや。人間、眞面目の味全く亡ぶ。何等の希望か、吾を勵す可き。何等の感想か、吾を「神聖」の信仰より遠からしむる者ぞ。何等の魔力か吾を「義務」の念より離れしむる者ぞ。何等の迷想ぞ。われをして美や善や愛に對して神靈の意

を鈍らしむるぞ。

神聖、美、愛、義務、自由、言ふは易し、思ふも易し。其の中に己れを見出し、其の中に住むに至りては決して決して容易の事に非ず。吾今、其の外に在り。外に在りて此言を爲す、而かも中に見出し中に住む能はず、切に望む何者の魔力ぞ吾を迷はしめ、吾を塗抹し、吾を掩ひ、吾を欺き、吾をして此皮相に在りて如何ともなす能はざらしむるぞ。わが精神を衰へしめ、わが感覺を鈍からしめ、吾を怠らしめ、吾を苦ましめ、吾を失望せしむる者は實に「神聖」の外に在らしむる魔力なり。われは此魔力の性質を知らん事を希ふ。嗚呼魔力の下に在り、何ぞ魔力の性質を知るを得ん。魔力よ、き力よ、われをして何時まで爾の下に悶えしむるぞ。爾は世界の人間の中に僅かの人々を除いては悉く己れが魔術に陥らしめたり。ア、吾己に爾を認む、認むるは爾に勝つの最初なり。

豈に終に希望なしとせんや、嗚呼豈終に希望なしとせんや。われ義務を感じたることあり。神聖を感じたることあり。神の愛、善と美のリアリテイ、永遠の生命を感じたることあり。信仰の火燃えしことあり。されど今は然らず。然らずと知り乍ら平然たるは何故ぞや、不シンセリテイ一なればなり。ア、斯く種々に批評するは易きことなり。之れ

何の益にも立たず、凡ての言葉に過ぎず、實に無益なり。

十九日。昨旦の暴風暴雨は逝きぬ。

午前、哲學史を讀みつゝある時、金子馬次氏來宅、十一時迄で談話して去る、則ち今は十一時なり。「早稻田文學」三冊を金子氏持參、氏の詩才論掲載の分なり。

余は切に感ず、上帝を信じ、其の永遠と善と美を感じ能はざるは耻なり、人間の耻の最大なる者なりと。何となれば彼は何者にか欺かれ居ればなり。彼はシンセリティーの感必ず乏ければなり其の品性必ず劣等なれば也。吾の直感はこの如し、之れ吾の經驗せる所なり。

われミルトンを想ふて泣きぬ。其の堂々たる生涯、其の明々熒々として炎の如き信仰、其が高尙、偉大を想ふて泣きぬ。此の天の下、同じく此の天の下、此の地の上、同じく此の地の上、此の人類、同じく此の人類の一員として共に茲に生れ乍ら、而して共に同じく死す可き者なるにもかゝらず、如何なれば吾はかく迄信仰薄く、節操弱く、精神卑しきを想ふて泣きぬ。されどされど吾遂に皮相に死し、卑劣に死し、無爲に死す可けんや。記憶せよ、神の愛と美は吾をめぐみ給

ふ也。

「神と自然と人間」、これ最も偉大なる深玄の思想なり。されど色々の淺薄なる感想、人間の様々の弱點は此の三者の神聖幽玄なる一致調和の關係をきりきざむ也。

テインの如きあればテニソンの如きあり。テインには人生、萬物悉く物質の行きがゝりとなり、テニソンには神聖靈妙の物となる。

テインはカーライルを嘲けれども、テインは到底カーライルの命を知る能はず、然るにカーライルよりすればテインが思想の組織は底まで見抜き得るなり。何となればテイン的感想はカーライルの感想に達する道行の一階段に過ぎずして、カーライルの如き其他神聖信徒の曾て一度はピストルを片手に飛び越したる心なればなり。

テニソン曾て其希望を告げて曰く、「吾が最も大なる願は天神の活如たる幻影を見るにあり」と、到底神聖世界の中に己れを見出す者に非ざるよりは解し能はざる言葉なり。

されどわれ思ふ、世間の有神論者なる者、神秘神聖を認むると稱する者、其の實、悉くテイン的

感想の中に半ば住める者なり。故に其の一生は區々たる批評家にあらずんば、活動熱心なき五十年の経過にして止む者皆然り。

思ふに彼のテーン一流の人々には「歴史」則ち過去が餘りに明白に想像せられ居る可し。過去の人物も出来事も彼等には連続せる一連の鎖として見ゆるなる可し。彼等は其の一端、則現在一端を握り居る者と想像し居る可し。而して之をたぐりて行かば過去の文物にも接す可く、人物にも面會するを得べしと想像し居る可し、故に彼の歴史を重じ進化説に重きを置く人々はやゝもすれば物質思想に陥りて一個人の個々の生命が、「時間」を離れて繋がるべき高遠幽深なる關係を感想する能はざるなり。此の人々は己れを歴史の連続の中に見出せども終に己れを無限の自然無窮の天地の中に見出す能はざる也。故に彼等には靈魂不滅などの信仰は其感想上何の鼓動をも與へざる可し。

能くは知らねども歴史家は多く物質的の傾向を有するが如し。少なくとも人間永遠の存在、靈魂不死等を信ぜざるが如し。但しカーライルの如きは歴史家と稱すと雖も別なり。彼は其信仰の證人として過去を説けるのみ。

之れ或は歴史なき古代野蠻の人間は却て宗教心あり、田舎の老翁の無學者に却て宗教心ありて、學者に宗教心なき所以に非ずや、歴史の感想なき者は直ちに自己を「自然」に面す。「自然」は直ちに自己の上に落ち来る、自己と自然と其間に何者をも感想せず。然るに歴史學者の感想に至りては然らず、自然は只だ頑として其の物質的關係あるのみにして人間が生命の最重の關係は上代より受けて之れ後代に送る歴史的關係のみ。感想の人には天地を靈と稱すとも神聖と言ふとも、靈魂不滅と云ふとも美、善がリアリティと云ふとも凡て意味をなさざる也。ゲーテが歴史に重きを置かざりしも、思ふに彼れが感想の到底此の心理的傾向と一致せざりしに由るものに非ざる乎。

物質的、歴史的感想に感染する人が、定命説を奉ずるに至るは當然の傾向なり。されど若し彼れ其連続せる歴史的感想を脱却して、而して定命説を信するならば彼が絶望の最後は自殺ならんのみ。われは實にテーンに由りて人間弱點の幾分を學びぬ。

今テーンを思ふて而してエマルソンの如きカーライルの如き、ウオルズウオースの如きテニソンの如き廻りてはミルトンの如きルーテルの如きを想ひ相對照し來る時は、大に學ぶ所あるを覺ゆ若し其の人が一種の實行家、道德家、而して無神秘家ならば彼亦遂にテーン一流の人に過ぎず。

或は、高尚なる者のみ。今日我國にては田口氏の如きは其の例ならん、徳富氏の如きも人性人情の一を信じ、道徳に確信を有すれども、遂にマコーレー、モーレー一流に過ぎざらんとす。

二十一日。

二十日は日曜日なり。午前會堂に詣る、植村正久氏の説教あり。西行法師と菅原道真に付て人間宗教心の止む可からざる所以を説く。

説教了りて散會せんとするや吾も亦徐ろに立つ、人々肅々出で行く、吾何心なく之れを見送る、忽然と言ふ可からざる寂寞を感じる。堂を出で、歸路に就く、獨り黙然として行く。今われに殆んど相語るに足るの友なく、信仰の事の如きは只だ自ら思ふて自ら感じ、自ら苦しむのみにして、來て吾が精神に同情を表する者もなく、進んで、此の熱情をもらすに適する友もなきを思ひ無邊の天地只だ一個の吾が孤影悄悄たるを想像し來れば、冷かなる涙の瘦頼に流るゝを止むる能はざりし。若し此の如きにして上帝の存在を信じ、其の愛と永久の命とを感じる能はざりしならば果して如何なりしぞ。

吾未だ實に此の如き寂寞の感に打たれたる事なく、上帝の愛に頼らんことを感ぜせしことなし。されど暫くして又た人間の愛を思ひ、人間の交通を考へぬれば、何時か寂寞の感も去りぬ。

昨日より一昨日にかけて、我人生の眞面目なるを感ずること深く、一個の吾の此天地此の人間界に存在するを感ずること強く、極めて人類の事に眞面目を感じ、神と人類との間の眞面目なる關係を感じぬ。随つて一個の情慾利己的のイゴゝ忽然として亡び、一個の獨立の「我」の大義務を感ずること強く一生を重する情心胸を鼓動し來り、献身の念勃然として燃ゆるを覺ゆ。

吾を偉大ならしむる者は之れなり、吾が一生を意味あり光榮あらしむる者は之れ也。若し吾が此偉大崇高なる感想に鼓舞せられて而して我一生事遂に見る可きなくんば、人生其の者は斷じて意味なき者也。故に我にして一生碌々として人世の爲めに大功を樹つる能はず、有るか無きかの如く朽つるならば、之れ人生其者の意味なきに非ずして、吾が此偉大なる感想の吾より亡びし也、則吾墮落せし也。

神は偉大を好み給ふ、人間悉く偉大たる可き義務を有す。偉大たる能はざるは神の前に罪なり。何となれば神の信仰さへ眞實堅固にして衷心已む能はず蹴起したる者ならば、偉大ならざらんと欲すと雖も能はざればなり。

嗚呼我は光榮ある一生を希ふ、碌々として爲すなくんば吾如何なる罪をもいなむ能はず。

而して思ふに吾光榮ある一生は決して難からざる可し。吾が行爲と吾が文筆とに由りて人生の皮相、虚榮、弱點、空虚を道破し、神の美と善と眞とを教へ、自由の爲めに信仰の爲めに、不幸の爲めに災厄の爲めに熱血を注がば足れり。一言すれば信仰と勞働とは神必ず之を賞し給はん。嗚呼一生！ 茲に於ける一生！、人生は眞面目なり。

以上の事を書して以て自ら誠めしは朝なり。而して今此章を記するは夜なり。幾時間は経過しぬ。我が一生の幾時間は経過しぬ。今若し冷やかに反省し來れば、此幾時間の我が経過の如きも亦た學ぶ所少なからざるを覺ゆ。

午前に書せし者は確かに一度我を鼓動奮起せしめたる偉大の感情なり。シンセリテイーの感の偉大なる者なり。

午後は苦しく過ぎぬ、何故ぞ。吾は數日前よりの雨天と不順なる氣候の爲めに身體きはめてすぐれず、本日終に床を敷て横はりたり。吾の薄弱なる、吾の愚鈍なる、何時しか、かの偉大の感情は亡び失せぬ。幾度呼び返さんとすれども返へらず、吾は只だ、皮相醜怪腐敗せる妄想より妄想に走るのみ、幾度か拂はんと欲して拂ふ能はず、茲に於て徒らに悶がき苦しむのみ。此時突然想

ひ起したることあり、そは昨日河野隆輔氏と共に神田勤工場に入りたる際偶然一藏の畫を見た、之れ雪舟の描く處山水の圖なり、又た之れ寂寞の中に世外的平和の生活を寫せる人生の一端一見吾が腦底に深く印象されぬ。則ち突然想起せるは此圖なり。徒らに信仰の火を望み、而して人間の弱點と苦悶してつかれ果てしわれは突然此圖を想起しぬ。直ちに蹴起して神田に行き遂に求めて（代價六錢）歸り今懸けて壁面に在り。

嗚呼冷かに反省し來れば之れ亦た人生の悲劇に非ずや、彼は幾度か鬱勃幽玄にして偉大なる感情に打たれぬ、されど彼が二十餘年の生涯は己に皮相、罪惡、冥暗の中に染めぬかれたる者なり。豈に一朝にして露を拂ふが如く消ゆ可けんや。故に機會さへあれば、舊きわれは新しきわれに復活せんと試む。而して常に成功す。茲に於てか苦悶來る、失望來る。之れ人生の悲劇に非らずや。ア、斯く自ら評し得て而かも如何ともなし能はぬこそ悲劇の極みなれ。此の際唯一點の希望は己に一度び我が胸底に漲ぎりし、神來の信仰は決して消ゆ可からず。故に苦悶は則ち人間弱點の發見にして、終には之に打ち勝つの時ある可し、之れ希望なり。

昨日午後河野隆輔來、三時頃同伴外出、獨り引頭百太氏を訪ふ、夜十一時歸宅す。

吾は宗教的熱心、宗教的真面目、宗教的義務に非らずんば貴ぶ能はず、言ひ換ゆれば人生のベリ
ーフより来る者に非ずんば如何なる熱心も、如何なる真面目も決して貴ぶ能はず。更に言ひ換ゆ
ればシンセリテイーにもとづかざる者は貴ぶ能はず。

二十二日。

昨夜水谷氏より來狀、今朝返事を認む。

フロード氏の「カーライル傳」を読む、こは書狀を集めたる者なり。思ふに此傳によりカーライ
ルが内なる生命の變轉の幾分を學ぶを得て、人生を考ふるに付大に發明する所ある可しと信ず。

吾は我が天才を信する能はず。吾は決して才智拔群の者に非ず。されど只だ信ず、吾も亦一個堂
々たる靈ソウルの一なる事を。吾も亦た宇宙間に永久存在す可き星の一つなることを、吾が生涯は眞面
目の生涯にして足れり、吾が天職は眞面目なる天職なり。己に眞面目なり。吾はたゞ有る限りの
熱心と努力とを以て人生の事を研究して得る所あれば以て他の同胞に教ゆ可きのみ。ア、未來！
何の未來ぞ！ア、希望、何の希望ぞ！英雄！英雄！わが血わく、われは其空名を望むに
あらず、其の虚榮を羨むにあらず。只だ其の堂々たる生涯、赫々の事業を想ふて眞に人生の眞面

目なるを感ずる也。祿々たるは耻なり、祿々たるは眞に耻なり、祿々たるならば吾生きざりしを
希ふ。嗚呼英雄、わが熱涙ほとばしる。

カーライル爾「英雄」を解して自ら英雄となる。吾れ英雄論を讀みて後己に一年、再讀して後己
に半年。而して今にして始めて「英雄」崇拜の眞意をさとるぬ。「英雄」を尊ぶ所以、實に人生を
貴ぶ所以なり。人生を貴ぶ者は英雄を希ふがあたりまへなり。英雄とは己れの生命の意味を重し、
熱血と熱心と熱涙とを以て神の前に、此の地上に、同胞の爲めに、最も眞面目なる生涯を送りた
る者を云ふ。

己に人生の事に付多少煩悶考究する所あり。而して後ち傳記を讀む時は實に興味を感じ又た發明
する所あるなり。歴史を讀むも亦然らん、何となれば胸間己に A certain Ground plan of
human nature and life (カーライルサルトル) が出來居るが故に傳記歴史は實例となればなり。
吾の目下の位置之れなり。

吾は少しく讀みて多く考へ、多く苦しみ、多く悶へ、多く自ら發明せり。吾が多く讀むべき時は
來りぬ。

比較は最も能く吾人に人心の變化を教ゆ。人心は染み易く、迷ひ易し、其の迷ひ、其の皮相を見んと思はゞ現實の人間の比較にしくはあらず。則ち人々の内なる生命の比較に如くはあらず。例令ばカーライルと伊勢時雄を比較して見よ、時雄が遂に知るべからずと稱して學者らしく安ずる所はカーライルが火の如く熱心になりて安んずる能はざる所なり。故に時雄は淺き信仰に浮び、カーライルは岩の如き確信に立つ。然らば何故に時雄は安んじカーライルは安んじ能はざる乎。則ち時雄は非シンセリテイーにしてカーライルはシンセリテイーたる所以なり。則ち時雄は俗物にしてカーライルは英雄たる所以なり。此の比較によりてシンセリテイーの人心に及ぼす力と不シンセリテイーの迷とを見るに足らん。

其他徳富猪一郎とウオーズウォルスを比較して見よ。

徳富の安んずる所、果してウオーズウォルスの安んずる所なるか。徳富の安んずる所はウオ氏の安んじ能はざる所也。故に靈魂不死を小兒草花の中に求む、而して徳富氏は何が故に人世の事は知る可からずと稱して而かも安んずる所ある乎。其安んずる所の性質は如何、此の比較も亦た預言者と實際家との人心の變を見るに足らん。

テーンとテニソンとの比較は愈々、意味深かる可し。

其他普通の俗人、下女と西行とを比較して如何、凡て此等の比較は實に人生の意味を研究し、人心の變化を見るに最も便利なる法なりといふべし。

* * * * *

今日は過ぎぬ。我れ今眠に就かんとす、窓を開て戶外を望めば、天曇りて暗く、風は樹梢に鳴る凡て悲惨の光景なり。若し此天地が只だ頑迷不靈の者に過ぎずして、人生は只だ、行掛りの意味もなき経過ならば、如何で此の寂寥たる光景に對して半時間の生命を保つの勇氣あらんや。

二十三日。

無邊の「スペース」と無窮の「タイム」とは吾をして忘れんと欲して忘れ能はざらしむ。此種の感想は絶えず吾に纏ひつく。吾が眼には凡ての秘密、悉く此二つの中にかくれ居るが見ゆ。

『人は如何に生活す可きか』(How to live)を思ふ時は吾、様々の人生を想像する也。嗚呼實に様々の生命を想像する也。吾が想像は山間の人民より、島裡の漁民より、エジプトの人民より、古ローマの人民より、南洋の人民より、支那の人民より、市街の人民より、或はミルトン或はウオ

トズウォルス或はワシントン、或は男より女より小兒より、古より今より、戰場より桃源より、小説中の人物より、下宿屋の主人より、牧師より、或はクリスト、或は孔子、或は釋迦に至る迄吾が想像は凡ての人間の生命に走り廻るなり。暗涙熱涙憤涙は止めんと欲して止む可からず。嗚呼人生、變化極りなき人生の意遂に如何。

晝飯を了へて後直ちに、郊外散歩に出掛く。連日の雨晴れ、久振りに晴天を見るを得たればなり。夏も過ぎなんとして綠葉逝かんとする時、今一度夏の郊外を見舞はんとてなり。牛込なる戸山郊外に出で、大久保百人町より四谷にめぐり、新宿を過ぎて歸る。多くの人間を見たり。寂寞の草原を歩みぬ。

己れを神聖の天地に見出す者は幸なる哉、彼は最も高き處に在り、あらゆる人生の變化は彼之れを透察明觀するを得。彼は理想の佳人を見ることを得べし、彼は理想の偉男子を見るべし。彼が想像はあらゆる美の現はるゝ處、ひそむ處に驅廻る可し。彼は紛々たる人事の上に立つ最も智慧ある批判家ならん。

墳墓も彼の前には語る可し。

嗚呼信仰なき人心よ、汝は最も哀れむ可き者なり。

天地に生れ、社會に來たりたる一個の人間の人間なることを知るが最初の發程なり。然り、然り詩人最初の發程なり。

二十四日。

嗚呼哀れむ可き爾一個のソールよ、吾は爾が自ら爾を茲に見出せるを憐れむ。茲は爾に取りて餘りに大なり。餘りに複雑なり。爾愚なるソールよ。茲は爾の智識には餘りに直接なり。

爾が多感なる想像は、茲に來りし爾の同類の運命の上に翔る、爾は山間に樵夫一個の靈を想ふ、爾は海濱に漁夫一個の靈を想ふ、爾は陋巷に餓婦一個の靈を想ふ、爾は獄裏に罪囚一個の靈を想ふ。爾は殿上に貴人一個の靈を想ふ、爾は殿上に貴人一個の靈を想ふ、爾は戰場に白骨半片の靈を想ふ、靈が想像は古へより今、西より東、凡て人類存在の運命の上を駛る、而して自らを運命の裡に見出す。(午前)

されど茲は茲なり、汝は如何にすればとて茲より出でのがるゝを得ざるなり。汝は汝なり、確か

に一個の獨立の靈なり。月の冷やかに照らす處、老の咲く處、太陽の輝く處、此地球上五十年の命こそ汝が運命なれ。汝を掩ふに無邊の空間あり、汝の前後に無窮の時あり。無邊無窮の茲に半斤の塊、臨時の命に寄す。これ事實なり。争ふてよしなき事實なり。(夜半)

吾の遂に我にして一個獨立の靈なることを感ずる愈々強く、隨て勇氣生じ、自由生じ、進んで止む能はざる精神振ひ、忍耐生じ、精力加はる。之れもとより當然の事なり。眞理なり。自然なり將に然るべき事なり。

嗚呼吾一生、もとより唯だ夫れ一生たるに過ぎず。されど一生は一生なり。わが一生なり。實にわが一生なり。事實なり。

もとよりたゞ一生たるに過ぎず。されど茲若し神聖なる者に非らず、神もなく靈もなく、只だ物質の頑々たる變化に過ぎざるならば、生命遂に一分も保つての價あらず。

わが信仰は之れなり、實に之れなり。わが一個の靈、たゞ神を認めて初めて希望あり、勇氣あり。吾思ふ宗教心なき人間は最も劣等なる人間なりと。

カーライル傳を読み、獨逸語研究に二日を費す。

薄暮今井氏を誘ひ、郊外に散歩す。月美なればなり。戸山練兵場より、林間平野を跋渉して、四谷に出て歸宅すれば十時半なり。

嗚呼美や美や、わが命なり。わが想像は爾にふれて初めて疲れざる翼を得るなり。月や、林や、野や、橋や、黍や、蟲聲や、平原や、茅屋や、天空や、星海や、此の美にして聖なる富は大なる哉。

二十五日。

嗚呼が荒きスピリットよ。壓へて壓ゆ可からず、屈せんとして屈す可からず、慣らさんとして慣す可からざるスピリットよ。ア、我遂に勝たん。勝たざる可からざる也。

「自然」なる觀念が屢々彼に起るに至らば、彼は稍々進歩したるなり。之れシンセリティーの入口にして遂に信仰の入口なり。

疎雜なる感想吾れを惑はす時に於て、混沌たる感情わが信仰を傷けわが獨立を壞らんとする時に於て、靜に、徐ろに、ウオーズウォルス詩中のミカエルを想ひ、其のシムブルなる。其のイン、

「セント」なる生活を想ふ時は熱涙止めんと欲して止む可からず、わが魂は直ちに神の直感也。嗚呼此の無邊無窮の宇宙、此の變轉不可思議の人生、吾人は是れをミカエルの胸中に納めんと欲す。

日々朝々、起きて何をか求むる、夜々眠りて何をか夢むぞ。嗚呼何を求め何を望むぞ。

二十六日。

朝々起きて求むる所何事ぞ、書何を教ゆるぞ、自然何を教ゆるぞ。嗚呼得る所遂に何事ぞや。俗名の遂に空なるを知る、慾望の畢竟空なるを知る、而も我の我なる事實を知る、自然の永遠なるを知る、無邊なるを知る。嗚呼我が極まる處、止まるべき處、遂に那邊に在るぞ。

嗚呼我は如何にするも自ら輕んずる能はず。自ら曖昧なる地に置いて安ずる能はず。吾我にして我に在りて全體なるが故なり。社會の一員として只だ重するにあらず、實に此不思議なる天地間の一存在として重するなり。

吾が求むるは他にあらず。此頃、毎日毎夜熱望するは他にあらず。自らの滿腔の熱血と滿身の忍

耐力と滿身の精力とを注がざるを得ざる程の信仰を得たきなり。吾は決して此世界の上にて五十年短しと雖も半信半疑の中に習慣的行爲を爲して経過するを欲せず、否な能はず。記憶せよ五十年六十年七十年八十年短しと雖も、吾が地球上の生命の全體なるなり。吾が生活の全體なるなり。千年の習慣的生命よりも一日の信仰の火に生き度きは吾が眞實なる願なり。之れ比喻にあらず。眞實の事なり。吾は信仰なき生命程懶く感ずるはあらず。信仰！ベソーフ！フェース。あらゆる勇氣は此中にあり。あらゆる満足は此中に在り。吾は此頃の命も、只だ幾何の信仰にのみ由るなり。若し今にもせよ全く信仰が減するならば。則ち神の存在、其の善と美と眞のリアリテイ。靈魂不滅、永遠の存在、天の國。凡て是等の信仰が全く破るゝならば吾は決して安閑と生命を續くる能はざる也。只だ幾分吾の貴き使命あり義務ありと信するが故に此の勉強を續け得る也、嗚呼されど時々失望するは何故ぞ。朝なく失ふ所ある如く求むるは何事ぞ。言ふ迄もなく大信仰なり。今一層強き信仰なり。實に之なり。日々苦闘するは實に之れなり。

然り、吾にして猶一層明瞭に神の法則を見るを得、神の愛に打たれ、世界の神聖に感ずるにあらずんば決して吾が使命を全うする能はざるべし。否な或は今の信仰さへも減び了らん。若し果して然るに至らんには、吾は斷言す、人生は空なり。あらゆる人生は空なり。人間は惡魔の怪しき

運命に弄せらるゝ空物なり。

二十七日、日曜日。

今、夜半。

夏の終り、秋の初め、期節は稍物寂しき方になりぬ。吾が愛する夏、滿腔の愛を注ぎし夏は逝きて寂しき秋は來らんとす、吾は實にこれを悲むなり。

彼の雲の峰、彼の緑の葉、彼の夕陽、又た一年の後にあらずんば見る可からざる乎、悲む可き哉。

今、夜半。十六日の明月なる可き夜は雨蕭々として降る夜となる、寒き風已に窓外に鳴るなり。

「寂寞」「悲哀」の期節は已に見舞しか。

午前教會堂に出席す、植村正久氏の説教あり。

約翰傳十四章二十二節以下に就き説明。十四章朗讀、植村氏祈禱の際、神の愛を想ひ、クリストの大信仰を感じ、自らの弱き信仰を省み、思はず暗涙止むる能はざりき。

されど午後半日は、殆んどとりとめなき煩悶に苦しみぬ。只だ迷路に陥りしが如き煩悶に苦しみぬ。

薄暮今井氏宅を訪ふ。忠次氏不在、家族の人々と遊びて歸る。

悟りぬ、自ら強て信仰の熱火を得んとあせらば、信仰は來らずして只だ煩悶と偏僻なる感情のみ來る。

寧ろ、「己れの信仰」てふ不熱望を捨て、靜に、自然の事、人生の事、人間獨立の事、永遠の時無邊の時の事など考へ、以て神を求め、愛を感じ、美を感じ自然に來る信仰を振ふを可とす。

「淳朴シムプルの涯オウフ」之れ今日初めて明白に其中に含める眞理を悟りぬ。

二十八日

心靈の自由と獨立と神明の自然と深遠とを感じる毎に常に自ら思ふ、われは文字に非ず、詩歌に非ず、哲學に非ず、宗教に非ず、と。何となればわれに取つては詩歌も哲學も宗教も、少しく長く之を思ふ時は直ちに束縛を感じ形式の桎梏を感じればなり。

ア、自由にして獨立のソール。たゞ神の者なり。

悲劇！ 余はトラヂジーを愛す、人間の深き消息悉く悲劇の中に暴露す。

或は乙女の天使の如き心、勇者が天火の如き猛心、田舎の民が質朴淳厚の情、人間の煩悶、燃ゆるが如き信仰、人間の弱點、或はミルトンの心、或はカーライルの心、或はエマルソンの心、パインズ、ウォーズウオルスの心。凡て人間の最も深き者は悉く悲劇の中に暴露す。悪人にも人情を見、善人にも弱所を見、凡て悲劇の中に現はれ来る。嗚呼ドラマ！ドラマ！人生は眞面目なり、幽玄なり、其の秘密を語る者、描く者、教ゆる者は悲劇なり、ドラマ！われ今にして沙翁の大を悟りぬ。

父より書狀あり、愈々免職の由申來り、來月の學費は送り難き由、母非常の苦心の由、申來る。われ自らの悲劇はそろ／＼始まらんとする也。

嗚呼わが地上の運命、神は之に由りて教へ給ふ。來れ如何なる運命も、われ之れに勝たん。われ爾の中に人生の眞を見ん。わが信仰を驗せん。

▽熱淚以て天神に祈る、嗚呼人生は眞面目なり、信仰は命なり。感情非ならずバツションに非らず。弱志より來る一時のバツションに非ず。生は眞面目なり事實なり。嗚呼バツションに非ず幻想に非ず。

パインズ一生の如き、カーライルが云ふ如く悲劇の甚しき者に相違なし、されどア、神の不思議なる法則也。パインズの悲劇が如何に吾人に無限のメランコリーを感じせしむるぞ。神情の「メランコリー」を。壯嚴は此の中に在り、熱愛は此の中に在り。此情は地上に在りて最も貴き者なり。而して神はパインズの如き悲劇を以て人心を深き敬虔に導き給ふ也。

若し世を舉げて只だ躍らしめよ、舞はしめよ、笑はしめよ。之れ動物の集會に過ぎず。ア、吾は、メランコリーの中に深玄なる信仰を得るを希ふ。

若し南洋パラオ島に一個の詩人ありて、其の小島域内幾分の人をして敬虔、友愛、淳朴なる性情を養はしめたりとせば、吾は其の詩人を愛敬するなり。大國に幾萬の生靈を虚榮に導きたる所謂英雄なる者に比して幾萬倍の愛敬を表さるゝ也。之れ對照のレトリックに非ず。實に人生に關する大なる眞理を含む。吾の信仰は實に之れなり。

吾が天職は愈々大にして眞面目なる者なるを感ず。

沙翁忘らるゝ時あり（カーライルの語）ウォーズウオルス忘らるゝ時あり（彼自らの語）。信仰は命なり。永遠の命なり。

夜植村正久氏を訪ひ語る、職業の事を頼む。信仰を論じ、人間の弱點を論じ、詩人を論ず。

カーライルを論じ、ウオーズウオルズを論じ、テニソンを論じ、バイロン、バーンスを論ず。
ウオーズウオルズの嚴正淳朴の生活を誇る、其の信仰と自由の岩の如く山の如き感ずるに堪へたり。

ウオーズウオルズが名譽を空となし富貴を空となし、只々信仰の中に猛進せしが如きに至りては吾々をして最も感嘆に堪へざらしむ。

吾一人が信仰高き眞の人間とならざるとは、社會に取りて左程の實益に關す可しとも思はれず。されど吾に取りては、眞の人間とならざるとの差あり。之を例ふれば一個の星が天に光明を發せざればとて、地上の光明に左程の差あらざる可し、されど其の星に取りては光明を發すると黒體たるとの差あるが如し。

吾は吾なり。吾に取りて餘程大なる者あるか。吾は吾の全體に非ずや、宇宙間吾に取りては只だ一個の吾なり、吾は自ら如何なる場所如何なる時にも二個の吾を見出す能はざる也、此吾は則ち

吾全體なり。

此の吾、其の吾が眞の人間とならざると、吾に取て之れより大なる問題あるか、之れ吾が全體の問題なり。

自然の美を感じ愛する能はず、天父の全きを感じ其の無限の愛を愛する能はず。友愛、同情、謙遜、質朴、勤勉なる能はず、皮相を惡み之を看破し之れと戰ふの勇氣なし。若し此の如くんば吾は死するとも死する能はざる可し、若し此の如くならば吾は初めより人間と生れ來りしを咀はざる可からず。盜賊となりて牢獄に投ぜられれば、盜賊たりしを咀ふ可し、其の如く人間と生れて此の如くんば人間たりしを咀ふは當然の事なり。

而かも吾今眞に十分此の如くなる能はずして猶ほ多少安んずる所あるは何ぞや、進歩を信すれば也、發達を信すれば也、希望あれば也。

植村氏ウオーズウオルズが自信厚く名譽を見ること土芥の如くなりしことを語り出で、曰く、

ウオーズウオルズ初年の作、四方の反對を受けしにも關らず、斷乎として曰く、終に勝たんと。

彼れ名譽高まりし後オックスフォードに招かれて演説せし時、滿場破るゝ如き大喝采なりしも彼

は平然たりしと。

凡て此等吾決して奇異に思はず、神の信仰ある者理想界に生きる者にありては當然自然の事なりと知る、之を知る故に自ら省みて大に信仰の薄弱なるを悟る也。

二十九日。

夜半、先づ書して曰く、

生くるにせよ死するにせよ、死後の靈魂あるにせよ、なきにせよ、人生は空なる者にせよ、眞實なる者にせよ、人若し一度び己れ自らが此の宇宙の中に生れ出たる者なることに思當る時は、悚然として感ずる所あらざるか。吾は實に之を感ずる也、之を感ずる事愈々切にして吾が信仰益々固からざるを得ざるなり。

午前徳富猪一郎氏を訪ふ、之れ職業につき依頼する所あればなり。至急周旋の勞をとるべきを諾せらる。大隈重信を評し、伊藤博文を評し、板垣退助を評し、星亨を評し、植村正久を評す、又た氏が板垣退助と相識りし以來の關係の歴史を語る。

大隈伯の進歩を語るに、曰く、大隈伯近來の人物の進歩は非常の者なり、初めは金錢を以て政略

唯一の勢力とたのみしも、今は之を悟り、大に士に下り賢に問ふに至りたりと。

平民主義の自踐者として此徳富氏は大なる人物なり。されど氏は經世家風の尺度を以て凡ての後進を導かんとす。氏の前に立つては人間は只だ社會の忠實なる一員として立てば足る也。氏が「實際」「實行」等を以て後進を鼓吹せんとするは第二の福澤なり。第二の新島に非ず。氏は福澤と新島の中間なり。時計の如く綿密なる經綸家なり。商估の如くぬけめなき打算家なり。氏が成効の秘訣は他に非ず。此打算と此經綸とをやるに絶えざる根氣を以てするにあり。故に批評家が彼の周圍にがや／＼する間に彼は着々として成し、着々として進む。實に新日本の社會的人物としては當代氏を以て第一となさざる可からず。氏は決して空想に住まず、高遠深玄なる理想の猛火の中に住まざる代りには、決して空想に住まず、之れ氏が最も長所にして一層高き眼よりすれば實に氏が短所なり。

氏は智者なり。へされど敬愛するに堪へたる智者なり。智者多くはひねくれたる所を有す。氏にありては氏の分子微塵もなきなり。其の智、淵の如くしてしかも清水を湛へたる者なり。掬すれば飲まんことを欲せざるも得べからず。

氏は遂にウオーズウオルス、若しくはカーライル風の人物に非ずして、ティン流に少しくマコー

レー風の活火を加味したる乎。社會人心の根底に猛火の洗禮をほどこす人に非ずして、社會の機關をして健全なる運轉を遂げしめん爲めの油さし也。

氏は平民社會に於ける十九世紀の紳士なり、鐵の腕を有して鐵斧を振ふ意氣に至りてはビュリタンの紳士とや稱す可き。氏の大なる所、容易に人の及ばざる所は實に亦た茲にある乎。

午後引頭氏に行き薄暮歸宅。大に氏の教會に來る可きを説く、氏諾す。

國許に書狀を出し、大久保、中桐の兩氏にも出す。皆相談の書狀なり。

三十日。

午前、パースを読む、「淳朴の生活」の詩的真理に付愈々思ふ者あり。「山下に自由あり」の句（シルレル）實に吾をして躍らしむ。

人をして、其のシムバサイズせられたる社會的感覺より警醒して己れの生命を天地宇宙の中に見

出ださしぬ。小我を捨て、大我に入らしめ、己れの周圍に浮沈生死する生靈ある事實に對し、壯嚴なる注意を喚起せしむるが如き皆な詩人の任なり。

パースの「コツター、サターデー、ナイト」を読み了はる。

獨乙語を學ぶ、西鶴「一代女」を読む。

今井氏來る。共に散歩す。時に夜九時、月佳なり。

三十一日。

八月も今日一日となりぬ。

自ら詳細に反省すれば、神と人との負ふ義務を感じる大我の中に生くる事少なくて、我儘なる。狭量なる、遲鈍なる小我の中に齷齪たる者甚だ多きを見る。

之れ信仰極めて薄弱にして自信乏しければなり。是を以て慷慨の念薄らぎ、博愛の心弱はり、忍耐の力減じ、力行の勇氣なし。是れ事實なり。日に經驗する處の事實なり。

崇高、清高、美妙なる感情乏しくなる。之れ罰なり。

人間に取りては、人生と云ふ事程、大なる考究沈思のものなし、是れ皆な人の言ふ所なり。而し

て實際、眞に切に之を思ひ之を考ふる者は鮮し。

九 月

一日。

昨日、中桐確太郎氏より書狀來る、民報社猶ほ人なし、來りたくば來れと。

薄暮植村正久氏を訪ふ、不在。久保田富次郎氏を訪ふ。氏より面白き實話をきゝぬ、記し置かん。

去る日の事、氏、三輪信太郎氏と共に靖國社内の池邊を歩む。信太郎氏は我が一番町教會員にして大學醫學部の生徒なり。久保田氏と共に此日教會堂より歸り途なりし。信太郎氏は其の醫士なるを以て近來慈善療治に熱心なり。極めて正直温厚の君子なり。氏は公園を歩み乍ら久保田氏に語りぬ。此頃は親族及び家族の病氣は悉く自分診察す。今朝は嵯峨正作氏の遺子なる小兒に投藥して來ぬと。其より嵯峨正作氏の話にうつる。嵯峨氏とは則ち日本史綱の著者なり。嵯峨氏死する時其の遺子を三輪信太郎氏の叔父なる三輪信次郎氏に托す。蓋し正作氏が其の郷里なる石川縣(三輪も同縣)より走り猶ほ學生として東都に留寓するや窮して三輪信次郎氏に頼る、然るに正作

氏兄あり、石川縣會議長たり、第一議會の時國會議員として撰ばれ、議場にて馬糞を投げつけられし人なり。此人少しも正作を保護せず、信次郎氏正作氏の窮を憐れみ自ら石川縣に歸りて兄の人(姓名は聞き得ず)に正作氏の保護を訴ふ。兄の人之を斥く、是に於て信次郎氏大に憤り自ら正作氏保護に當る、然るに信次郎氏は當時、某學校の生徒にして官費として教育を受くる其の上にも月々六圓づゝを受けしを、其の半三圓をさきて正作氏を助く、正作氏之れによりて學ぶを得たる也。正作氏後多少志を得て妻子あるに及びても産を治むる能はず、飲酒甚だしく常に窮せしが、窮する毎に信次郎氏之を保護しけるとなん。病みて死するに當り兄弟あるにもかゝらず、遺子を信次郎氏に托せしも此故也。信太郎氏が今日投藥せりと言ひしは則ち其遺子なり。

信太郎氏は語りつゝ久保田氏と共に池邊に來る。信太郎氏云ふ、然るに正作の兄なる縣會議長の人の其の上に猶ほ一人の兄ありと、語未だ了はらざるに、傍より其の兄とは我が事なりと名乗る者あり。

顧みれば五十二三と見ゆる一見乞食然たる老人なり。是れ實に其の兄なりし也。

彼は大村益次郎の塾に在りて塾頭たりし英物なりし、彼は明治二三年の際政府より魯國醫學を命ぜられぬ。彼れは自ら撰ばれてシベリヤを横ぎり魯都に達せし人。雜誌「亞細亞」が福島中佐熱

の熾なる時、シベリヤを獨行横斷せし者、我國己に其人ありと叫びしは、此人の事なり。彼は歸國して重く用ひられぬ。若しも正當に今日迄進みしならば、確かに全權公使位ならんとは人の評する所。而して今の彼は如何、某省の雁として漸く食ふなり。如何にして此の零落を見たる、發狂、飲酒、加ふるに産を治むる能はず。朋友、親族全く見捨てし也。

久保田富次郎氏評して曰く、不思議なる哉人間の墮落や、彼が零落は其の表面のみに非らず、實に其の人物も己に業に全く墮落しぬ。今吾をして用ひせしむるも小使ともなし難し、腫子獨り、奇異の笑をなし、談するにも前後不整頓、其狀、無學教育の老人が出鱈目に昔物語するに似たりと。吾之れを聞きて悚然として感動く。「人間の生涯」「人間の墮落」思ふて此の人に及ぶ、誰れか悚然たらざる者ぞ。

大村兵部卿の銅像成り、知人は形見分けをなしぬ。舊の塾頭、シベリヤの横斷者、今の某省雇の此人又た之を受く。直に此形身を携へて信次郎氏に至りて之を以て金五十圓を借らんことを乞ふ、信次郎氏其を問ふ。曰くシベリヤ旅行記を作り出版費に充てんと欲すと、信次郎氏之を諾して、己に貸さんとす。醫學士にして此の人の親族たる某氏之を止めて云ふ、無益なり。止ぬられよ。五十金唯だ酒たらんのみ、噫。

「自然」ア、實に不思議なり。されど「人間」、人間に取りては實に人間程不思議なる者はあらず。自ら内に省み、而して又た、諸人を見る、實に人間程不思議なるはあらず。

吾は實にパッションを好まず、パッションは酒の如し。一時人を激發せしむれども、其の結果は醒なり。故に吾はパッションを惡む。己に切に自ら經驗して其の毒杯をすゝりぬ。吾は最早何卒此を飲まざること希ふ。醒むる者はシンセリテイにあらず醒むる者は信仰に非ず、醒むる者は確實ならざるが故に永續に非ず、永續ならざる者は發達成功する能はざる者なり。故に吾はパッションを好まず。人生の事、吾が一生の事、人間の弱點の事、自然と人間の神秘の交通の事、永遠の命の事、美の事、罪惡、不幸、災難の事、神の事、凡て之を考へ之を感ずるにパッションを以て激發するを欲せず。靜に、深く、溫かに、嚴かに之を考へ之を感ぜんことを希ふ。

シンセリテイト決してパッションに非らず。ポーロの信仰パッションに非ず、ウォズウォルズの信仰パッションに非らず、カーライルの絶對パッションに非ず、ウォズウォルズの深趣パッションに非らず、されど又たパッションは自然の働なるが故に決して其の特質を捨つるに及ばず。

パッション必しも悪しからず、之れ粹の激動膨脹せる者、故に冷却するとも全く空に歸る者に非らずして、其の粹は止まりてシンセリテイーの上に加へらる、積れば進歩なり。

本日はテニンンの詩「ドラ」を一つ讀たるのみ何物をも讀まず。

晝飯後車を飛ばして徳富氏を訪ふ、不在。

午後二時過ぎ引頭百太氏を訪ふ。途に中桐氏及國許に書狀を投函す。

引頭より歸宅すれば十一時なり、五島盛主氏及徳富猪一郎氏より來狀。五島に返書を認む、了はれば十二時。

本日引頭氏に昨夜久保田氏より聞きたる物語りを話す。却て引頭氏より多くを聞くを得たり。

ゲザ、ファンザインの名は嵯峨壽安、正作氏兄、壽安氏の弟は則ち石坂專之助氏。

壽安、さきに官報局の筆耕に雇はれ十八錢許りの給料に生活せしも垢じみて汚なき故を以て免職。

壽安、魯都に在る時既に不平あり暴飲す、歸國後不平愈々甚しく愈々暴飲して愈々零落す。

壽安魯語の外に和蘭語を善くす。自ら云ふ和蘭の方本職なりと。

引頭氏の朋友、曾て壽安に就き魯語を學ばんと四谷なる宅を訪ふ、固より廢屋見るに堪へず。錠掛けあり。呼べども答ふる者なし。忽ち後ろより叫び來る者あり、嵯峨壽安は僕なりと、笑みつつ迎へ言ふ。曩日錠を掛けずして外出したりしに盜難に逢へりと。

坐に通れば塵埃坐す可からず。漸く手を以て拂ひ坐す。燈なし、時々マッチを點じて明を取り以て談すと。

薄暮に及べば、彼が家の前小兒群を爲す、則ち壽安頭を格子より出して語ればなりと。

朋友等衣類などを恵めども直ちに酒に化す、曾て四斗樽を据ゑて飲みぬと。

蓋し壽安、大村の死後、人に知られざりし也と。

彼が家の前を過ぐる者あれば呼び入れて語ると。

蓋し遂にゲザたるを免ぬかれずと謂ふ可し。憐れなり。

二日。

吾は如何なる有様にて世界に立ち居れるやを自ら知らざるに非ず。一個の泡沫として立ち居るか一個の獸として立ち居るか。一個の義務あり希望ある人間として立ち居るかを知らざるに非ず。

自ら深く省みて世界に於ける己が有様を知る毎に慚愧と憤激と恐懼とは衝き來る也。

「自然」！ 如何に不可思議なる者よ。人間これに對し、これを思ふ決して無頓着なる能はず、否無頓着なる可からざる也。

驚異と畏懼とは此無邊無際無限永遠無窮にして變轉して停止せざる者に向て必ず發せざるを得ざる情なり。則ち吾は己れを此「自然」なる者の中に見出すが故に恐懼し驚嘆す。

吾は神を信じ、善と美と眞理とを信じ、靈魂不死を信じ、神の攝理を信じ、人性を信じ、義務を信する者也。吾は心眞に之を信す。故に吾が今日の有様、世界に立つ有様を省みる時は實に慚愧と憤激とに堪へざらんとす、何故ぞ。實際に於て自ら動もすれば神を信ぜざる者の爲すが如き行を爲し、善と美と眞とを信ぜざるが如き感想に住み、定命説を信する者の如き感想の中に知らずく、シムバサイズせられて神の默示を解す能はず、義務を忘れて小我のセルフッシュに陥りて克己する能はざればなり。

吾は如何なる有様にて世界に立ち居るを知らざるに非ず。

知る毎に慚愧と憤激と恐怖とは衝き來る也。吾は人性を信ぜんと欲して又之を信す。されど亦た其の極めて微弱なることを知る。自らの經驗は實にこれを證するを如何せん。

吾は如何なる有様にて世界に立ち居るやを自ら知るを欲すると同時に他の人々の有様をも知らんことを希ふ。

四日。

昨日午前今井忠治氏來られ、伴ふて一番町教會に出席す。アレキサンドル氏の説教あり、説教題は「クリストの人としての品性」なり。

今井氏田村氏兩人と伴ひて歸宅、晝飯を了りて神田錦輝館に開會の義太夫に行く。

ルーソー死に臨み人々に命じ、「われをして今一度び永遠無窮の自然を見せしめよ」とて窻を明けしめたりと聞く、昨日義太夫の席に群集の中に在りて遙かに西洋窓の外に白雲蒼天の悠々たるを見て突如此の句を想ひ起し、忽然として激昂する所あり、此句の深趣初めてわれに入りぬ。

嗚呼永遠無窮の自然、之れに對する恐怖と悲哀とは只だ信仰に由りて勝たるゝのみ。

人間が天地神明に冥合する思想感懐なる者、之れ要するに音楽に現はるゝ微妙にして幽玄なるリズムに過ぎざる者と云ふ可き乎。

五日。

昨日午前「王陽明文粹」を読む。王陽明は確かに支那に於ける一個大なる豫言者なり。人生の解釋者なり。

其神仙有無を人に答へて、夫有無之間、非言語可況、存久而明、養課而自得之、未至而強喻、信亦未井ニ必能及一也。と云ふが如き或は進學を説て日用間何莫、非ニ天理流行、但此心常存而不放、則義理自熟と云ふが如き人のやゝもすれば言はんと欲する所にして、王陽明にして初めて面白し。午前ミルトルの詩「自然は決して老いず」を読む。

民友社に徳富氏を訪問す。大分縣に教師として行くべきをすゝめらる。矢野文雄氏へ推薦狀を與へらる。

民友社より歸路、代言事務所なる今井氏を誘ひ、伴ふて神田にめぐり、途に引頭百太氏を訪ひ、歸宅は七時。

國許より來狀あり、東京移轉に決せりと報す。

中桐確太郎氏に送書、上帝の信仰をすゝむ。

世界に立ちて死に勝ちチャンスに勝たば上帝慰安を給ふ。一生の運命上帝に托す。吾は一意専心爲さざる可からざる事を爲す可きのみ。努めて而して斃るゝのみ。

昨夜歸宅後バシカアトセツフ女史の日録（國民の友二百一）を読む、女史一生の如きは眞に人生悲劇の甚だしき者と云ふ可し、さり乍ら彼女の生命は「名譽」なり。只だ其れ「名譽」なり。彼女に取りては社會の面前に持て囃さるゝこと宗教也。其熱心、其勇氣、其煩悶、悲痛、悉く此の宗教より來る。一方に於て大に稱す可く、一方に於て大に憐れむ可し、何となれば彼女は「名譽」も亦確かに宗教的に熱望せる也。人生根本の生命として熱望せる也。故に彼女は非常異常、恐ろしき程熱心なりき。事寧ろ賞揚するに堪たり、宗教的に生活する人の少なき時代にありては、之れに反して彼女遂に哀れむに堪へたる信徒なりし也。彼女は遂に己れを茲、神聖なる存在の中に見出す能はざりき。彼女は決して神の信仰を有せず。決して靈魂不死を信せず。されば決して深夜星天の下、「永久」に冥合して敬虔の情に打たれ、一滴の熱涙と共に無限の慰安を得るが如きは決

とに由り一世を聳動し社會を一洗するが如き事の萬分の一も爲し能はずして碌々とし朽ち果つるを見る。人世の恨事實に此上に出でず。今其故を思ふに彼等意氣昂揚の際、學を貴び道を樂しむが如きも、遂に宗教的なる能はざるが故に非ずとせんや。

宗教的！ シンセリテイー！ オリジナル、マン！ 實に人間感想の最大最高の者なり。

何故に宗教的なる能はざる乎。宗教的と宗教的ならざるとの稀微の點は那邊に在る乎。實に大なる研究と云ふ可し。實驗により知る外なし。吾にありて日々、夜々、宗教的と宗教的ならざるとの感想は絶えず往來消長す。其の極めて微なる極めて幽なる極めて玄なる變化に至りては吾自ら明かにする能はず、支配する能はざる者あり。

されど人間、信仰と不信仰との機は只此一點に掛るを思へば、大に考究せざる可けんや。

多くの人は自ら認めて人たりと爲す點より寧ろ無意識の處に人たる者を有す。

吾の王陽明を讀み、カアールを讀む。未だ必ずしも其の世界觀を學び人生觀を知らんとするに非ず。人間を學ばんと欲する也。

憂へず惑はず、神在せばなり。

自由を見出すこそ詩人の任と信ずれ。

自由の在る處憂なく惑なく失望なし。

神は自由の父なり。爾束縛を感じるあらば直ちに省みよ。必ず神を離れて小我を挾む所あるを見出す可し。

人生は固定のセオリーに非ずして永久のストラッグルなり。

電光を見よ、流水波濤を見よ、實に自然を見よ。

基督の信仰と愛とを以てセオリーの化身となす勿れ。

パースを以て彼れ詩卷の化身となす勿れ。

人間は自然中の最も自然なる者、人心は戦争、衝突、流動、發達、變化也。花の如し。蕾となり瓣となり實となる。流水の如し、瀬となり、淵となり、瀑となり、渦となり、或は石に激すれば白雪となる。無邪氣なる小兒より白髪に埋もる老年に至るの間、百轉千變、プラトニーとなり石川五右衛門となり、ミカエルとなりナポレオンとなり、デスデモナとなりお軽となる。而して眞と

美と義と、偽と醜と悪と、上帝の悪魔と、或は社會の罪、或は英雄崇拜、悉く人心轉化の際、衝突の際、流動の際に最も能く發露するを見ん。

而して其の變化流動衝突煩悶は之をセオリーの中に見出す可からずして實に之をドラマの中に見出すを得ん。ドラマ、ドラマ。吾はドラマを好む。實にドラマを好む。われはドラマチストたる可きなり。ドラマチックポエツトたる可し。

人生は固定に非ず。人心は變化發達墮落なり。故にドラマチックポエツトたる可し。神は吾が此の天職を盡す事に就き、靜に、優しく、親切に、公平に、絶えざる補助を與へ給ふことを信じて疑はざる也。

吾は聖壇に近づくの心を以て、戰場に上るの心を以て、春草を踏みて花蝶を追ふの心を以て、東天に向て朝日を招くの心を以て、夕陽を送りて歌を默唱するの心を以て、此世に招かれし豫言者の心を以て、田に耕し林に住む農民樵夫の心を以て——吾は此の天職に盡す可き也。

われに再び來らざる廿六年九月五日は過ぎぬ。

人は其の生涯の半ばは、考究ならざる、反省ならざる、實行ならざる、空漠の妄想に費す者比々

然るが如し。

不健全なる妄想、不徳義なる妄想は常に眞實なる考究を妨げ、愷切なる反省をさへぎる。

哲人英雄は決して妄想に耽らず、信仰と事實とに住む。妄想は人を欺き人を謬ること最も甚しく、人を惑はしむるも酒と金と女の比にあらず。

六日。

午前矢野文雄氏を訪ふて教師たるに付相談する所あり。

人は薄弱にして、又た知らずくの中に定命説を奉ずる者殆んど然り、神を信する者と自ら認め居る者すら實際に至りては多く然り。人性は淺ましき者なる哉。

親しく神の限りなき愛を感じ、信じ、神に凡てを任かして地上の運命に支配せられず、希望と美と善との自由の境に逍遙することは言ふ可くして容易の事に非ず。

神の罰は、自由を取り上げ給ふなり。神は其の罪人を變轉不思議なる牢獄に投じ給ふ。

神の愛を親しく感じ、生存中の義務を強く感ずる者は幸なる哉。

常に神よりの義務を覚えなば克己生じ忍耐生じて、決して一毫も怠慢放逸の氣なかるべき也。記憶せよ、爾宇宙の兒なる以上は、爾自ら天父を忘るゝ時だも、天父は分秒爾を忘れ給はざる也。七日。

光を放つは世の爲め、神の爲めに盡す義務なり。何となれば茲に一個の石あり。寶石なれども外面は土塊に異ならざりしとせよ。彼は遂に其の全身に蓄ふ所の美質を以て人をよろこばしむる能はずして埋れ終らん。されど若し彼の一端だも其の美光をもらすとせよ。人は之を拾ひ遂に研いて其の全身の美を見出さん。人間の世に生れて其の義務を全ふするも亦た然り。彼れ一生の内遂に世に表はれずんば世は終に彼れに由りて徳化美化せられざるなり。然るに彼れ其の光を放たんか、世は彼れを考究して遂に大に彼の美と善と大とを見出し、學ぶ所多からん。美德偉大にして世に大効を立てたる者第一、美德偉大なれども世には知れざりし者第二。光を放つは神と人とに對する義務なり。吾實に光榮ある一生を送らざる可からず。若し然る能はずんば神の罪を蒙れるなり。

時勢の彩色は少しも人間の最も深き意味に關係する者に非ず。故に吾は、人間を研究せんことを

すと雖も、時代を研究することを望まず。新島先生を研究するにもせよ、其内部根本の變化を知らん事を希ふ。新島先生の研究と白井權八の研究とに差別を置かざる也。若しくは總理大臣の一生と一農夫の一生との研究に差別を置かざる也。余の知らん事を欲するは人間なり。人生なり。生涯！嗚呼幾億幾兆の生涯は送られたり。幾種幾様の生涯は送られたり。而して送られつゝあり、送らる可し。

吾は此の生涯の分類を知らんことを希ふ。不幸なる人々よ、哀れむ可き人々よ。御身達の生涯は消す可からざる事實也。偉大の人々よ、光榮の人々よ。御身達は此世の寶藏なり。吾は事實の最も正確神秘なる者を究めんことを希ふ。寶藏の最も深き底を掘らんことを希ふ。

午前發逸語を學ぶ。午後ドレーデン「沙翁」を讀む。

シエクスピリアに就き思ふ所多し。されど學ぶ所は少なし。大にシエクスピリアを研究せんことを欲す。昨日「ロメオ エンド ジュリエット」を讀み始む。

吾は神の愛兒なることを信するが故に一生は必ず幸福に送らるゝことを信ず。境遇の如何に關ら

す吾の心には平安あるべし。吾は人生の暗黒を見て人生を疑ふ者に非ず。咒ふ者に非ず。吾は限りなき同情を以て暗黒に對せんことを希ふ。

吾は平安と同情と剛毅と熱心と勤勉とを欲す。吾の此の世の義務は之に由り完ふするを得るればなり。

朝は來り夜は來る。日は昇り星輝く。樂い哉自然。美なる哉自然。自然の美と大と無限との中に此の一生を見出す人間は幸なる哉。智慧は神にあり。愛は神にあり。

吾は神を信ず。故に吾は智の有る者、愛の有る者なり。神は懷疑の報酬に煩悶と不自由を與へ給ふ。惡人は惡を作す、之れ罰なり。善人は善を爲す、之れ賞なり。

ス井ーデンボルグとシユクスビーアと今や漸く吾が頭腦心胸の底に兩立するに至りたるが如し。何故ぞ。一方に於て吾を大自然の中に見出し、一方に於て吾を人類生涯の中に見出すを得るに至りたればなり。

薄暮「王陽明文粹」を読む。

散歩、西村もと方に至り引頭氏を訪ふ。不在。鬼塚氏あり。輕井澤の話、淺間ヶ岳の事など聞く。輕井澤は西洋人を以て充たさる。昨年百五十人許なりしも本年は三百人位集まれりと。多くは木造の粗造なる別荘に住む由。盛夏氣候は單物の重ね着せざるを得ざる程なりと。淺間ヶ岳に登るに二法あり。一つは晝間に於てし一は夜間に於てす。凡そ往復輕井澤より十二時を要す。晝間の方は午前四時頃出發して十時頃頂に着する者、夜間は午後九時頃出發して天明絶頂に達する者。後の方は墳火口内の火災を見るを得べし。案内者八十錢。草鞋四足を要す。絶頂は寒氣甚だしと△鬼塚を辭して歸らんとする時已に引頭氏歸宅す。

△歸路、組板橋巡查交番所の傍に一個の醉漢あり。彼泥中に倒れし者と見え、泥にまみれて居たり。巡查頭より水を滌ぎやるはよけれど其の形狀如何にも冷淡なり。彼は「ちんほ」なり。襤褸を纏ひぬ。滌ぎ終れば彼よろめき乍ら言ふ「さて何處に行く可き、行く處もなし」と。彼が臥床は路傍ならむ。彼が一生は如何、此の一個の人間が一生は如何、此の一個の事實は天地間に何を意味する者ぞ。此等の思想は吾が胸に起りぬ。

△氣候大に涼くなりぬ。深夜の星天は美にして大なる哉。星を戴いて歩む毎に自ら一層強く永遠無窮なる神聖の存在の中に見出す。神は直ちにわが傍に立ち、吾は一倍敬虔の念を喚起し來る。

「實際」に強きシムパツシーを持たぬれば「人間」は知ること能はず。身を神聖なる自然の中に見出す能はざるならば「人間」を観る能はず、例へば實際にシムパツシーなくして「人間」を知らんとするは高山の上より下界を瞰望するが如し。其の全體の位置、性質は之を知り得べし。眞實の消息に至りては否、若し只實際にシムパツシーあるのみにして神聖なる自然の中に己を見出す能はずんば、之れ林の裡に投じて全野を觀測せんとするに似たり。その局部に偏見を得るに過ぎざらんとす。而かも此二資格を兼ねたる人間考究人生説明の詩人少なし。此の完全なる資格に至りては殆んど人間に出來兼ねる事と云ふ可し。何となれば之れ火と水とを同時に持つが如ければなり。八日。

神を忘るゝ時程薄弱なるわれは非ず。

秋風に飄ふ一片の木葉の如く、砂漠の中央に見捨てられたる孤兒の如く感ずるは此時なり。勇氣挫折して悲哀來る。

嗚呼吾は一個の吾にして吾自ら吾を忘れ、吾を隠し吾を捨つる能はざる也。吾茲に立つ、吾茲に生る、吾茲に在り。余に取りて如何なる事實も是れより大なる事實、確かなる事實はあらず。神

は嚴然として頭上より見給ふ也。吾失望せんか、彼は吾を忘れたりと宣まふ。吾惡を爲すか、彼は惡を爲せりと宣まふ。吾惑はんか、彼は吾の智慧を知らずと宣ふ。吾忘らんか、彼は吾が命じたる義務を忘れぬと宣まふ。

嗚呼吾は一瞬一億里の速力を以て十億年走るとも神の面前より隠るゝ能はざる也。神は慈愛に充ち給ふて吾が頭上に嚴然として立ち給ふ。

思ふて惑あり、明未だ足らず。務めて樂まず、信未だ堅からざればなり。此語を以て今日を送る。國許より書狀來る。返事す。移轉を勸む。午前獨乙語、午後沙翁「ロメオ エンド ジュリエット」、薄暮「王陽明文粹」、七時半祈禱會出席。終はりて後、獨り神田を散歩す。胃惡しければ也。歸れば殆んど十時。以後は和文學と漢文學とに多少力を盡す可し。

九日。

貧は來り、體は日に衰へ、而して智は足らず。眼前生死の際涯なき海は愈々明了に感想を持ち來つて吾をして戰慄せしむ。

嗚呼憂愁の止むを得ざるを如何せん。繰り返へして問はんと欲す。生とは何ぞ死とは何ぞと。然

の人生遂に何ぞや。人間繰返し／＼日に何をか爲す。日は轉じ日は轉ず。遂に何者か來る。思ふて茲に至る幽愁憂思遂に止む可からざるなり。

信仰！ 神聖なる心に對する信仰！ 失望より勇氣に憂愁より安慰に、放棄より大義務に、吾を救ふ者は夫れ只だ信仰なる哉。

病むとも、貧するとも、生くるも死するも、右に行くも左に奔るも、眠むるも醒むるも、悲むも善ぶも、吾は遂に吾たるなり。余は遂に人間たるなり。天上の星にもあらず、水底の魚にも非ず。吾は遂に吾にして人間なるなり。人間！ 吾は人間なり。嗚呼吾も亦た人間なる哉。神は親しく吾が内に在り。吾は多く知り能はざるのみ。

十日、日曜日。

靜に永遠の自然を考へ神を懐ひ而して自らを反省し來たる時は滿身の熱血凝つて腦底に氷るを覺え、一片の猛氣激して全身に燃ゆる也。嗚呼人類！ 嗚呼吾！ 嗚呼神！ 叫び來れば情氣破れ血氣去りて熱して燃えざる理性の大高潮、泉の如く湧き來たるを覺ゆ。

嗚呼吾己に吾を見出しぬ。富士山よりも大なる事實としてヒマラヤよりも大なる事實として否な形骸なる天地よりも大なる事實として吾を見出しぬ。靈なる神の前に吾を見出しぬ。神よ、最早

全身を神に捧げぬ。希くは吾をして神の血たらしめよ。涙たらしめよ。神よ怠慢と皮相と薄弱なる兒を打ち給へ。渾身の吾を捧けて神と人類に大義務を盡さしめ給へ。

嗚呼、吾立つて茲に在り。過去何者ぞ未來何者ぞ將た又た現在何者ぞ。吾は時代を知らず。只だ神と吾と人類とを知るのみ。善と美と眞とを知るのみ。大自然を見るのみ事情を知るのみ。來れ地上の迷よ、迷の兒よ、然り怠よ、失望よ、浮薄よ、卑劣よ。來れ吾戰はん。吾は討死して而して生きん。眞正に生きん。

嗚呼、吾が爲す可きは明らか也。讀破と沈思と觀察と練筆と製作と徳行と同情とのみ。一生幾何かある。日月吾が生涯の上を矢の如く走る。吾！ 日月！ 怠慢皮相！ 而して碌々として神にも人にも何事もなし能はずして死するか。死して神前に悶く可き乎。咄！ 吾討死せん。來れあらゆる敵よ。

午前沙翁「ロメオ」を読む。教會堂に出席す。

午後「サルトル」を讀まんと試みたれど多く讀む能はず。

薄暮、靖國社境内を散步。祠畔の空地、草原を爲す所に默座、夕陽の美を眺む。吾をして幾度か

自然の美に接せしめよ。吾が住む處の宇宙自然の美に對して同情ならしめよ。何故に敢へて同情（シムバシー）と云ふぞ。曰く、眼ある者誰れか自然を視ざらんや。花を視れば浮かれもす可し。月を視れば歌ひもす可し。鳥を聴けば感じもす可し。

されど多くは自然の美に對するに隣家の花を一す、垣越しに眺めて奇麗なりと點頭して直ちに他所に向くが如きのみ。己れを圍む自然、自らが住む自然、其美は己れに絶の可からざる玄妙幽妙の關係を有し居るが如くは感ぜざるなり。動もすればわれとても然り。人はバンセイゾムの強き信仰をも有せざる可からず。美を稱し自然を稱し乍ら信仰なくんば空なり。之れを以て敢て同情と云ふ。

則ちウオーズウォルスの如き之れなり。其作「セクリユース」に曰はずや。On man, on nature, and on Human Life, musing in solitude, I.....

人間、自然、人生を寂寞に自想す。見よ。自然を思ふは人間人生を思ふ所以、人間人生を思へば隨つて自然を思ふ。自然の美を思ふと云ふと雖も決して意味なきパッションに非らざる也。自然に對して同情あらしめよとは是れ之を言ふ也。

それより植村正久氏を訪ふ。ウオーズウォルスを語り、其他詩人哲學者の事を語る。又た吾が目下の處置に付き相談あり。若し大分に行かぬならば東京に留まり「日本評論」の編輯をしては如何とすゝめらる。

十一日。

自ら經驗はこれを證す。宗教も詩歌も哲學も其の根本に至れば「吾」の疑問より生ぜしなり。故に「吾」を見出す能はずして宗教を説き詩歌を説き哲學を云ふは之れを俗物皮相の徒と云ふ。眞理、美、愛、希望、悉く「吾」を重じ「吾」を求めたる結果の思想なり。何故に惡は恐る可きか。「吾」の大に重する所と知ればなり。希望は「吾」の希望也。自然の美、神の愛を感じ得るは、「吾」を見出し得たる結果のみ。哲人詩人等の跡を見よ。悉く然り。曰く吾何を爲す可き、吾何を信ず可き、吾如何に生活す可きと。吾を重する所以は、人間を重する所以也。

無窮の自然を思ひ較らべて短生の人命を思ふ時は實に戰慄に堪へず、憂愁に堪へざる也。而して自然の底を想ひ、人情を思ひ、人生を思ふ時は、信仰來りて希望と勇氣と來る也。吾をしてウオーズウォルスの如く自然を思はしめよ。吾をして愈々厚く人情を思はしめよ。

十二日。

昨日午後神田靜治氏來。牛肉を炙て食ふ。薄暮相伴ふて散步神田市街に到る。夜稍々深けて獨り九段公園内を散步す。

夜更けて窓に獨り凭り、仰て蒼空を望み冥想して一個の吾、遂に一個の吾に外ならざるを感じ、神聖無窮の世界に住む神の兒、一個獨立堂々磨滅す可からざる靈なることを信じ、感奮措く能はず、非常なる義務と責任の吾が生命、靈魂の上にかゝれるを思ふ時は叫喚して蹶起せんと欲する者あり。

昨日「蒼天」自ら重んずの二章を作る。

昨日午前「自然」に就き考究する所あり。ウオーズウォルスの詩を唱す。自然を思ふて人生を思ひ、人生を思ふて自然を思ひ、而て人間を思ふ。實に之れウオーズウォルスの詩想の粹也。彼れにありては自然の意を人生の義と決して分離すべからざる也。故に草花、雲雀、泉流、平野、胡蝶、虹蜺悉く神の默示也、人生の秘奥たる也。吾又た近來思ふて自然に對する、蓋しウオーズウォルスの境に遠からざるに至れるを信す。自然！今は意味深き者となりぬ。吾を自然の中に見出すを得たり。

得たり。

無邊の蒼空は吾が目前に開けたる尤も不思議なる自然なり。日光、綠葉、野花、泉流、虫聲、は吾を神聖者の美妙に導くに非ずや。信仰の最も清き水を送るに非ずや。

自然。人生。神。悉く吾にありて融化する所を得たりと信す。

神の愛は日々に吾を導きて進歩せしむ。

昨夜程深玄なる天を見ざりき。

本日午前中桐確太郎氏より來狀。民報社人を要し君を待つこと急なりと告ぐ。則ち矢野文雄氏に書物を以て大分教師の成否を問合はす。

朝神田市街に出づ。買物の爲めなり。「靜思餘録」を求む。歸路九段坂の下に來る。顧みれば車馬奔り人往來す。

忽ち思ふ。吾今此の群雜の中をゆく。之れを譬ふ、群星の中を行くが如く自然のみを思うて人生を思はざる時、人間を懷はざる時は實に此の如きなり。人生のみを思うて自然を思はざる時は道徳の窳白におちいりて敬虔なく信仰なき者とならん。

吾は然らざる也。

自然、人間、神、人生、人情、相融化し、相冥合す。

神なき自然は空なり。人情なき自然想は空なり。信仰なき人生は空なり。神の宮、自然の美、人間の情、吾は自らを此の中に見出すことを希ふ。

歸宅して「靜思餘録」を読む。思想は己に今日迄「國民の友」に由りて多少窺ひたる所、志ざす所は文章を習はんが爲めなり。

收二に「グラッドストーン」及び「伊太利三傑」を送らん爲め外出す。英國公使館前の濠渠の堤上を歩す。水際に水草紫花開き風に漣波に左右動搖す。趣き極めて愛すべし。仰けば青空々々窮まる處を知らず。偉大なる哉、美妙なる哉自然や。神は窮まりなき天空と風に弄する野花とを其の信仰ある者の前に調和し給ふて彼をして永久の生命を悟らしめ、存知の安慰を得しむ。

麴町街に入る。馬子馬を止めて豆を與へ、人行き市人坐し日光輝き蒼空等しく頭上に開く。吾思ひぬ。人間は至る處に在り。人情は至る處に在り、神は至る處に住み給ひ、自然は到る處に充滿す。哲人詩人英雄豈に別物ならんや。馬子と等しく人のみ。かく思へば何となく人生の意愈々深くして神意の慈愛無窮なるを感す。

「淳朴なる生活」を思ふ。

夜今井忠治氏來。久し振りにて快談す。吾淳朴の生涯を説き自然を語る。今井氏刑法の事を説く。十時伴うて外出す。

今井氏と別れて獨り散歩す。路上寂寞、黒風後より襲ふ。仰けば星空に滿ち、顧みれば虫聲、草むら垣根にみつ。風は柳梢を渡り、古葉己に地を走りて音あり。自然は吾が周圍にありのまゝにその形を示す也。吾は、時代を忘れ事情を離れ習慣を捨て、直に己れを大自然無窮の呼吸中に見出す。自然は寂寞の極也。之に對しては愛何者ぞ、善何者ぞ、情何者ぞ、生何者ぞ。人命の如きは眞に慕なき事どもなる可し。只だ神の信仰あり。自然は萬化の形骸に過ぎずして深底の靈界に純粹の神あるを信するに由り初めて吾を美や善や情や神聖や崇高の中に見出すを得べき也。

自然！ 吾は自然の見なり。自然は吾唯一の書なり。友なり。

十四日。

十三日、昨日午前矢野雄氏より返書あり。直ちに中桐確太郎氏に書狀を出す。

天澄み風冷やか、將に秋期の最好日、則ち引頭氏と共に上野公園より、日暮里、道灌山に至り、
歸路本郷に出で、歸宅すれば己に夜。

只だ簡單に記し置く可し。余は時代より、見慣れし周圍の事物より、凡てシムバサイズせられたりしを免れ得たる心地す。其の意味は吾が此の天地の間に、人類の中に、人間として生れたるを感ずるの外、外物何者と雖も殆んど、吾をして此感を忘れしむる能はざればなり。吾は支那に生れ、古羅馬に生れ、南洋の島に生れ、古印度に生れたるとこの日本の土に昔百年前に生れたると今茲に生れたると其の感想に於て異なるなし。天淡雲開き今古同じ。自然は老ひざるなり。朝氣は依然たり、夕陽は依然たり、日色月光依然たり、満天の星彩異ることなし。吾自ら此の間に生れ出でたるを知るのみ。而して古人の如く、凡ての人の如く、凡ての人と共に、忽ちにして茲より死去るを知るのみ。無窮の自然を知るのみ。蜉蝣の命を知るのみ。故に吾にありては、東京が武蔵野たると武蔵野が東京たるとを問はざるなり。人の住む家が茅屋たると煉瓦たると關する所に非ず。只だ人間を見るのみ、只だ自然を見るのみ、人間内部の生命を見るのみ。自然の底、神を見るのみ。故に吾は己れが一個の牧者たると、一個の官吏たると、一個の漁夫た教師たると、一個の新聞記者たると、一個の車夫たるとを問はざるなり。吾は只だ人間の一生が善か悪か、眞

か偽か、美が醜かに送らるゝを見るのみ。小兒を見れば此の小兒が或は善、或は惡、何れにか一生を了はりて死するも古人の如きを見るのみ。老人を見れば此老人が善か悪か賢か愚か、何れにか一生を送り來りて今は死につゝあるを見るのみ。古人を思ふときは、彼は今、吾とは時を隔てしと雖も、吾の如く茲に生き茲に經過して今は茲の何處を探すも見る可からざる者と化し去りたるを見、その一生が善なるか惡なるか何れにか送られしを見るのみ。吾は只だ神を見るのみ、善と惡と眞とを見るのみ。而して人間の生死を見るのみ。吾の一個堂々磨滅す可からざる靈魂を見るのみ、自然の形骸たるを見るのみ。嗚呼吾は自由なり。吾の自由は擴まりぬ。

以上は昨日、散歩して周圍を見、事物を見、自ら反省し、或は道灌山より遠望して天の漠々悠々たるを見、秋光美にして、野輝き林輝くを見、默思し、インスパイヤせられたる者なり。

初めてウオーズウォルスの詩「ゼ コック イズ クロウインス」の詩想の趣味深きを知りぬ。自然と人生の妙なるハーモニーがウオーズウォルスの詩想なることを見る也。「虹」の詩も解かりぬ。インモータリテイのオードも愈々深く味ひぬ。「ツー マイ シスター」中の「此の一日は吾等をして遊ばしめよ」の句其他の意の妙なるを知る也。彼が何ものより小兒のハートを戀ひた

るかを知りぬ。
嗚呼吾をして自然を愛せしめよ、神を信ぜしめよ。此世の重荷習慣因襲の束縛桎梏より免かれしめよ。

悲觀の詩想、教理にせよ、樂天の詩想、教理にせよ、悉く自然の永久なると、人生の短かきとの對照より來るなり。

然るに實際に於て、一見此對照は普通の人の誰れにも出來可きが如くなるにも關らず、出來ざる也。何となれば普通の人は口で自然は永久、人生は短かしと言ふと雖も、眞に他のあらゆる感想より脱して此の事のみ深く感じて相對照する能はざればなり。吾が實驗は之を證す。

十五日。

昨日代數學の爲めに一日を費す。

未だ自然を愛すること深からず、未だ神を信すること厚からずして、而して習慣より脱却、周圍の事物より脱却、只だ獨々乎、天地の間に俯仰介立するに當つては、希望消え、樂み去り、同情失せ、眞に人性の味氣なきを觀する外なき也。昨日は殆んど如此して送られぬ。悲哉。

△人若し人情の幽音をきかずして只だ天地の過客たるを感じるは危哉。ヒュマニテイは神の御心也。ヒュマニテイを感じる能はずして只だ宇宙茫茫の無窮に俯仰す。寧ろ生きざりしを希ひ、生存を咀はざらんや。西行たらざるを得んや。

嗚呼悲むも吾、喜ぶも吾、泣くも吾、樂むも吾。吾の存在の事實を忘るゝ勿れ。吾は存在也。天地は神の宮のみ。人情は神の御心。ア、爾、只だ神を見よ、自然を見よ、人情を見よ。秋郊美なる處、農夫の歌を聞いて心躍らざるか。夕陽靜かなる邊、炊煙の立ちのほるを見て心躍らざるか。只だ自然の美を見よ。美は神の御心の音樂也。自然は神の御衣也。

羅馬は逝きぬ、江戸は逝きぬ、鎌倉は逝きぬ、彼等が包括したりし男も女も父も母も、友も兄弟も、戀人も、夫婦も、親子も皆逝きぬ。愛すべき小兒も逝きぬ、花の如き少女も逝きぬ。されど見よ、自然は依然たり。吾等も逝く可し。されど吾は確かに茲に生きて茲に存す。自然は吾が周圍に無窮に連なり、美は八方に無底に現はれ、友は愛すべく、小兒は愛す可く、弟は愛すべく、父母は愛す可く、歌は面白し。人情は君にも無限なり。

嗚呼吾も逝く可し、羅馬人の如く鎌倉人の如く逝く可し、永久に逝く可し。而して吾も亦た永久されど神は無窮にあらずや。彼は愛の御手をもて吾を喜びて受け給ふ可し。而して吾も亦た永久

に生きん。

噫たゞ神を見る、自然を見る、人情の幽音悲調を聞く。慙くて足れり。思うて迷ふ勿れ、滅する者に支配せらるゝ勿れ。

吾今茲に坐す。夜深更に及びぬ。虫の聲窓外に喧すし。感ずる所何事ぞ。

今日吾屢々自ら思ひぬ。吾は時の古今に支配せられず。吾が生ぜし時が明治の世なると鎌倉の時なると、草昧の時なるとを問はざる也。自然は依然たり、神は依然たり。吾は只だ自然と神とを見るのみと。然り吾くり返し々之を思ひぬ。

故に路を歩みて多くの人を見て只だ其人たるを見るのみ。古人たると同時代の人たるとを問はざる也。只だ人情を見んことを希ふのみ。

宇宙を想像し、「時」を想像して其無窮無限遶たることは、實に吾をして、時代を忘れしめ、生死の海を忘れしめ、只だ神と自然と美と善と真と、而して人情とのみを思はしめ信ぜしめ、望ましむ。

夜祈禱會に出席す。終りて獨り神田街を散歩し、カーライル譯「ウ井ルヘルム マイステル」を

求む。(代價六十錢)

十六日。

十七日。

昨日は何事も書かれずに過ぎ去りぬ。されど多く思ひ多く見たり。

勿論進歩する所もありぬ。

午前、大久保余所五郎氏に書狀を語めたり。親友は吾が戀人なりと言ひやりぬ。吾は親友狂なりと言ひやりぬ。

親友知己の事を思うて今井忠治氏と吾が交情の近來大に更はりしを思ひて泣きぬ、自ら省みるに吾は何處までも無邪氣に淡白に殆んど氏と交を結びぬる十五六歳の少年の心持を持って接すれども、彼は己に其の情泉に年齢、野心、嫉妬の濁水を加へたり。彼は違々如として安ぜざるが如く慌々然として失へるが如く又た昔日の溫和同情を吾が前に示す能はざるに至りぬ。吾は一個の親友を夫ひぬ。吾は彼と必ずしも世を憂へ時を慨するの談を試みんとも思はず。只だ互に少年時代の無邪氣にして同情こまやかなる談話を希ふのみ。必ずしも大人豪傑を辯論せんとは思はず。只だ自然に出で自然に流れ自然にかほる、泉の如き花の如き談話を爲さんことを希ふのみ。嘗て然

りし也。其以前はこれなりし也。而して今は殆んど然る能はざるに至りぬ。思つて茲に至る、黯然として泣かざらんや。若し人生無残の事あり斷腸の事ありとすれば實に之れなり。

されど吾此の斷腸の事實に就き學ぶべき所少なからず。品性の變化に就いて思ふ所あるなり。あからさまに言へば今井氏の品性は寧ろ退歩せり。彼には進歩あらず。彼の情は濁りぬ。其は全く年齢と虚榮を希ふ心の増長の結果なり。彼には宗教心なる者なし。此の事に就いてはそれとなく吾しばしば注意諷示する所ありたれども、彼さとらず。

吾思ひ止まりぬ。彼れをして愈々其情の淡白直截を失はざらんことを恐るればなり。寧ろ自然に彼れ自ら覺り品性自ら高まるを待つに如くなければなり。寧ろ忍耐して交はり、吾より自然に感化さすに如かずと知りたればなり。

嗚呼人性、あはれなる人性、人の事を思ひ而して亦た自ら省みる時は實に悚然たらずんばあらず。人間一生僅か五十か七十、百年に足り足らぬ命を此の無限なる宇宙の間に持し、死して再び歸らざる運命を有し乍ら、自然の極りなき美妙にかこまれ乍ら、人情の幽遠なる至情を呼吸し乍ら、而も或は恨み或は妬み、或は惡み、或は争ひ、或は偽り、或は誘り、或は疑ひ、或は歎き、一生の過半を毒火の焔に焦がし濁流の波に沈むるに至りては淺、ましかも何とも言ひ様のなき事にあら

すや。

只だ仰ぐ可きは神のみ、神の信仰は安心を與へ自由を與ふ。故に氣誇ら悠なり。善を思はしめ氣を望ましむ故に品自ら高し。自家の天聽に對する義務を知る故に誇る所却つて壯嚴なり。

思へば彼の小兒を祝福したるクリスト エスの品性は高き哉。及ばぬ乍ら暫しにても此の高き品性の頂に登りて人間同類の僻涯を見下ろす時は實に泣かざるを得ず。

一生！嗚呼何の誇りぞ。何の咀ぞ。何の罪ぞ。

救世の猛氣は自然なり。神を思ひ、自然を思ひ、人間を思ひ、人生を思ふ。誰か救世の涙を揮はざる者ぞ。

吾今日迄時間の空過なることに付屢々悶えぬ。嗚呼吾、時を空過せり、如何にす可きと。かくの如き反省の苦は今日迄絶えざりし也。

されば己れが行爲にあまたの制限を置きぬ。知らず／＼置きぬ。如何にして時を有益に用ゆべきとの焦慮に絶ゆる間とはあらざりき。

然るに昨日の経験は更らに吾をして一關を排し、新たに由自の一つを加へしめぬ。

人間の望む可きは前途に非ずして頭上なり。人生は「今」なり。日月何をか運ばん。明日ありと思ふ心の仇櫻、只だ前途と稱する一種の迷魔に欺かれて希望の中に放逸をまじへ、安心の中に焦慮を加ふ。抑も迷ひ抑も愚なり。吾とは今の事なり。今をはなれて吾あらず。吾茲に立つ、今立つ、人間の存在とは今なり。

無窮の時間に過去あらん、將來あらん。只だ今あるのみ、神は過去にましますに非ず、將來にましますに非ず「今」嚴然として頭上にましますなり。望む可きは只だ頭上のみ。

故に爾、時の空過を嘆く勿れ、神を思はざることを嘆けよ。神の心、其の善なる、美なる、愛に満ち給ふ無極の御心を忘れず、常に眼を明かにして物を見、人を見、常に情を高くして之を思ひ、敏度の念に充たされ、一回首、一轉顧、絶えず無窮の生命を思はゞ爾の生命は眞の生命也。爾、明日死するも百年の後に死するも爾に何の名譽は來らざるも爾に何の災厄は來るも、爾は爾なり、無窮永遠の兒なり。亦何ぞ時の空過を嘆かん。

此の「今」の大觀念だに常に胸中に生れなば、神は其の將來を自ら助け給ふ可し。只だ將來の爲めに將來を思ふ勿れ。

過去、愛す可き過去、將來、美なる將來！ 之を清く思ひ、高く考へ、眞に味ひ、實に望むも亦「今」の呼吸に非ずや。

吾は小説家が人間一個の一生を極めて無雜作につゞるを怪む。人間の一生には實に極めて、高遠幽玄なる者の包まれ居る也。吾、只だ一個の乞食を想像するも、如何にして此の一個の人間の生涯を説く可きと思ふ時は自ら襟を正さざるを得ざる也。

十九日。

今は十九日の朝なり。

前記は十七日の朝之を認めし也。認め終りて直ちに矢野文雄氏に行く。愈々大分に教師として赴くことに決す。歸路電信局に立寄り金三十圓の送付を國許に請求す。而して金未だ來らざる也。十七日午後今井忠治氏を招き、牛肉を煮ビールを飲んで談す。吾思ひ切りて大に氏に向て忠告する所あり。前記を示して直ちに反省を求む。彼も涙暗を呑み、吾亦た泣く。共に／＼大に品性を高め人情を思ひ人生を考へ交情愈々密ならんことを誓ふ。

十八日は申しやりし金、來らざる爲め手はず狂ひ只だ茫然と暮す。晝前久保田富次郎氏を訪ふ。

午後植村正久氏を訪ふ。

午後三時過ぎ一睡を催す。夢半ばにして突然呼び醒す者あり。田村三治氏なり。語る。氏が此頃の傾向に就き忠告する所あり。氏涙を呑む。暫時にして伴武雄、神田靜治、引頭百々、金子馬次の四氏來り暫時にして吉田友吉、津田鐵雄の二氏來る。

牛肉を煮、小飲して快談高論、夜十時に至る。諸氏を送りて出で、途にンれと別れ、此れを別れ、終に金子馬治氏と吾と、且つ語り且つ歩す。彼れ吾が爲めに書籍の周旋は十分致さんと告ぐ。又た相通信す可しと言ふ。氏は今、専門學校英語教師となりし也。又すべての友と別れて、獨り暗夜をたどりて宿所に歸る。

羅馬びと、鎌倉の民、江戸人皆な多くは小さき事情の爲めに其の天來の自由なる感情、高尚なる思想、幽玄なる冥想を束縛され壓殺されたり。而して悉く死たり。今は居らず。天地依然、月は輝やき、雨はそほふり、花は咲き、葉は枯れ、虫は啼き、鶏は叫び、見よ人は行き人は語り人は笑ひ人は泣き、社會あり國家あり、凡べて悉く依然たり。天地依然、人然依、而して吾茲に來り、茲に俯仰介立す。而して又た羅馬びとの如く、鎌倉びとの如く、江戸びとの如く凡べての古人の如

く小さき事情の爲めに束縛せられ壓殺されんとはするなり。

大人聖哲、獨り自由なり。然らば吾は終に凡夫小人愚者の仲間に入りて葬られざる可からざる乎。否な否な。吾未だ修養の足らざるの致す所のみ。

昨今の事情も亦人事の致す所なり。吾之れに當る。決して信仰の吾、天職の吾を忘るべからず。忘るゝは修養の至らぬなり。記憶せよ、如何なる時にても天地は依然、神は嚴然、吾は人間也。吾自ら決して吾を失ふ勿れ。吾吾をだに失はずんば、事情も束縛も何かあらん。却て悉く吾の教育、觀察の材料たらんのみ。

我が朋友中、眞に吾の全體、根本を知る者なし。知らぬ道理なり。彼等吾の信仰を知らざればなり。吾の人生觀を知らざればなり。呼喚人間の最初は人世觀なり、信仰なり。而して彼等吾を知らざるは此の最要の點を知らず、或者は輕蔑し、或者は半吞し、或者は盲信す。されど眞に吾を知る者なし。

されど吾愛へす悲まざるを期す。神頭上に視給へばなり。吾を知る者も知らぬ者も、悉く此世になき時は忽ち來らん。神は公平なり。其面前に立つ時に當りて最も善なる者たらば吾は足る。

されど深く人間の事を思ひ而して朋友達が或は皮相に安じ、或は一種の迷へる誇りに居り、或は邪路に赴くを見る時は悲愁寂寞の感抑ゆ可からざる者あり。彼等人間にあらずや、堂々たる靈魂を有する者にあらずや、天地の間に介立せる者にあらずや、獨立の星にあらずや、聖殿に立つ者にあらずや。而して若し彼等滔々皮相に葬られ、邪路に死し、迷信に朽つるならば如何に悲しきぞ。嗚呼吾は朋友の靈魂を懐ふ、未だあらゆる人類の靈魂を思ふ能はず。クリストは高き事愈々明らかなり。

吾は自らの靈魂を貴重す。故に朋友の靈魂を貴重す。

「三百年の後の人の爲めに書す」てふ著作を思ひ立つ。

古人を生ける者の如く取りあつかふは人をして大なる誤感に入らしむ。古人をとくも決して生ける者として取りあつかふ勿れ。古人は古人、死せるなり。此世にはたしかに死せるなり。吾等は只だ記憶するのみ。若し強ひて古人の眞理に生きたるが爲めに、而して眞理は今、昔、同じきが爲めに、古人は今も生くと稱するならば之れ永久の生命と云ふことが古人彼れ自らの信仰にあらずして、後世の人の形容語たるに止まるに至らん。

古の聖哲は生き居る可し。其の靈魂は永遠の國に在らん。されど是れ聖哲偉人にのみいふ可き言葉、形容語にあらず。一度此の地上に生きし者は悉く生き居る可し。聖哲偉人は只だ地上にありて人類と上帝に對して大なる義務を盡したるに過ぎず。隅田の堤上に在りて萬人の目を喜ばしめし櫻、美なる花ならば、幽谷の中に誰れにも見られずとも散りたる蘭も亦美なる花ならずや。

名ある聖哲は吾等に記憶せらるゝのみ。記憶せらるゝこと即ち永久の生命ならんや。而も世の批評家多くは此の意味を以て永久の生命てふ眞理を説かんとす。明かにかくなざる迄も慥かに其の傾向を以てなすなり。之れ恐る可き誤謬也。眞理を誤る者、信仰を誤る者、實に之れに過ぎず。嗚呼誰れか永久に記憶さる可き。人類凡て亡ぶる時さへも有る可し。天地悉く其の形體組織を變する時さへもある可し。斯る想像をさへ有する人間の安心立命、豈に古人記憶位にて成さる可けんや。己に然り。然りと知り乍らも之を以てやゝもすれば人を導かんとする者あり。古人を生ける者の如くに論ずる者あり。人物論はつゝしますれば恐らくは此の大誤感を人に吹き込むに終らんのみ。實際に於ても比々皆然り。吾が經驗はこれを證す。吾が眞理の傾向は之を證す。かの教育ある人が却て己れの死す可き者なることを忘却して死を恐れざるは、其の學問の御蔭にあらず。多くは古人を生けるものの如く記憶せるより生ずる誤感を有するが故に死と云ふ法

則に、面と面、相接する能はざるの致す所のみ。故に學者程やもすれば「シンセリテイ」ならざる者はあらず。學者にして「シンセリテイ」なるものは必ず詩人たる可し。死の法則を忘るゝ勿れ。大信仰の入口は此法則の前に一度び低頭せざる可からず。然らずんば開かず。然らば古人を生ける者の如く取り扱ふ勿れ！

詩人は高尚なるハイモニイを作る者也。否なハイモニイを看出す者也。吾の經驗は之を證す。吾の進歩とはハイモニイを看出す事深く且つ廣くなることを意味せる也。眞理は最も深き最も廣きハイモニイのみ。

昨夜われ友と別れ、獨り曇りて暗き夜をたどり歸る。寂寞の感に堪へず。忽然として感あり。始めて自然を指して「母」よ！と詩人が呼びたる意味を知りぬ。カーライル其自傳的著、「サルトル」の中に、彼自身の化身なる「トイフェルスドレーク」の悲哀「てふ章に曰く、

「此時に至る迄彼れ自然を知らざりき。自然の一なることを知らざりき。自然は彼の母にして神聖なる者たるを知らざりき」と。

之れ彼が夕陽西に沈む時、天地將に大寂寞の幽調に撫らるゝ時、煩悶して野に迷ひし時の事なり。「マザー」！嗚呼大なるハイモニイなる哉。天地の粹なる者と呼んで父よと呼びしはクリスト、エスの大ハイモニイにあらずや。自然を母と呼ぶ又た實に大ハイモニイなり。

人間の多くは天地を忘却す。己れ自ら神聖美麗高壯偉大なる者の中に愛せられ、教へられ、慰められて存在する者なることを忘却す。地を蹶つて死物視し、人間を思ふて枯木死灰たらしむ。

人情はワン、自然はワン、神はワン也。其の間の大ハイモニイを見出して之を枯死せる人心の上に注入すること滋雨の如くならしむ者、之を詩人と云ふ。吾の警語の一つを加へぬ。

曰く、「母」よ！

二十日。

昨日、薄暮今井氏を訪ふ。夜、植村正久氏を訪ふ。明日吾が爲めに教會二三の友人相會することゝなる。

本日朝徳富猪一郎君を訪ふ。戒めて曰く、他人と衝突する勿れ、人を凌ぐ勿れと。皆な吾が今度大分に行き人と交はるに當りて適切の誠なり。吾能く人と衝突すればなり、凌げばなり。

されど徳富君心配し給ふなかれ。人と衝突せし吾は今の吾にあらず、人を凌ぎし吾は恐らくは今

の者にあらざる也。

衝突は雅量なきの致す所、凌侮は謙遜なきの致す所、共に修養ある者の恥辱とする所たり。徳富君、吾は君が思ふよりも大なり。吾は進歩する靈魂也。

吾は常に己れの周囲を見廻はすを好み、而して絶えず見廻す也。見廻はして自ら悶がく事あり。見廻して自ら喜ぶことあり。見廻はして失望することあり。見廻はして希望に充たさるゝ事あり。されど兎も角も見廻はすが故に活動す。而して見廻はさるを得ざる也。

十月

一日。

先月二十日筆を止めしより十日を過ぎぬ。

二十日の夜は矢野文雄氏に招ねかれて共に晩食して共に談ず。

二十一日午前外出買物す。午後四時教會員三四子、吾の爲めに植村正久氏の宅に於て送別會を開く。出席者は田村三治氏久保田富次郎氏西森拙三氏植村正久氏其他一氏也。植村氏送別の辭とし

て私立學校の事を語る。午後六時半、早く辭して今井忠治氏を訪ふ。氏病みて臥上に在り、強いて起きて吾と共に吾の宅に歸り、遂に吾を送りて新橋に至る。九時五十分の夜汽車を以て京地を發す。

彦根なる大久保余所五郎氏の宅に着せしは二十二日午後なりし。氏吾を導いて彦根舊城に登望す氏の宅に一宿。

二十三日朝、彦根を發し、正午、大阪に着す。大阪にて乗船。

二十四日薄暮、柳井津に着す。歸宅。

二十五日は弟收二と麻郷なる吉見氏を訪ふ。

二十六日は河手氏を訪ふ。順路有光里嬢の墓を吊す。

吉見氏に至る。其夜は一泊、二十七日早朝歸宅。家に在りて出發の用意す。薄暮より兩三氏をまねきて馳走す。

夜十時、送られて柳井港に出で夜半乗船、二十八日朝宇品港に着す。其日は終日宇品港に止まりて三ヶ濱行の汽船を待つ。午後七時乗船、夜半三ヶ濱着。

二十九日午後乗船、三十日正午佐伯着。

午後直ちに仲根氏を訪ふ。今日午前山名、野村、高橋等四氏、來訪。午後收二と共に近郊を漫歩し、高きに上りて遠望すれば佐伯町眼底にあつまる。
夜少年諸子來訪。其前、山中盛太郎氏を訪問す。

二日。

午前仲根氏を訪ふ、不在。蓋し氏と共に毛利氏を訪はんとてなり。坂本永年氏來る。午後三時鶴谷學館に行き、幹事の諸氏と學課の事に就き相談する所あり。

咄！咄！乾燥せる文字より離れて、吾をして、十日間の滿腔の感慨を吐かしめよ。

哲夫子は多感子也。右に向くも左に廻るも彼は感なくして止む能はず。彼今坐して茲に在り。彼の十日は逝きぬ。極めて多事なる彼の十日は逝きぬ。されど彼は徹頭徹尾、殆んどバツシープの地位に立ちぬ。彼はこれを見たり。此を聞きたり。されど彼遂に大なる發明の一つだに爲し能はざりき。一言以て言へば、寧ろうろ／＼と其の最も有益なる可き日を只だ／＼受動的にバツシープの中のみ過ごしぬ。

彼が十日間の事情は彼をして神の宮に、自然の中に、天地の間に俯仰介立せる一個のワイルドソ

ールたらしめずして、却て社會應接の人影の裡に見出さしめぬ。

故に彼は深く思ひ強く感ずる能はざりき。自ら律し自ら克つの反省を常にする能はざりき。

已にバツシープなり。彼は天職を思ふて奮激する程の機會は一つも掴む能はざりき。

三日。

嗚呼、吾の日月は矢の如く走れども、吾の進歩發明はまことに遅々たり。吾に對して「自然」は依然たる無言の自然なり。吾が心は無明にして常に神を視る能はず。惶々如として失ふ所あるが如く一日一日を送る。

九月二十六日河手忠氏を訪ひ、右光里嬢の死去の事情の詳細を聞き、感に堪へず。歸路、忠氏の細君に案内せられて其の墓を吊しぬ。少女の孤墳は小丘の頂に在り。其の麓に砂流あり。水清くして淺く、堤塘縁にして長し。細君の曰く、小流依然たれども少女は在らず、此流嘗て彼女が無邪氣なる遊に終日を送るになれし所なりと。其時小兒あり。石橋の上より身を躍らして砂に飛びぬ。細君の曰ふ。少女は性活潑、其の兒たりし時は又た彼の如きわざを爲しぬと。頭を擧ぐれば小丘は前程數歩に在りて白石の墳墓、其上部を小木の間に示すを見る。蕎麥の花雪の如く路傍に白ろし。

細君と共に萱を分け小松を分けて登り頂に達す。細君と別れ吾獨り墳墓の傍に止まる。此の時夏の終り秋の半ばの清き光下界に漲り、見わたせば田野將に黄金の氈を敷くに似たり。嗚呼少女は逝きぬ。而して自然は依然たり。其の美は依然たり。美の化身なる少女は逝きぬ。今決して見る可からず。而して吾茲に立ち、自然は依然たり。天は悠々として窮まる處を知らず。雲は漠々として無心の姿を保つ。

意味あるか意味なき乎。吾をして「死」を思はしめぬ。而して無窮、然邊の宇宙を思はしめ、「生」を思はしめ、又た「死」を思はしむ。少女や、死や、生や、自然や、吾や、嗚呼何のハーモニーぞ此の間に見出し得べき。

四日。秋雨蕭々として物寂し。

昨日始めて學舎に出席し二十餘名の生徒に向ひ、開講並に初對面の詞を述べ、日課を定めて歸る。吾をして少年を愛せしめよ。ア、吾をして少年をあやまらしむる勿れ。

薄暮、弟と共に市街を散歩し郊外に出で、暗夜をたどりて城山の後に出づ。弟の爲めに時代をはなれ、境遇をはなれ、一段高き人間の眞生命のある可きを語る。自然の兒として直ちに神に面す可

き消息を傳ふ。「二百年の後の人の爲めに書す」の意味を語る。

暮雲漠々として暗らし。弟の曰く、夜！夜とは不思議なる者かな、夜とは何ぞやと。吾由りて、凡て自然のミステリアスなるを語り、物質論を以て之を規するの甚だ淺きを告ぐ。カーライルの所謂火とは何ぞやの語を引き、自然には必ず深意のある可きを教ゆ。

ア、吾人の見る所は自然の變化の一部分に過ぎず。火や、水や、石や、金や、風や、草や、木や、花や、月や、光や、春や、夏や、秋や、冬や、實に大自然の一部分に過ぎざる可し。されど此の恐ろしき流動、呼吸、變化を保つ自然の中に吾の介立するを思へば實に悚然たらずんばあらず。

自然意味なく、人情意味なき者ならば、人生程モノトミイなる者はあらず。彼の厭世の徒、浮世をもものうく感ずるは無理ならず。嗚呼、吾實に幾度か人生の單調を泣き、殆んど言ふ可からざる束縛を感じしぞ。人間實に他の同情なくんば、其の生命は石の形よりも無調なり。

「同情」何等の貴き賜ものぞ。グレーの悲歌、何故に人を動かし、人何故に讀みて動くぞ。無名の花、幽谷の蘭に同情すればなり。

吾若し單調に無限のメランコリーを感じんか、直ちに茅屋の少女が夢を懐はしめよ。「同情」は眞理、信仰の根本なり。神の教は同情の教なり。厭世の教は單調に感傷せし結果ならずや。

去月二十七日、送る者に別れ、弟及び藤形夫婦も岸の下港にたどる。天曇りて日光朧ろなり。吾殆んど人生の單調の極を感じぬ。

五日。雨降ること蕭々たり。

昨日より始めて授業す。三時半(午後)より下級生の爲めにナショナル讀本二の巻を授く。四時半よりリーディングを授く。午後八時半より代數學を授く。九時半より上級生の爲めにス井ントン萬國史を講ず。以て日課を了はる。

以て日課を了はる。然りパンの爲に働きたる日課は了りぬ。されど果して吾が天職に盡す可き日課は了りたるか。

嗚呼、天職！天職！詩人としての天職は難き哉。されど吾詩人として存在し詩人として天職を完うする能はずんば寧ろ此の生命を咀ふなり。嗚呼日々夜々何をか逐ひ何をか求むる。何の樂み

ぞ。何の喜びぞ。人生を思ひ自然を思ひ、人情を思ひ、神聖を思ひ、神の愛を思ふ能はざる生命は咀ふ可きかな。

嗚呼爾、起てよ、めざめよ。詩ならざるなく、教へならざるなし。

爾一日の事を沈思すれば一篇の詩たるべし。秋雨を聽いて昨夜友を懐ふ。亦一篇の詩たる可し。二十七日の夜、父に送られ藤形に伴はれ、朧月の下、無限の感慨に打たれながら、岸の下、角屋に行き、藤形と弟と三人燈下に汽船を待ちたるが如き、或は老父或は朴訥の男、其の樂しげなる夫婦、彼れが生涯、多感幽愁の青年、無罪なる少年、嗚呼之れ亦一篇の詩に非ずや。二十五日の夜の明月、岸の下、阜頭の満潮、冥想し來れば亦た實に多感多情なる詩に非ずや。

詩や、詩や、豈に遠きに在らんや。吾れをして只だシンセリティーならしめよ、沈思せしめよ。悉く詩ならぬはなし。

人生を説明し、自然の美を傳へ、天地の神聖を説き、自由、敬虔、平和、威嚴を教ゆるは詩の目的に非ずや。吾に一雙の眼あり、吾に一個のソールあり、吾れに満身の熱血あり、吾れに一片の心あり。神よ、神よ、ア、神よ、吾をして起たしめ給へ、めさましめ給へ。

七日。

六日去りて七日は來り、七日も來りて七日も亦今將に去らんとす。

本日午前、收二と共に郊外に出で金比羅山に登る。此の山は佐伯町の南に當りて兀立せる山なり。眺望佳なり。

九日。

吾に沈靜の時を與へよ。

嗚呼吾が詩神何處にか住む。ミューズ何處にか住む。

吾が眼は開き吾が心は感ず。而して吾が時はゆくなり。嗚呼ミューズ何處にか宿る。吾何を見る可き、何を感じ可き。何を記す可き。

信仰何處にか在る。漠々として日は去り、遑々として自ら迷ふ。嗚呼信仰は何處にかある。

知らず何の命ぞ。爾が日々夜々送る命、知らず何の命ぞ。嗚呼命！爾生れて茲に來り享けて一個の命を保つ。而して日月は爾を死に導きつゝあるなり。知らず何の命ぞ。信仰は弱く、自信は薄く、行は輕し。知らず何の命ぞ。爾の求むる所何事ぞ。爾の命が求めて以て生存を値ひする所の者何事ぞ。嗚呼夫れ只だミューズ乎。

思ふにミューズは強くして大なる、沈みて深きソールを愛するが如し。而して顧みて自ら思ふ吾

れ果して強きか。強き證據何處にかある。吾果して大なるか。大なる證據何處にかある。吾果して沈深なるか。其の證據何處にかある。

思へ。生死利害得喪を離れて、自ら立ち自ら行ふ事の如何に難きかを思へ。「難」吾此の字を好まず。而かも其の事實なるを如何せん。

嗚呼人生、人生、吾は其の迷室たるを疑ふ能はざらんとす。生、死、困厄、災害、不運、罪惡、愚鈍、何に由りて之を解す可き。神の御心は大なり。已に其の御心を信ず。而かも何故に人生の迷霧に悲叫するぞ。之れ神の御心を深く思はず眞の愛の大法則を強く感ぜざるの致す所に過ぎず。

ア、神よ、吾をして弱卒ならしむる勿れ。吾をして眞理と善徳と美妙の爲めに戦ふ強卒ならしめ給へ。言ひ換ゆれば堅固岩の如き信仰の上に立ち、忍耐、持久、智慧をして敢爲ならしめ給へ。神よ、吾は時代を視る者に非ず。有形に迷ふなきを期す。愚に終はらざるを望むや切、只だ古今の時間の無窮に通じ、東西南北のスペースの無邊に渉る可きミューズと共に生きんことをのみ是れ希ふ者也。吾は生きたる者の一なることを忘るゝ能はず。ソールの一なることを忘るゝ能はず。招かれて撰ばれたる者の一つなることを疑ふ能はず。然らば神よ、吾をして強からしめ給へ。只だ望む、強からしめ給へ。神よ。吾自ら眼なきを憂へず。只だ自らの弱きを憂ふ。智なるを憂へ

す、弱きを憂ふ。弱き者は最も愚にして小なる者なることを知る。神よ強からしめ給へ。

昨日早朝收二と共に寓居を發し、尺間山を志して遠行の程に上る。尺間山は佐伯を去る西北三里に在る高山なり。絶頂に祀あり、尺間神社と稱す。

頂はこれ石巖々たる岩山なり。兀として秀立し、四方の群山を脚下に瞰視す可し。東方大洋を望み、三方は連山波濤の如く遠く肥州日州に連なるを視る。

咽ぶ溪流、樹蔭の茅屋、山谷の小民、其の生活、樵夫、牧者、吾が觀ることを希ふ者は只だ大なる、美なる自然と、深意あるシムブル、ライフのみ。

大山高岳に登り、人寰を脱して親しく無言冥々無窮幽玄なる自然と面々相接する時は、吾は實に言ふ可からざる暗愁を催すなり。昨日も亦た其の如し。吾はウオーズウォルスの詩想に由りて、自然と人生の調和を得たることを信ず。而かも此暗愁容易に拂ふ可からざるは何ぞや。言ふまでもなし、余未だウオーズウォルスの詩想を十分深く味はざるが故なり。然らば則ち吾未だ低い哉。噫シムブル、ライフ。而して此の大自然、泡沫の如き人の命、而して此大宇宙。

生くる者は人のみに非ず。見よ、鳥や、虫や、魚や、凡て皆な然り。死する者は人のみに非ず、

見よ魚や虫や鳥や悉く然り。ア、生物、其の意味は如何。其の望は如何。其の目的は如何。

吾が幽思は、蜂を躑り、谷を下り、雲を仰ぎ、海を望む間も常に此の如き也。吾は只だ大調和をのみ觀出さんことを希ふ。

昨日路傍に見たる彼の樂しげなる一族に宿る詩神の調和の聲は如何。彼の山谷に出遇ひたる老ひたる樵夫と其の前を導きたる小兒の上に住む詩神の深き聲は如何。遠山の絶頂より立ち登りし晚烟に住む詩神如何。千百の山谷千百の村落に住む詩神は如何。

多くの人間は無窮の自然の中に、吾が想像の谷間に充つ。此の谷間の此人と此の無窮の自然とを調和する詩神の聲は如何。ウオーズウォルスは何と聞きたる。ミルトンは何と聞きたる。グレイは何と聞きたる。カーライルは何と聞きたる。エマルソンは何と聞きたる。ゲーテは何と聞きたる。吾は何と聞く可き。

山谷にも悲事は絶えず。詩神の幽音は之を何と謳ふぞや。嗚呼吾は想像の靈妙なる翼をかりて詩神の琴線を逐はん。

十一日。

昨日今井忠治、田村三治兩氏より書狀來る。

今井氏に返書を認め、天職の容易になり難きを言ふ。

田村三治氏に返書を認む。

自ら思ふ事を成さんと欲せば爲すに在り。義務は義務なり。盡さざる可からざるが故に主義なり。故に盡さざる可からずと感ぜざるは義務の念乏しきを證す者也。

由りて思ふ、吾今信仰淺しと。

何故に信仰淺きか。神を信ぜざるに非ず。大に信ず。只だ神を思ふこと少なきなり。何故に神を思ふこと少なきか。シンセリティーならざればなり。何故にシンセリティーならざるか。冥想、回思の足らざればなり。シンセリティーの全くなきを憂へず。常にシンセリティーならざるを憂ふ。多くシンセリティーならざるを憂ふ。

克己の念足らず、遵節の心足らず、奮勵感激の情足らざる所以の者、一にシンセリティーならざるに歸す。

英雄なくんば吾人生を失望す、吾今にして始めてカーライルが英雄崇拜の本旨を知りぬ。然り此

の世界若し彼のクリストなくミルトンなくルーテルなく、其他シンセリティー以て茲に立ち人間を教へ、人類を導き、人類を支配せざりしならば吾、人生に失望す。吾は英雄の雄魂靈心を通じて人生の希望を認む。英雄なくんば世は空なり。愚人の衆合たるに過ぎず。獸類の群たるに過ぎず。

英雄に因りてシンセリティーを知り、シンセリティー以て神を望み、世界の神聖を信ず。信仰以て起る。希望由りて生ず。

而して吾自ら英雄たる能はずんば、人性程怪しくして恐ろしき者はあらず。

英雄たる可きは義務なり。クリスト曰く、爾曹は世の光なり。山の上に建られたる城は隠くることを得ず。燈を燃して斗の下におく者なし。と、然り、英雄たるは義務なり。神は人が悉く英雄たらんを望み給ふ也。「英雄たるは義務なり」。之れ吾が信仰の粹也。

十二日、夜半。

カーライルに英雄論あるは以て人生觀の偉大なる高潮を見る可く、ウォズウォルスに靈魂不死のオードありマイケルありソリタリーバーあるは、以てウォズウォルスが人生觀の幽深、超然、溫和なるを見る可し。

カーライルを讀みて憤然として起ち、ウォーズワオルスを讀みて默然として安んず。

詩人豈に己れ自らをのみ自然、宇宙の間に見出さんや。凡ての春を無限の時と無限の場所との茲に直ちに見出す。

之れウォーズワイルスに雲雀の詩ある所以也。

爾、これを自然の中に見出せ。然らば其物は少なる者と雖も新しき方面を爾に示して、新しき意味を爾に語る可し。

之れを言はん。詩神は自然の中に住む。

十三日、朝。

習慣の昏睡より人心を醒起し、吾人を圍む此の世界の驚く可きを知らしむるこそ「詩」の目的なれ。更に一步を進めて言へば、人をして自らを此の驚く可き世界の中に見出さしめ、神の眞理の中に人生の意義を發明せしむるこそ、吾が詩人としての目的なれ。

然らば先づ自らを猶ほ一層、強く深く神の宮なる此驚く可く愛す可き世界に見出し、己れの周圍の人、社會、市街、村落、男女、草木、泉流、夕陽、鳥雀、炊煙、雨聲、凡てを此驚く可き、愛す

可き不可思議なる世界に見出す可し。

更に言へば爾自ら一層強く醒めよ。

さ。れ。ど。憐。れ。む。可。き。人。性。

十四日。夜已に更けぬ。吾今坐して青燈の下に在り。

洪水去りて天地ひとしほ寂寞を加へぬ。暗夜、風聲しきりにして雲漠々たるを思ふ。滴々の音、自から幽なる者、之れ雨聲に非ずや。蟋蟀の音亦た何處にか聞かる。

嗚呼吾今坐して茲に在り。深夜は沈思を興へ、沈思は感慨を増さしむ、吾再び繰り返さんかな。

『これど憐れむ可き人性』

嗚呼 Poor human nature !

吾日々何を爲し、吾日々何を思ひ、吾日々何を企て、吾日々何を望むぞ。爲すなきの日は逝き、思ふなきの日は去り、望みなきの日は過ぐ。只だ夫れ漠々として今日よ明日よと送るのみ。空なる哉、憐れむ可き人性。

鬱勃として感慨徒らに昂がれども何と記す可きかを知らず。

吾如何にして爲す可き事を爲す可き。只だ自立して以て勞苦し、自信して以て爲すにあり。

されど憐れむ可きは人性。弱し、愚なり。鈍し、虚なり。忽ちにして自ら失ひ、徒らに自ら陥りて而して要するに自ら之を悟らず。凡俗の虚相に交はつて迷徒の頑皮に媚ぶ。憐むべき人情。何故ぞや。人性終に此の如きか。然らば人生は空なり。神を思はざるの罪のみ、罰のみ。人生は空に非ず、賞と罰也。

神は人間を愛し賜ひ、人間は神を知り、神を信じて初めて希望あり、意味ある也。神は此の人類を導かん爲めに英雄を下し給ふ。英雄は人を支配し、人を導き、人を教ゆ。

故に人は英雄聖賢を崇拜して其の教に順ひ、其の支配を受けずんば、然らば自ら英雄として神命を奉じて人を導き人を教へざるべからず。是れ人世の最大法則なり。カールが英雄崇拜論決して吾を欺かず。吾今にして之を悟りぬ。

英雄は人を支配し、人を教へ、人を導く。彼は強く自ら立ち、強く自ら信ず。頭上只だ上帝の在るを知るのみ。乾下坤上、恐れて散す可きは上帝と上帝の法則あるのみ。自ら失ふて以て自ら死せず。英雄は只だ道を信じて強く自立したるに過ぎず。詩人としてはウォーズワースを見よ。

吾亦た人間と生れて、人間の間には人間在り、吾が上下に天地存す。間にして、疑もなく吾が周圍には人間在り。吾が上下に天地存す。

堂々として自立し、常住座臥、神を思ひ、天職を思ふ可し。されど之を以て自ら戒むるが如きは已に業に未なり。英雄は職を忘るゝ能はず。故に思はんとして思はず。道より離るゝ能はず。故に自立せざらんと欲するも能はず。

筆を驅りて野に叫ばんと欲する吾が雄心の勃々たるを如何せん。

多くの文士は生れて、而して逝きぬ。吾亦た其の一員とし立つ可きか。ア、文士たると、其の農夫たるとを問ふ勿れ。凡て神の命なり。即ち之に安んじて盡すの外あらじ。

搞げ、然らば開かん。求めよ、然らば與へられん。爲せ、然らば成らん。成らば神は受けん。人生は之れなり。

十五日。

「自立」は大人の本色なり。吾今にして之れを悟りぬ。吾が獨立自信する靈魂を思ふ時は吾が心躍る。

「自立の靈魂」、ソール。何等偉大幽深の文字ぞ。吾はソールなり。宇宙に存在せるソール也。

大人とは、自己のソールと宇宙の主宰者との最も親しき関係を見出したる者に非ずや。
凡夫とは、自己のソールを忘れ、宇宙を忘れ、神を知らざる者に非ずや。

十七日、朝。

雨、初めて晴れて天地再び光の衣を被る。計算すれば一週間の降雨なり。先週、月曜日の午後より始め、今朝に至りてはじめて日を見る。金曜日の夜より大雨と強風と起り、土曜日に大洪水來る。其の日十時十一時頃を以て満潮の時となし、最も洪水の甚しき時なりし也。
日々授業を續く。讀書の暇殆んどなし。故に時々沈思を得るのみ。以て精神理想の糧を缺かざるを得。

吾れに教ゆ可き生徒あり、交はる可き有志家あり、思ふ可き朋友あり。慮かる可き兩親と舍弟とあり。之れ目下吾が周圍に存在する所の社會的關係なり。吾が世間的關係なり。

門を出づれば小都會あり、郊外一步を轉すれば山河の蒼々たるあり、茅屋の點綴せるあり、仰けば無邊の天空悠々として連なり、願れば不盡の自然は黙々として回ぐる。之れ吾が超然的關係なり、出世的關係なり。吾今茲に立ち茲に在り。而して吾が關係は則ち此の如し。

吾を苦むる者は實に此の關係に處する道なり。多くの俗慮、やゝともすれば社會的關係の上より起り、名づけ難き幽愁は往々超然的關係の上より發す。

俗慮にあらざれば幽愁、幽愁にあらざれば俗慮。

未だ容易に眞實なる満足に住む能はず。眞實なる平和に居る能はず。未だ充分己れ自らを自然の大界、神聖なる靈境の中央に見出す能はず。未だ充分己れのソールを思ふ能はず。故に他人のソールをも思ふ能はず。未だ充分日々のカストムを離るゝ能はず。

既に此の如し。而して自ら此の如きを知る。則ち不穩の精神暫時も止まず。

今日圖らず新嘗祭の休日なりしを以て、午後、收一と共に城山の後より下村の山谷を涉り、小坂を越えて坂の浦と稱する海濱に出づ。其より山麓、海に盡くる處の斷崖の下をゆき、埠頭をめぐるいで、歸宅す。路に草刈る乙女の群を見、畦を行く夫婦の農夫を見、谷間に集まる小村を見、溪流を見、紅葉を見、島嶼を見、碧海を見、白帆を見、漁夫を見、舟を見、長へに送る夕陽を見たり。其の美を認めざるに非ず。されど一種の幽愁は暫時も脱する能はず。調和を失ひたる如く、弦線の絶たれし如く、泉流の涸れし如く、吾が心裡、少しもあきたらず、何者をか見能はざる如く、何

等の幕か、吾が前頭に垂るゝ如く感じぬ。言ひ換ゆれば遂にミューズの一曲をも聞く能はざりし也。ミューズの在る處を見能はざりし也。何故ぞや。純全、シンセリ、テイイーなる能はず。全然、其の見る所の者を神聖なる世界に見出す能はずして、吾自ら已に幾分の同化を何れの處にか有つを以ての故にあらずとせんや。

本日は舊曆九月八日なるが故に月漸く美し。收二と共に薄暮郊外に出でんとして、道に樂師寺育造氏と云ふ、當地基督教會の監督者に出遇ふ。吾が宅を訪んとて出掛けしと云ふ。則ち共に散歩す。行く／＼當地の教勢を聞くを得たり。

徳富氏より來狀。大久保氏より來狀。

二十日。

十七日筆を置きてより忽ちにして三日を過ぎぬ。

月已に更け渡りぬ。日々の職業は日々務められぬ。一の決心あり。そは此の度心ならずも受任せし此の教師の職を責任ある大任と信じ。青年を感化することに力を盡す可しとの決心なり。

二十一日夜半。

昨夜當地に來りて始めて教會堂に出席す。會者、吾等兄弟の外に四人。怪しげなる一室に此の少數が聲を張り上げて歌ひ、涙をのみて祈る。少數と雖も其の壯嚴なるを失はず。

二十三日。

吾今午後の授業を終へ、歸り坐して茲に在り。暮雲ものさびしく黄昏の氣靜なり。

近來筆執る事まれなり。然らば感ずる事少きか。否な。見る者少なからず、感ずる所亦甚だ多し。只筆執る機會少なきなり。

二十一日午後三時半頃より收二を伴うて山に登る。是れ窗外を望みし時、遠山極めて近く現はれ、秋の峯極めて高く、空の色極めて澄めるを見たればなり。由て夕陽の美を得んことを望みたればなり。

眼下に見おろす佐伯市街、山々にかゞやく落暉、河流、空色、遠海、四國地の煙山、或は山谷の村落、或は岸邊の孤帆。

悉く吾をして大なる自然、美なる自然と、人生とを聯感せしむるの種ならぬはなし。吾をして人類を思はしむ。或は人類を導く大人英雄を思はしむ。或は人間一生の運命を思はしむ。

市街は社會を代表するに非ずや。人間相關する者を表示するに非ずや。競争、怨恨、義俠、謙遜、虛榮、偽善等の性質を示す者に非ずや。

彼の山、彼の流、此の空の色、此の草木の緑、無際碧昊、悉く自然の大と無限と無窮と靈妙とを示すに非ずや。依然たる者を思はしむるは即ち變轉する者を思はしむる也。

吾をして只だ最後に神聖の全能全智なる主に向て叫ばしむるの外あらじ。

二十二日は日曜日、早朝收二を伴うて、銚子淵に向て出發す。
二十四日。

吾今夜の職業を終へて坐して茲に在り。

本日晝飯前獨り外出、招魂場の石上に坐し、沈思する所あり。

深く吾未だ全き吾の獨立を此天地間に見出す能はざることを感ず。則ち吾が一個のソールを吾が一個のソールとして獨立して、自然に對ひ神に向ふ能はざるを知りぬ。

其證據には吾未だ全く世を離れ人を忘れて只だ獨々乎として俯仰介立する能はざるを見るなり。我が身は社會取引の風波に漂ひつゝあるなり。吾が心は社會潮流の影響より脱する能はざる也。

吾未だ決して自然の兒に非ざる也。吾が苦慮は之れなり。吾はシンセリタイーなる能はざる也。吾の憤慨は之れなり。

嗚呼吾は心の眞の底に憂を有す。神に祈る事は他に非ず。

吾をして今一層爾によりて立たしめ給へと云ふ事也。吾をして今一層、吾を獨立のソールとして天地の間に見出ださしめ給へと云ふ事之れ也。

二十五日、水曜日。
二十六日。

此天地間に於ける人生の意義を解せんと思はゞ、人類と自然との不可思議なる調和に通ぜざる可からず。

嗚呼人類！此の天地間に於ける人類！其の歴史！

思ふにカーライルは歴史家なり。故に彼の人生觀や英雄論や、悉く之を此不思議なる自然と人類との對照より得たる者に非ざるか。彼は自然を觀たり。而して人類の歴史を觀たり。思ふに彼の壯嚴なる思想、鬱勃たる感情は茲に發したるに非ざるか。彼は此の靈變無窮の自然の底に神聖な

る者を觀たり。人間の生死を痛感したり。人類の變轉する跡を觀たり。已に此の如し。彼はたしかに豫言者となりぬ。

吾之を疑はず。吾をして山上に立たしめよ。而して一時間の冥想を與へよ。將に心躍らんとす。ウオースウオルズは歴史に於ける人類、天地に於ける人類を觀たりと言はんより、此の靈妙なる宇宙に於ける人間一個の生命を觀たり。其の一生を觀たり。人生を想ひたり。而して自然を觀たり。彼の詩が茅屋の民を歌ひ、淳朴の生涯を歌ひ、而かも常に永遠の命を仰ぎたるは此の故に非ずや。

神よ、此の吾は未だ御前にのみ立つ、希望あり、自信あり、謙遜なる者となる能はざるなり。只だ神の全き愛を待み仰ぎて立つ淳乎たるソールたる能はざる也。其の神の知り給ふが如き也。神よ、希くは此の地獄より救ひ給へ。

二十八日。

此頃の秋日の麗はしさよ。蒼穹常に晴れ渡り、大氣いつも澄みて靜かなり。山々も近く見え、所々紅葉に飾らる。百舌樹上に叫ぶ時は風徐ろに來る。潮満る時は夜氣軽く覆ふ。收穫の時なる故に野には終日農夫等の聲充つ。嗚呼美しき秋は來りぬ。吾が愛する春逝き、夏逝きて而して此の

秋來りぬ。年々歳々、等しき季節は來る也。吾をして此生を其の美に托して安するを得せしめよ。美なる哉自然。人が生を此間に寄する、豈に徒だ煩悶苦吟する爲めならん。神は美に満ちたる世界を人間に與へたれども、惡魔は來りて其一眼をくらしぬ。

吾が生已に茲に費す二十餘年、ア、吾茲に生れて茲に長じ、已に二十餘年を過ぎぬ。猶ほ來るべき年は來る可し。而して去る可き年も亦た來たらん。去りて何時にゆく可き乎。神の靈なり。

今日は土曜日なり。過ぐる水曜日の夜は教會の祈禱會に列し、共に二三の青年諸子と祈禱す。吾實に、此年少の人々が單純にして熱心なる信仰に感じぬ。彼等は單純なる祈禱を泣きて祈る也。彼等と共に祈る時は、眞に天神頭上に在します心地す。神は吾を此の泉の如き自然の感情の群に投じ給ふ。吾亦た此の群に盡すべき使命を有つなり。

吾は進歩を疑はず。吾にして只だ今の如くんば實に失望する也。されど吾進歩を信ず。神の最も美しき法則は進歩なるべきを信ず。愚より賢に賢より聖に、聖より神聖に遂に神の御心に達し得

る事を信するが故に失望せず。

吾は吾自らの缺點、愚暗ほど明瞭に知る者はあらず。

たとへば自らの天職を、ルーテルが天職を重じたるが如く、ボーロが其の天職を重じたる如く、ウオーズウォルスが其の天職を重じたるが如く、左様に重じて而して熱中する能はざる也、之も信仰薄弱なればなり。何故に薄弱なるか、愚なればなり。何故に愚なるか、吾が年來慣らし來りたる皮相的感情と怠惰とは吾をして愚ならしむ。

されど吾が進歩を疑はず。故に吾失望せず。只だ勇氣を鼓して愈々進む可きのみ。達せざれば止まざる可し。

二十六日の夜、收二と共に月光を追ふて海濱まで散歩す。昨日小閑をぬすみて流に綸を垂る。昨日教會に出席す。田村三治氏より書狀來る。富永徳磨氏の作文(佐伯)を評す。金子馬治氏に送狀す。

神は觀る者を教へ給ふ也。爾の周圍を見よ。

自然と吾と何ぞ相隔たるの甚しきや。神と吾と何ぞ相隔たるの甚だしきや。人類、社會と何ぞ相遠さかるの甚だしきや。

吾は未だ「自然」に非ざる也。

三十日。

昨日は日曜なりき。午前、當地の教會堂に出席す。

午後、日置氏に誘はれて鯊釣りに出掛けぬ。鯊は釣れざりき。刈り入れ時の野面、紅葉に滿つる野面は吾が感情を動かすこと少なからず。一昨夜、理髮所に至る。人々が俗話を聞き、眞の社會に近づきたる心地す。

吾をして有りのまゝに言はしめよ。吾が心は、荒れたる野の如し。只だ荒れたる野の如きのみ。一望漠々として何ぞ其れ寂寥の甚だしきや。吾が心は少しも安する能はず、吾が足なみは少しも整はず、吾が魂は自然、人生、人類、上帝等の問題を出入して少時も脱する能はず。

吾は神を信す、確信す。而して其面前に此身を置くのシンセリティーなし。

吾は自然を思ふ。而して全然其の無窮無限の不可思議の間に此身を見出す能はず。

吾は人類を思ふ、思ふて止む能はず。而かも其「事實」の眞なる者の中に此身を見出す能はず。其事實を此自然の中に全然見出す能はず。吾は人生を思ふ。然れども未だ深く思ふ能はず。未だ人生を自然の深立なる調和一致に通ずる能はず。

吾は吾を思ふ。而も未だ全然責任あり、力あり、生命ある獨立の星として感ずる能はず。

郊外、山谷の散歩に遭遇する所のものは、吾に自然と人生とに就て何者かを語る如くなれども、未だ何者をも語らざる也。

吾未だ人生の事實に深き決意を惹起す能ふほどに進まざる也。市街を行けば何者か吾を刺戟し、吾をして周囲を見廻はしむれども、未だ何者をも見る能はざる也。

昨夜教會に出席して、「驚異心」てふ題にて感話する所ありたり。

今日は逝かんとす。夜已に深く時將に十二時なり。上弦の月徐かに東の空に登りぬ。寒き光はいと寂びしく下界を罩むる也。天地一に何ぞ蕭條たるの甚だしきぞ。吾坐して茲に在り。

考ふべくんば今也。沈思すべくんば今也。反省すべくんば今也かし。吾が生命の今日は逝きぬ。永遠に逝きぬ。知らず何の意味ぞ。知らず今日の命はれ何を意味する。人生意味ありとすれば、今日は今日丈けの意味なかる可からず。

朝起事を執り、今將に事を終へんとするに至る迄、吾何をかなせる。

吾、日光の下に動きぬ。吾、遠山の景を望みぬ。吾、紅葉の美を眺めぬ。友に書狀を認めぬ。父母に金を送りぬ。借金を返済したり。書籍を誂えたり。生徒を教へたり。自然、人類、人生、社會を思ひぬ。而して又た時には吾自らの爲すに足るや否やを疑ひ、少しく失望せり。されど直に恢復す。美なる月は今、吾を照し、吾之に對して美を感ずる也。

吾が行爲にして吾れ自ら計算し得る者ならば、今日の吾は實に此の如し。知らず此のうちに何の意味ある。

三十一日。

朝日、山の端に昇り、自然新たに醒め今日の日の事始まらんとす。知らず今日何事をなし、何事を觀、何事を感じべき。

此の不可思議なる自然のうちに在りて、人は何故に平然として何者をも感ぜざるに至る乎。自然は不可思議なり、されど此の人の性ぞ一層奇怪なる哉。吾かく知りつゝも吾が心の如き、全然、自然のうちに己れを見出す能はざるぞ、愈々奇怪なる哉。

此奇怪なる傾向こそ人が尙ほ禽獸と相類似する所ある所以乎。

多くの人々は茲に生れぬ。而して逝きぬ。人間は人間なり。人間は人間の外、以て如何ともする能はず。人類ありてより人類の終りに至るまで、人間界に生れたる者は只だ夫れ人間として此生命を經過す可きのみ。吾は人間と生れて、現に人間と天地との中に吾を見出すなり。知らず吾と人類と何の関係ある。天地と吾と何の関係ある。凡ての人類は互に何の関係ある。凡ての人類は各々天地と何の関係ある。

生死の限りなき海、されど其は只だ大海の泡沫の消滅發生するが如き者にあらざる可し。大なる意味あらん。深き意味あらん。然り深き意味あるなり。

吾豈に泡沫の一片ならんや。人類の仲間、人間として大なる意味を有つて生れ出でたる也。其の意味は何ぞ。

本日午前カーライルの「ゲーテ論」を讀む。

其他の時間は職業の爲めに費されぬ。

第三

自明治廿六年十一月一日
至同廿七年三月廿一日

十一月

一日。

實際、眞實の生活、社會、吾より遠きがごとく又た近きがごとし。人間の事實、吾の眼下に來らんとするが如く、又た煙霧の中に閉ぢらるゝ如し。

吾は見んことを欲す。深く觀んことを欲す。而して未だ觀る能はざる也。

大なる喜びは未だ吾が心を鼓動せしめたる事あらず。

吾に希望なきにあらず。されど吾に未だ嘗て大なる喜びの感謝の情なかりき。大なる幸福の天樂を聞きし事なかりき。之れ實に事實なり。最も悲む可き事實と云ふ可し。吾今之れを發見せり。此の事實を發見せり。

嗚呼深くして純なる愛情よ。來りて吾をして躍りあがらしめよ。熱涙をほとばしり出さしめよ。高くして深玄なる自然の美よ。來りて吾をして感謝の絶叫を以て爾の前にひれふせしめよ。眞にして實なる永久亡びざる望よ。來りて吾をして小兒の如く喜び勇者の如くいさみ進ましめよ。已に此の悲しき事實を發見せり。而して吾の此の事實に慣れて知らざりしを發見せり。之れ慥かに大なる發見にあらずや。

大なる喜び、眞の望み、幸福の涙なくして、如何にして人間の心胸に、自然の活泉、天來の春光を注ぐを得んや。「人間の喜び」「人間の悲み」。此の事實を深遠玄妙なる此の宇宙の間に於ける事實、最要大事實として思ひ又た感ぜしめよ。

詩とは大なる喜びと大なる悲みとを記したる者に非ずや。

天使の悲みと天使の喜びとを人間界に紹介する者、之れ詩人に非ずや。吾に天使の大なる喜びなくんば、之れ吾に低き俗界の喜びあるを示す者に非ずや。

吾に天使の如き大なる悲みなきは、吾に低き下界の狭き卑き悲みある故に非ずや。

吾に大に求めて止まざるが故に、神は次第に其の衣―自然の美を吾が生涯の賜として、吾に示し

給ふ様になりぬ。

見よ、紅葉の美しさよ。吾が弟と共に其の傍にそふて歩み、或は橋を渡りて、顧みて、紅なる水、河に湛ゆるを賞し、更にすかし見て青空、青山、緑林と相映するを喜ぶを得るが如きは大なる賜に非ずや。

或は村落を飾り、町はづれを飾るに、小兒の群を以てする所の美妙を認め、傾けるを木に支へられし小屋の上に掩ふ柿樹、將に紅熟して枝をるゝばかりにたゆむを見て、何となく茅屋の民をなつかしく思ふが如き、之れ吾が今日の散歩の感情に非ずや。

吾が見んと欲する情の切なるが故に、三十分間の散歩の間にすら、忘る可からざる如き記憶にのこる者を見たる少からず。

二日。

神よ。愛と智と眞の神よ。吾をして人情の中に大なる喜びを求めさせ給へ。空想の中にあらずして、凡の人間の魂を貫流する人情の泉の中に希望を得させ給へ。此の泉が神より出で神に又た注入するものなることを信じて、此の中に深くして眞面目なる幸福を感じることを得させ賜へ。

四日。

昨日の生活を記し置く可し。

昨日は天長節にして學校は休みなり。午前收二と共に女島の野らに散歩す。日暖かにして小春の季節なり。されど秋は矢張り秋なり。はぜの紅葉已に散りて、半ば枝に止まる者すら風に鳴る毎にひらめき落つる様、秋は矢張り秋なり。海近き河流の口に至り、石にこしかけて遊ぶ。潮落て洲はあらはれ、鳥の群しきりに飛びめぐる。水門を下す童子を見き。小舟をなだ山に渡さんとして潮を待つ子供を見き。水門の傍に背低きはぜ、堤の上に立ちて濱風に紅葉をかゞやかす様の美しさ。渡守りを見き。此渡守りの小屋に入りて物語らば面白からまし。彼も亦、わが「物語」に入るべき一人ならずや。ひよ鳥(?)のはぜの枝に飛びさわぐも秋なり。魚鷹あまがしの其純白なる裏毛を日にかゞやかし、其のするとき翼を濱風に弄して飛ぶを見るも亦た、勇ましき、秋の氣をたすくるなる可し。之れも亦た吾が「物語」の料か。

女島に山あり。以前は小島ならまし。愛らしき小山なり。樹木繁る。日置白水氏、先日語るらく、鳩之に集まる、遊獵者のチャームなりと。其をきゝて、此小山愈々吾には何となく愛らし。其の蔭に小村あり。家の数は十數個もあらんか。河の口、濱風の衝にありて女島の野らをひかゆ。吾に

とりて愛らしき村なり。亦た「物語」の料を供する多かる可し。吾此村に如何なる人物と如何なる物語りを見出す可き。此村の歴史も却つて面白からん。何時かはさぐらまし。

魚せり場。之れ亦た「物語」の料ぞかし。其處に集まる漁父、老翁、少女、若者、皆なそれらの生命を此世に保つが故に、皆なそれらの深き物語りを保つなる可し。昨日、茲にて、たけりのゝする男を見ぬ。彼は何者ぞ。之れ亦た何かの物語の料ならまし。

午後は湖處子作「ウオーズウォルス傳」を讀みて讀み了はりぬ。此書は兩三日前徳富氏より、「平民叢書」一八冊「十二文豪」四冊贈られたりし中の一ツなり。一昨日の夕、今井氏に書狀を送る。

昨日午後四時より警露館の宴會に出席す。毛利氏の邸内に開かれし者なり。立食の饗應あり。土地の上級人士の集會なり。五六十名を超ゆ。夜、觀察の爲め、獨り散歩す。北町の寂びしき士族邸を横ぎり、古河町の暗き裏町を過ぎ、船と町に至り、そこにて長田氏に遇ひ、伴ふて歸り、路にわかれて歸宅す。此のさびしき市街！ウオーズウォルスが村落を見たる同情を以て觀せしめよ。意味深き物語りなからめや。市街にすむ人々も亦た人間なり。天地間に於ける人間ならん。其の生存、生活は意味ある者に相違なし。或はラヴ、或は惡、或は高き感情、皆な彼等を動かす者な

ぬらはなし。うす暗き燈障子にうつりたる家、戸しまりて人け密しき家、軒破れてかたむける家、笑ふ聲のもるゝ家、かの鍛冶屋、彼の桶屋、彼の乞食、彼の子供等、彼の理髮所、彼の井戸、豈に意味深き物語なしとせんや。記憶せよ。皆な天地間に存し、此自然の中に起る事實なり。高き所より見下ろせ。豈に深趣ある物語なしとせんや。吾が天職は人々が一層深き注意、感情を以て自然と此の人生とを見んことの爲めに盡すにあり。

見よ。今日も、うしろ峠の美しき山の平野より、白き煙立ち登るなり。此白き煙、又た「物語」の料なり。吾は此をたく人を想像し、其の一生を想像し、其の運命を想像し、同情の涙なしとせんや。生死のつきざる海より此白煙の立ち登るを見よ。人生と此白煙！何のハーモニイなしと思ふは非なり。

人類に意味ありとせば、其歴史に意味あり。其歴史に意味ありとせば、之を導く偉人は意味ある者ならずや。

かく思ふ時は吾が望かゞやき、吾が心よろこび、思はず人間の爲めに萬歳を連呼せずんばあらず。

彼のクライスト、彼の孔子、彼の釋迦或はソクラテス、或はプラトーン、其他各國各時代に現はれたる吾等の同類中の偉大なる者よ。卿等は實に人間の希望なり。

生るゝ者は死す。死したる者は生れたる者なり。然らば彼の己に死して此世に在らぬ人々と雖も吾等の同胞なり。生き居る者と何ぞえらばん。生き居る者も死ねばなり。嗚呼此宇宙！此人生！生死！希望！災害！美妙！愛情！友義！人情！深し々々其の意味深し。吾をして戰慄せしむ。

「詩」！人間の人間を驚きたる聲！高く深く強き聲かな。

如何に送るも、人なる以上は、其人の一生は「人生」なり。人生！人生！然らば則ち天地間に於ける人間に取りて最大の事實なり。吾は人なり。

午後登校授業す。四時歸宅、散歩に出づ。獨り牛つほ村の前を過ぐ。收穫の時季ゆゑ、農夫悉く野に在り。牛つほより通ずる一路、堀に至りて他の道と合する邊は若者群集せり。刈る女の群あり。のをつくる男あり。稻を打つ者あり。大さはぎ也。紅葉は夕陽をうけて美なること言ふ許りなし。牛つほ村の後に當る山に登り、夕陽の遠景を眺む。靜に祈る。

六日。

見よ、またも彼の山に煙たち登るなり。朝霧をへだて、山の麓ろに見ゆる其うちに、白銀色の煙たちのほるなり。彼の山は昨日遊びし山なり。

今日の日も終はりて既に十二時を打ちぬ。今日一日は校務に追はれて過ぎぬ。薄暮山名早馬氏來話。カーライル「英雄論」「十九世紀大勢」「カーライル傳」を貸す。感話す。氏亦た感じたるが如し。

昨日の事を記さん。

昨日登りたる山は俗に十二段と稱する由を、本日、飯沼氏より聞く。吾窓よりの眺めの餘りに美しさに堪へ兼ね、昨日遂に此山に登りぬ。八時過ぎ、弟と共に家を出づ。無類の好天氣なり。船土町の河岸より川船に乗りて、木立と謂ふ村の川岸に着す。此間一里を少しく超ゆ。同船者は吾と弟とを除きて七人。中、女三人。彼等の談話が吾が耳に新なりき。凡て此人々の談話は耳に新なり。船頭は老ひたれど逞ましけなる男なり。船ゆるやかに河流を渡る心地の面白さ。吾に初めての事也。兩岸の紅葉、岸頭の茅屋、之れをかこむまがき、其傍に立つ田舎娘、青びかる淵、きびわるけのうづ、皆吾が目にもげらしからぬはなし。此の河船もたしかに吾が物語の料なりと思ふ。之

れによりて往復する田舎の民、其婦、其嬬、其少女、一々たゞさば、悉く、相應の美しき物語をもたぬはなかるまじと思はる。同情に堪へぬは此等の生涯なり。

裏代峠の絶頂に登り、此處にて茶屋の婦に、十二段の絶頂に達すべき道を問ふ。彼女云ふ、これよりは道らしき道あるなし、嘗て自ら試みたれど餘りに難道なりし爲めひき回へしぬと。吾等元來剛情者なるが故に其道によりて進む。果して其難路名状す可からず。荆棘の爲めに閉ぢられて進退することしばし。たま／＼小さき蹄の跡を見出しぬ。是れ野猪のにあらずば鹿の足跡なり。吾等おそる。

遂に一條の道に出づ。これに力を得て山嶺を目がけて登る。松の老株の下に石地あり。其傍に一老樵憩ふ。彼れ親切に道を教へぬ。マイケルを想ひ出して、又た此老翁を思ふ也。

山嶺に達したる時は四圍の光景餘りに美に、餘りに大に、餘りに全きが爲め、感激して涙下らんとしぬ。只だ名状し難き鼓動の心底に激せるを見る也。

太平洋は東にひらき、北に四國の地、手にとるが如く近く現はれ、西及び南は只だ見る、山の背に山起り、山の頂に山立ち、波の如く潮の如く其壯觀無類なり。最後の煙山遂に天外の雲に入るが如きに至りては、人をして一種のメラ、ン、コ、ッ、の情あらしむ。又た遙かに周防の島嶼、多分祝島

らしき者を眺め得たり。

雲の美や、空の美や、山の美や、海の美や、ア、此地球上の美は己に完き也。

此山の絶頂に「一等三角點」あり。此に登りて、坐して此絶景を眺め得たり。大なる自然に對する毎に自然は吾に近くなり、吾は自然に打たるゝ也。自然の大を見る毎に人生の不可思議、靈妙を感ず。人類の歴史は幻の如く吾の前に、其最初第一の原始人より最後第一黄金時代の子との間の人類の歴史の縮圖精神を示すなり。生死の窮りなき海は、眼下に横はるを見る。

七日。

吾茲に生れて而して周圍の自然の美を感受する能はざる程、耻ず可きはあらざるを知る也。何となれば、彼の心の眼は心の汚、心の暗の反射物にのみ注げばなり。

自然を思ひ、人間を思ひ、人類の歴史を思ひ、人の生活を思ふ。思ふて止む能はず。嗚呼思ふて止む能はず。

十二段より歸路、又河船に乗る。船頭只だ吾等兩人の爲めに船を行る。此船頭は曩きの船頭とは

別人なり。されど等しく老人なり。夕陽已に斜に秋の晴天を照すに當り、船ゆるやかに河流を渡る、船頭は嘗て長崎に在りて黒船も造りたる事ありと自から語る。其述懐は人をして人生の経過を思はしむ。吾此老人を忘るゝ能はず。何となれば、彼を一個のソールとして天地間に於ける人間の生涯となせば也。

此老翁の一生と雖も、必ず深き物語ある事必せり。彼何故に船大工となりしか。彼の小兒の時代は如何なりしぞ。彼の親は如何。彼長崎に在る時は如何なりしぞ。彼何故に歸國せしぞ。而して今は一艘の小舟をこぎて人をわたし、以て其生活をつゞけねばならぬに至りたる乎。彼に妻あらざる乎。彼に小兒あらぬ乎。今ある乎、なき乎。彼一生の悲喜哀傷は如何。若し此の如く想像し來れば、此一個の翁と雖も必ず大なる物語あるべし。嗚呼此老人が一生は如何なる生命なるぞ。

回想すれば一昨日の遠行は一個の詩なり。美哉自然、而して其間に多くの此自然と調和する人間を見たり。老樵夫、老船頭、多くの農夫、皆な美しき配合を吾が想像の裡に形づくる也。

八日。

秋雲、十二段の峰をこめて、四面の風物呼喚たる色ありけり。雨終に降り來りぬ。去れど今已に止

みて、天何時の間にか晴れ、滿空の星彩ひとしほあきらかなり。

本日は水曜日なり。祈禱會に出でず。校務に従ふは常の如し。

吾が此頃の境遇は決して幸福なりと言ふ可からず。美なる自然に接し、目新らしき生活を見て大に得る所あるには相違なけれども、校務の爲め、専ら文學者としての天職を充分盡すひま少なき事は吾に取りて最も不幸と言はざる可からず。心はあせれども暇なきを如何せん。されど此不幸らしく見ゆる者も神は必ず吾が爲に結句、幸なる事たらしめ給ふを信するが故に、只だ吾は勤む丈けを勉むるの外あらず。

ウオーズウォルスの「逍遙遊」を読みかけしも未だ進まず。讀まんと欲する書は少なきに非ず。吾が實に憐れなる架上にさへも有益なる書多し。吾は勿論、觀察者なり。故に讀むよりも寧ろ觀る方の傾向を有する也。されど吾は大に讀まん事を希ふて止む能はず。古今東西の思想、感情、事實はなる可く廣く深く知らん事を希ふ也。

吾は讀まざる可からず。而して讀むのひま少なし。

九日。

相も變らず、吾の讀書の時間は少なし。今日は只だ竹越氏の著「マコーレー傳」を少しく讀みたるのみなり。

されど讀書少なきを以て吾の感動は少なしと言ふ可からず。吾の信仰と思想と感情とは次第に進みつゝあるなり。

吾人間を重じ人生を信するが故に、固より人間の事實を貴ぶ也。事實はどまでも事實なり。歴史は事實の記載として重んず可し。傳記は人物の事實の記載として重んず可し。されど吾怪まざるを得ず。彼の世に歴史に重きを置き事實を貴ぶ人士にして、多く、或は理想を輕ろしめ哲理をいやしめ、之れを以て空想なりとなすを。

吾の眼には歴史的事實のみを事實として映ぜざる也。理想も事實なり。想像も事實なり。人間が其の心に働かす事實なり。天地間の事、事實ならぬはなし。事實とは大なる言葉として吾には響く。

十二日、日曜日。

十日、十一日忽ち過ぎぬ。

吾何を爲せしか。吾何を感じしか。吾幾何の進歩を爲せしか。

日は去り日は来る。夜は明けて又た暮る。毎日爲す所、依然として同じ事なり。希望は夢の如く、信仰は煙の如し。夢に満足し、煙に安心す。日々夜々夢を追ひ煙に出入す。畢竟遂に如何。

冥想して人類の事を想ひ、沈思して自然の事を思ひ、生を思ひ死を思ふ。思ひ思ふて止む能はず。止む能はずと雖も其間又た安然として平氣なるは何ぞや。

彼は弱し。故に熱中する能はざる也。彼は愚かなり。故に忽ち忘り忽ち忘る。彼は淺薄なり。故に得たりとなす。

而かも彼れ人類と自然とを忘るゝ能はず。彼は自らの人たるを忘るゝ能はず。

彼今や一度び冥想すれば、人類を直ちに此大自然の中に見出すなり。彼自らを人類の一個として見出すなり。又自らを直ちに自然、此不思議、無窮、無限なる自然の中に見出すなり。

彼は最早や、自然と人間とを關係なく思ふ能はず。人情を忘るゝ能はず。而し遂に愛、美、眞の法則の根元を神に歸せざるを得ざる也。

彼「靈魂不死」を信ぜざらんと欲するも能はず。彼は永久の命信をじて疑ふ能はず。彼最早死を懼

れざる可し。

嗚呼愛す可き同胞よ。山に生れて山に死し、野に生れて野に死し、村に生れて村に死し、生れて河に手を洗ひ、死して岸に葬らるゝ吾が愛す可き同胞よ。ヴァニテイ！に苦みたる心を轉じて、靜かに御身が一生を思ふ時は、始めて人生の眞面目なる樂を悟る也。深き意味を感じる也。

十四日。

死てふ法則が吾の上、人の上に嚴格に行はれつゝ、ある事實に對して戰慄するは當然の事なり。此無窮の時間と無邊の空間とにより吾が前に現はるゝ此大自然、吾嚴然として其の中に立つに非ずや。仰けは無数の星光輝々として美妙靈妙なる哉。夜は暗を持ち來り朝は光を運ぶ。茲に人類あり。代々窮りて止まず。累々たる墳墓の上、擾々たる世間は立つなり。其意遂に如何。

今日も來りぬ、嗚呼今日も來りぬ。今日の如く明日も來る可し。明日の如く明々日も來る可し。日は登り、日は沈み、星現はれ星又消え、雲わき雨降り、雨止みて日輝く。變化あるが如くして遂に少しの變化なきモノト、ミイの宇宙に寄する生も亦たモノト、ミイなる哉。

人間！不思議千萬の者なる哉。人間に在りては人間程不思議なる者あらじ。又た人間程大なる者

あらじ。

人情ヒユマニテオーと自然と何の關係もなき者ならば、信仰は起ざる也。人情なる哉。吾は人情を信す。自然、大なる自然、吾は自然の美妙を神に歸す。故に神聖なる者を信仰す。

昨日午後牛つほ村を探險す。此村の奥に墓地あり。山の谷間に在り。古墳累々として並ぶ。古き者は白苔之を覆ひ刻字を埋む。嗚呼此村！此村！此村の人々！此墳墓！吾れには大なる默示の如し。

吾が立つ處は宇宙にして、吾は人なり。嗚呼吾は人にして茲は宇宙なり。此事實はあらゆる事實の最初の事實に非ずや。

宇宙なり。茲は宇宙なり、而して吾は人なり。嗚呼此の恐ろしき事實より吾を救ふ者は只だ神の信仰、義務の念、永遠の生命なる哉。

眠に就くに當りて今日の事を記す可し。感情を記すべし。事實と思想とを記さん。午前は下見をなす。午後校務あり。愛山氏著「荻生徂徠」を読み始む。夜校務を終へて歸り「荻生徂徠」を読み、ウオーズウォルス詩「道行遊」を読む。

「事實」天地間に於ける「事實」。事實を、天地間に於ける、然り此人間の佳む自然の大界に於ける事實として感じ得るに至らば大なる進歩なり。如何なる智識も如何なる事實も此感なくして心に入り來りたる者は空。のみまほろしのみ。而し今や稍や、益々此感を加ふるに至りぬ。之れ明らかに吾の進歩なり。

事實。然り若し此大自然界に於ける事實として見る可くんば此美なる自然、月あり花あり星あり水ある自然と、例へばイエス若しくはマイケルの存在てふ事實と、其間に必ず微妙のハモニイなる可からず。事實。然り。此感を以てして而して凡ての事實を觀て對照默考せよ。得る所あるや必せり。

最先に、吾自らの此存在は事實なり。此宇宙は事實なり。

次に此宇宙の法則の不思議なるは事實なり。其無限永久なるも事實なり。

人間の死するは事實なり。生れたる者の死するは事實なり。生れたる者を人間と云ふ故に、生死は人間最初の事實なり。歴史は事實なり。

百姓、山民、村人は事實なり。英雄、偉人は事實なり。

事實、事實！若し想像の馬を驅つて之を追はば無数の事實。

嗚呼、此等事實の天地間に於ける對照、これぞ大感情、大思想、大信仰が若しくは大失望の源なり。

吾は此對照を好み、常に自ら試む。

十五日。

己に事實なり。人間は事實なり。自然は事實なり。其不思議なる關係も亦た事實なり。

然らば則ち移り行き變り行く人の世程不思議なる者あるか。人間は事實なり。天地は事實なり。

而して人世變遷は事實なり。己に事實なり。人間の人情、人間の健忘、感情凡て之れ大なる事實

ならざる可からず。世は移り行くなり。其處に人は生れて存在するなり。而して死に行くなり。

此事實は意味深き事實ならずや。

吾は人間を重じ人間を貴び、人間を失望せず。人間は神聖なるものゝ現象にして、死して永久の

命に入る者也。

人事はまじめの事也。

故に吾は人間を動かす美の力、善の力、其の他人間の深き情を動かす現象事實に重きを置く也。

美なるかな星！汝は人間の頭上に巖然として輝きつゝあるなり。美なるかな花。あさましきかな

戀の情。人間人生が事實にして、天地が事實にして、人生が希望にして、宇宙が進化にして、永遠の命は大事實にして、神の存在、神の愛が大事實たる以上は、大に吾が命を樂み、人事を樂み、深く觀ん事を希ひ、深く思はん事を希ふ也。

事實！これを以て吾歴史を愛す。歴史は事實なればなり。過去と云ふ勿れ。只だ事實と云へ。然り人間の事實と云へ。何となれば今も忽ち過去とならん。未來も何時しか過去とならん。人間よ時を見る勿れ事實を見よ。

ルーソー之れ大なる事實なり！

十七日。

月明かなり。

昨日午後收二と共に城山に登る。これより先き十二日午後學校生等と共に登る。城山の頂に城趾あり。城趾只だ石垣を残すのみ。殘墟累々秋草と灌木と蔓草と松風と紅葉と相交錯紛々たるを見る也。

自然は人間の歴史を顧みざる也。かれは只だなさんと欲するまゝに爲す也。人間は其間に生死浮沈するなり。

今日午後又た收二と共に城山に登り草木植物を採集す。

昨日收二より藤形夫婦に關する話及び山縣夫婦に關する話、又た神田の老母及び其嫁に關する話を聞く。

事實。嗚呼此の事實を如何せん。

天の星、月、雲、光、風、地の草、木、花、石、人間の歴史、生活、性質、境遇、關係、生死、情、慾、恨、戀、不幸災厄、幸運榮達、ア、此事實、彼の事實、人は只此錯亂混雜せる事實の裡に盲目的に起居するに過ぎざる可きか。

自然！宇宙、固より不思議なり。人間！嗚呼人間に至りては更に不思議に非ざる乎。彼は自然の法則に支配されつゝあるなり。而して不思議なるは其生活、運命、及びドラマなり。

二十日。

二十日と稱すと雖も己に十二時、夜半の鐘は打ちぬ。吾今坐して此記を書す可し。窓外の月光將

に寂寞をたすけつゝあるなり。

十八日は土曜日なりき。午後二時過ぎ學校より歸りて、弟を伴ひ直ちに尺間山に向て發す。固より前以て計畫し置きたりし也。天氣は近頃好日のみ打ち續き、秋空、白雲、紅葉、夕陽の美は連日益々其美を表はす。

此日又た好天氣。尺間山に登る二道あり。一は床木村より急坂直ちに攀づる者、一は愛宕社の後より山脈をつたふ者。吾等先きに床木より登りしを以て此度は山脈の道をとる。尺間の頂に至らぬうち己に日暮れ、天光夜と共に蒼みて深く遠くなり、月色冷やかに照らしはじめぬ。夕陽の美を山脈の頂に道すから眺めて、眞に自然の一なるを感ず。未だ母たるを感ずる能はず。

山頂に人を宿す家、二三あり。勿論ふすほれたる茅屋なれども、尺間神社の信者は之に籠るなり。吾等兄弟亦た其の一に宿る。宿に一眼を失ひたる女あり。三十五六歳許り、他に十三四の少女あり、只だ此の二人のみ。

吾等爐邊に坐し、焰々燃え上る火に對してむすびを食ふ。

月を巖頭に眺む。望むで極まる處を知らず。下界只だ見る朦朧たり。而し天上明月のあるあり。身只だ自然の中に在るを感ず。

二十一日。

有りのまゝを言へば、吾未だ甚だ高調ならず。俗感常に感情思慮の空氣となりて時々之を呼吸し而かも知らざる也。

有りのまゝに言へば、天地は吾が爲めに未だ全然神聖ならず。人生未だ全く神聖ならざるなり。更に言ひ換ゆれば吾未だ全く宗教的なる能はざる也。只だ流れゆくなり。

(昨夜の説の續き) 其夜は此茅屋に眠る。かゝる家に眠りたるはこれが初めなり。

此家の婦、其命運、其迷信、之れ吾に取りて大なる事實なり。少女は又た尺間社に籠るため送られてある者の由。

十九日早朝、旭の海面より上ほるを見る。其の美未だ見ざる所の者たり。

武石氏と三人、此日彦岳にめぐり、一日を山より山の跋涉に暮らしぬ。霞ヶ浦に下りて歸宅す。一の鳥居の一軒屋、其住人、此の事實は面白き意味を含む。

自然。生活の實際。之れ吾が深く觀んと欲する所の者なり。事實なる哉。見よ人生の事實を見よ。天の下に地の上に人間が暮らしつゝある實際の事實を見よ。而して自然を見よ。

二十二日。

吾今にして初めて哲學者と詩人、論理家と豫言者との間に大なる隔離のある事を知りぬ。これを吾が經驗に徴するに、吾が天地人生に對する推究の如何に森嚴に、血なく涙なく一言以て言へば命なきぞ。されど或は明光を見て卒然として感じ、少女の哀歌を聞き暗然として感ずる時は、如何に人生の深玄にして哀痛幽愁の靈泉を湛ゆるよ。それ哀痛幽愁なりと雖も、眞の信仰眞の思想はこの中より生ず。悠々たり自然、吾爾を愛し爾をしたひ、爾を哭し爾を戀ふ。爾吾を載せ、又た吾を埋む。嗚呼吾爾が無限無窮の中に在り。美なる哉自然、恐ろしき哉自然、爾吾を載せ吾を包む。吾ありて爾あり、爾ありて吾あり。

二十三日。

眞面目なる生涯、眞面目なる勉強、眞面目なる苦心、これ義務を感じ人生を思ひ神聖を信する人の本色ならずや。

されどつらく観るに、世に眞面目なる者甚だ少なし。なす事、云ふ事、務むる事、企つる事、多くは惰力により、習慣により、情慾によらざる者ほとんどまれなり。吾亦た實に然るを知る。人は何故に容易に眞面目なる能はざるか、言ふ迄でもなく彼れシンセリテイならざれば也。

悲壯なる戀。これ偉丈夫の戀なり。

生活！人間が此世界の上に於て、取りし生活は實に様々なり。數ふるに遑なからんとす。嗚呼、牧夫の生活、海士の生活、農夫の生活、官吏の生活、僧侶の生活、學者の生活、詩人の生活、而して猶ほ其中に種々の變化ある可し。想像し來れば實に様々の人の生活なる哉。それ此の如く様々なり。面かも等しく之れ地の上、天の下、同じ月に照らされ、同じ日に照らされ、同じ花を見、同じ空氣を呼吸したるに過ぎず。大自然に對する人として何のかはりあらんや。それ何のかはりあらん。而かも其の生活の様々、其の境遇の種々は、人をして人の間に大なる差異ある如く感ぜしむ。大なる溝あるを感ぜしむ。シムパツシーの及ぶ所甚だせまし。異なる哉。

何故に人は物を片手にて爲すぞ。片足にて歩むぞ。片目にて見るぞ。何故に一事一物全力をこめてなさぬぞ。否な何故に全力をこむるに足らぬ事を爲すぞ。否な果して物にそれ程の差異なかるべきか、全力をこむれば、其事則ち大なる効果を來さざるか。然り。然ら多くは其勞、其時を眞面目